
P r i v a t e R o o m

末永優希

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

P r i v a t e R o o m

【Nコード】

N 4 9 1 8 E

【作者名】

末永優希

【あらすじ】

松永彩子は矢島恒樹と二年ぶりに再会を果たした。恒樹は彩子を変わっていないと言うが、彩子はその頃とは何もかもが変わってしまったと感じていた。愛が錯綜する。依存が形成され、どんどん落ちていくだけだった。

透の細い指が赤い飴玉をつまみ上げるのを、彩子はじっと眺めていた。

それは指先から口内へと運ばれる。そして甘味が広がり始めたころ、飴玉は音を立てて、そして砕けた。

透はよく飴玉を食べていた。舐めるのではなく食べるのが常だった。口に含み、ほんの少しの間舐めていたかと思うと、あのガリツという音とともに飴玉が割れる。そしてそれを食べてしまう。

これはいわゆる「噛み癖」というものであると彩子は理解していた。実際、透にはストローの先やタバコのフィルターを噛む癖があることに気づいたからだ。

透の机の右端には飴玉の入ったボトルがある。その机にはたくさんの本が雑然と置かれているのだが、色鮮やかな飴玉の入ったボトルは雑然としたものの中にあっても目を引く。

この部屋は壁も家具も白っぽいのだが、透がベッドカバーも白にしているためこの部屋は白一色だ。だからあのボトルが妙に感じる。ボトルは赤、黄、橙、青の飴玉でいっぱいになっている。赤はイチゴ、黄はレモン、橙はオレンジ、青はソーダの味だった。透によるこの鮮やかな色は合成着色料によるものとのことだった。

彩子は何故そんなに飴ばかりを食べているのかを尋ねたことがある。

そのときの透の返答は、好きだから、との一言だけであった。

透の言葉はいつも何か足りない。彩子が彼女の足りない言葉を理解できるようになるまでには少々時間を要したが、今では言わんとしていることが分かるようになった。透は思ったままを口にしていないのではない。少し考え込んで、それでもなお残ったその言葉だけを発しているだけだ。

松永彩子と宮村透が初めて会ったのはもう八年以上前になる。

二人は小学校の六年生の時、初めて同じクラスになったのだが、当時は特に仲がよかったというわけではない。二人ともどちらかと言えば、積極的に人と関わろうとする質ではない。けれどそれが却って二人に話をする機会を多くもたらした。その後中学が別になり、大学に至るまで一度も会うことはなかった。けれども手紙のやり取りだけは続けていた。手紙は気が向いたときに書かれ、その内容もまた勝手気ままに綴られているものだった。

そんな六年間にも及ぶやり取りの中で互いを良き理解者であると認識していた。

そんな二人が大学で出会ったのは偶然で、互いに示し合わせていたわけではなかった。手紙は年に二度ほどのやり取りのため、志望校やその可否すら伝えてはいなかったのだ。長年会ってないため、構内ですれ違うだけではなかなか気づくことができなかった。事務室前の掲示板で名前を見つけるまで互いの存在に気がつかず、気づいた頃にはもう既に初夏になっていた。

二人の下宿先もすぐ近くである。これほど近ければ構外で会うこともできそうなものだが、生活の規則性が微妙にずれているためか、互いの部屋を行き来しなければその他の場所で会うことは滅多になかった。

彩子は数日後、二年間いたマンションを出ることになっている。

次の引越先はここからさほど遠くはない。電車で三十分ほどの距離だ。

透は奨学生で学費がほとんどかからない。そのため学費を家賃に充てることができるため大学近くのマンションを借りていた。

透も彩子も自宅から大学まで少し遠いが決して通えないわけではない。しかし朝の満員電車で毎日悩まされることを考えれば、大学に徒歩で通える場所に部屋を借りたいと思うのも当然だろう。特に彩子は中学も高校もこの近くであり、その六年間で通学に伴う煩わしさに心底うんざりしてしまっていた。

透の部屋は小綺麗なワンルूमマンションだが、彼女が広さより新しさにこだわったため、部屋はかなり狭い。クローゼットが備え付けてあるのだが、机にベッドに本棚を置けば、その余分に何かを置くことはまず無理である。

透の部屋は自分の部屋とは全く違つたと彩子は常々思う。机の上こそ散らかっているものの、その他は綺麗に整頓されている。というよりも物が置かれていない。

彩子の部屋は透の部屋よりも一つの部屋が広く、部屋数も多い。にもかかわらずにテレビやオーディオ、クローゼットには入りきらなかつた鞆や靴が床に並べてあるため、透の部屋に比べると酷い有様だった。

透によると彩子の部屋は時間の流れが分からなくなるような部屋なのだそうだ。まずあの部屋には時計がない。また、カレンダーがその機能を果たしていなかった。彩子の部屋にかかっているカレンダーは昨年の6月のままである。彩子はカレンダーをめくるのが苦手であった。単に忘れるから、というだけでなく、気に入った絵柄のある月はその次の月になつてもめくろうとしない。つまりカレンダーではなくポスターの役割を果たしてしまっている。年が変わつてもそのカレンダーは壁にある始末だった。

そういつたこともあり、必然的に彩子が透の部屋を訪れることが多くなつていった。

今、彩子はベッドに寝転んで、イヤホンで音楽を聴きながら本を読んでいる。

一方、透は机に向かつて課題をこなしている。

透は、どこかつまらなそうに長い髪を弄んでいる彩子の姿を横目で見た。彩子がつまらなそうにしているのは、数日後の引越しのために娯楽の類のほとんどを片付けてしまい、手元に残つた娯楽が飽きるほど読んだ文庫本一冊であるからだ。彩子が何故わざわざその本を選んだのか、透には全く理解ができない。

二人が透の部屋にいる時はたいがい雑談をしているものだったが、

こうして透が机に向かっている時に彩子が室内で勝手にくつろいでいることもよくあった。

透は彩子を煩わしく思っているわけではない。むしろ一人であるより会話はなくとも誰かのいる空間を心地よく感じていた。透は四人兄弟で家がいつも騒がしかった。全く一人の状態というのはかえって落ち着かないものであるということを初めて知った。それを彩子に伝えると、整頓された部屋より多少散らかった部屋の方が落ち着くのと同じだ、などと言われた。それについてはいまいち否定できない部分もあった。

透にとって彩子はどこか安心感を覚える人物であった。

彩子と透は何かを共有しあっているわけではない。むしろそんなものは何もないといってしまうてもいいだろう。何もなければこそ彼らの間には矛盾が生じない。他人でありながら気を使う必要がないのだ。もちろん、彼らが互いに気を使っていないわけではない。ただそれは必要最小限のマナーとしてのものであって、彼らが他者に接するときのものとは明らかに違っている。だから各々が自分の思うように振舞うことが出来る。そしてそれを不満に感じることはない。この関係こそ最良で居心地が良いものであると二人は確信していた。

透は彩子に呼びかけた。ややあって、彩子はイヤホンを外した。

「彩子はどうして家を出たの？」

「どうして、今更そんなこと聞くの？」

「今だからこそ聞くんだけどね。だって必要ないじゃない？ 確かにちょっと遠いけど、引越先だってそれほど近いわけじゃないじゃないし」

彩子は少し考え込んだ後にこう言った。

「……とにかく環境を変えたかったの。それじゃ理由にならない？ それは納得の得られる答えではないのだが、透はそれ以上聞くのを止めた。彩子は再びイヤホンをつける。

透は彩子から目を離し机に向き直ると、すぐさま机の右端に置か

れたボトルから飴玉を取り出し、口に含んだ。これは習慣化されてしまった行為で、透本人にあまり自覚がない。これを今日幾度繰り返したかなど思いつきにもならない。

そして再び課題に取りかかった。

彩子は読み飽きた本を閉じ、透の横顔を眺めた。口の動きから透が飴を舐めているということが伺えた。その直後口の動きが変わり、彩子の耳に飴玉の割れる音が届いた。それは音楽に遮られて聞こえるはずのない音なのだが、今まで幾度となく目にしてきた光景と、それとともに聞こえてきた音が自然に思い出されたのだ。

*

引越したばかりのこの部屋の窓には、まだカーテンは掛けられていない。

彩子は、もう少しゆっくり眠るつもりだったが、差し込む光に眠りが遮られてしまった。一度覚めた目を閉じても次の眠りはなかなかやっては来ない。少しの気怠さを感じながらベッドから這い出た。

欠伸をしながらチェストの上へ目をやる。時計の針は七時を少し回っていた。新しく購入した時計は秒針のないものを選んだ。彩子は時計の秒針の音が嫌いだった。鼓動よりも若干早く一定の音を刻むため、妙な焦燥を感じるからだ。以前寮で使っていたものは秒針の音が大きく、圧迫感を覚えるほどだった。透には壊れたからと伝えていたが、本当はあの時計を使いたくなかっただけだ。

時計の隣にはガラスケースが置かれている。細かい彫刻が施されていて、いかにも繊細な作りであるそのガラス細工を、彩子はずっと大事にしていた。これは彩子の母親の物で、彩子が生まれる前から家にあった。今となっては形見という扱いになる。

彩子は五年前、事故で両親を亡くした。その後、父の弟である叔父の恭介と暮らしていた。父と恭介は一回りも年が離れていたため、

恭介と彩子の年は近い。恭介と兄夫婦は親交が深かったため、恭介と彩子も昔から互いのことをよく見知っていた。

二人は恭介が購入した新しい分譲マンションに引っ越した。今日で引越してから三日目になるが、リビングの端にはまだ荷解きされていないダンボールがいくつか残っている。前の家にあつたものの多くは大量に処分されたのだが、それでもやはり引越し後の片付けには骨を折っていた。

ここ数日の食事は外食かテイクアウトで済ませていた。恭介も彩子も各々の私室の整頓が最優先であり、次にその日のうちに使用する洗面所やバスルームの荷物を片付けていった。リビングのテレビやAV機器周辺も昨日やつと片付いたところだ。最終的に残ったのがキッチンで、まだ調理器具や食器はダンボールの中に納まっている。彩子は今日も朝早く起きてしまったので、残っていたダンボールを片付けることにした。

そしてそれらが片付くと、彩子は外へと出た。彩子は散歩でもするかのように街を歩いた。舗道に植えられた緑樹の葉が揺れている。滑らかに絡みつく春の風が心地よかった。

彩子はこの数日で周辺の店を調べ上げていた。まず、あらかじめチェックしていたベーカリーショップへ行った。雑誌やテレビでも取り上げられている店なので休日の午前中から客の入りはかなりのものだった。あと数分でバゲットが焼きあがると店員が声をかけていたので、他に数種類のパンを選びながらそれを待った。

次にコンビニで様々な食材を購入した。これらの買い物は数十分ほどで済み、彩子は両手に荷物を抱え家路に着いた。

エントランス内の郵便受けには既にいくつかの郵便物が届いていた。郵便受けを開けるのは今日が初めてだった。引っ越しのごたごたでそこまで気が回らなかったのだ。両手が塞がっているため、一度荷物をタイルの上に下ろしてからそれらを手取る。郵便物はほとんどが前の住所に送られていたもので、それらが転送されていた。

エレベーターで五階まで登り、まだ一つしかない鍵を使って502号室へと入った。ダイニングテーブルにパンの入った紙袋とコンビニのレジ袋をドサリと置き、郵便物はリビングのテーブルにまとめて置いた。彩子はソファに腰を下ろして、郵便物を一つずつ選り分けた。郵便物は一通の封書を除いて全て恭介宛てであった。

リビングのドアが開く。

「おはよう、彩」

「おはよう、恭介」

彩子は立ち上がり、ダイニングへ向かう。そしてテーブルの上に買ってきた食料を並べながら言う。

「もうちょっとしたら起こしに行こうと思ってたところだったのよ」

恭介はキッチンの戸棚へ歩み寄り、中のグラスを取り出しながら彩子に話しかける。

「すっかり片付いちやっとな。全部彩がやってくれたんだろ？」

「私は休暇中だし暇だから気にしないで」

彩子は恭介が取り出した二つのグラスにジュースを注ぐ。玉子を焼こうと思っていたのだが恭介が予想外に早く起きてきたため今回は止めた。小さめのケトルに水を注ぎ、火にかける。

恭介は椅子に座り、紙袋の中のパンを物色している。彩子と恭介は食の好みがほとんど同じなので、彩子は自分好みのものを買えば済むことを楽だと思っていた。恭介も彩子も甘党である。

彩子はコンビニで買ったサラダを恭介の前に置いた。そして羽織っていたコートを向かい側の椅子の背に掛け、その椅子に腰を下ろした。

「こうやって二人で朝食摂るの久しぶりだよな」

「私が大学入る前だからもう丸二年は経つんじゃない？」

「彩、休暇中もろくに戻ってこなかっただろ？すぐ近くなのに」

「すぐ近くだからこそ何となく帰りそびれちゃうのよ。それに帰っても恭介がいなかったの方が多かったし」

彩子は叔父である恭介のことを名前で呼ぶ。これは二十歳の彩子

にとつてまだ三五歳の恭介を叔父と呼ぶことに抵抗があつたからだ。二人は仲が良かった。二人で食事や買い物に出歩くことがよくある。そういった時によく認識することになるのが、自分たちは風貌がよく似ているということだ。男女の違いや年の差を考慮せずとも、一目で血縁関係のある者だと分かるそうだ。大きめの切れ長の瞳に細い鼻など細かいパーツもさることながら、全体から受ける印象に非常に近いものがあつた。

こうして向かい合つて座っていると奇妙な感覚に陥る。恭介が左利きなのでまるで鏡を見ているように二人の動きが重なる。生活を共にするようになってから気づいたことだが、物事の捉え方や趣向、好みその他いろんな面で共通することが多かった。相手の考えていることが手に取るように分かる。相手の行動がまるで自分の内面をそのまま映し出しているようなものだと感じるものがしばしばあつた。

キッチンから蒸気の音が聞こえる。火を止めに彩子は立ち上がった。そして棚からカップを取り出し、インスタントのコーヒーを作つた。砂糖やミルクを買い忘れたことに気づいたが、恭介はいつも朝だけはブラックなので別に構わないとも思つた。

恭介にカップを手渡す。恭介はそれを左手で持つた。

彩子は元の席に着いた。

恭介が思い出したように問いかける。

「そついやポストに……」

彼の言葉に彩子のカップを持つ手がビクリと震えた。少し多めに注がれたコーヒーが波打つ。

「新聞、まだ契約してないから来てるわけないよな？」

「あ、うん。恭介宛ての郵便はいくつか来てたけど新聞はなかったよ」

別のところの新聞に変える良いきっかけになつた、などと恭介は呟いていた。彩子はそのことについて適当な相槌を打つた。先ほど恭介がリビングの扉を開けようとしたとき、とつさに彩子は自分宛

ての封書をコートポケットに押し込んでいた。あの封書はエアメルで、彩子にとって意外な相手からだった。それを恭介には知られなくなかった。

「どうかした？」

手が止まったままの彩子に恭介が訝しげに尋ねる。

「ううん、なんでもない」

とっさに作った笑顔を怪しまれなかったかと不安を感じたが、すぐに恭介が別の話題を振ってきたので胸を撫で下ろした。

「春休みっていつまで？」

彩子はコーヒーを一口飲む。

「三日までだけど、それまでも行かなきゃいけないと思う」

「じゃあもう終わりなんだな。何だか日が経つの早すぎる」

「恭介、いつもそれ言ってる」

今度はごく自然に笑っているだろうと彩子は思った。

当たり障りのない会話を楽しむぐらいの余裕はあるつもりだ。それに対する自分の対応は決して悪くないものだと思っている。けれど、その会話が単に当たり障りがないだけでなく、何らかの駆け引きが含まれているとするなら話は別である。

彩子から見て、恭介は非常に頭の良い人間だった。人間観察が好きだと冗談めかして話しているのを聞いたことがあるが、実際、彼は洞察力に優れていた。この人の前で嘘を吐くのは骨が折れる。また、彼は人の扱いに慣れており、人を誘導することに長けていた。恭介と向き合っていると何かを見透かされているような気分になる。だから上手く誤魔化したつもりになっているだけかもしれないという不安に駆られる。誤魔化されているふりをしているだけではないのか、とさえ思ってしまうのは、恭介と深く関わったことのある者にしか分からないことだろう。

食事が終わり、彩子は自室に戻った。コートのポケットから取り出した手紙は所々に皺が寄っていた。

差出人の名を眺める。ふと、この人はこんな字を書く人だっただ

ろつか、と妙なことを思った。それまでと印象が異なる気がするのは字がそれまでのものより多少粗っぽいからかもしれない。今まで恒樹は手紙を一通、葉書を二枚送ってきたことがあった。この手紙の宛先は以前の住所になっている。引越しのことを伝えていないのだから当然だ。

突然ふらりと送られてくるエメールはいつも彩子の心を乱した。返信したこともあるのだが、次の手紙は半年ほど先になるのであまり込み入った内容になることはなかった。

どうやら自分はこのいう一方的で噛み合わない手紙のやり取りに縁があるようだ。

ハサミで封筒の端を切り、中身を取り出した。

彩子、久しぶりだね。

元気ですか？

こちらはまだ寒いけれど、もうそっちは暖かくなってるんだろ
うね。

急なことです、しばらく日本に戻れることになりました。

帰国の日は三月二十八日を予定しています。

できれば会いたいと思っています。

また後日連絡します。

恒樹

彩子は手紙を折りたたんで封筒にしまい、ベッドに仰向けに寝転がる。

恒樹からの手紙はお決まりの挨拶と要件だけを簡潔に述べた文面で、これを彩子が読むのに要した時間はほんの十数秒だった。けれどこの短い文から柔らかく暖かなものが胸に広がってゆくのを感じ

た。

恒樹が帰国予定の二八日とは今日の日付である。転送の手間で届くのが遅れたのだろう。離陸時刻を書いて寄こさなかったのは恒樹らしいと彩子は思う。もっと早くにこの手紙を受け取り、到着時刻も記載されていたとして、果たして自分は空港まで行ったのかというところが彩子には疑問だった。以前なら空港まで駆けつけ、彼が搭乗口から出てくるのを待っていたかもしれない。けれど今では、恒樹が離陸時刻を書かなかったことに少し感謝してさえいる。

矢島恒樹は二年前に上海の支店へ異動となっていた。恒樹の勤める会社は大手の紡績会社で、アジア進出への足がかりとして数年前から中国に支店を置くプロジェクトが進められていた。そして恒樹の直属の上司が支店長となり、彼に随行するという形での上海支店異動は誰の目からみても栄転であった。だから彩子もそれを喜ばないことはなかった。今まで通りに会えなくなるという寂しさと天秤にかけることすらしなかった。

自分たちを恋人と呼ぶのはあまりにも不釣合いだと思っていた。また、客観的に自分たちの関係がそうだった括りに含まれるのだとしても、あえてそれを意識しないようにしている節が互いにあった。彩子は恒樹と一緒にいると居心地良く感じていた。これは透に抱くものとは少し違っており、何かを共有しているという思いがあった。

最後に恒樹からの手紙を受け取ったのは三ヶ月ほど前だった。手紙といってもそれはクリスマスカードで、その意外さに思わず苦笑したものだ。欧州に滞在しているならまだしも同じアジアにいてそれまで興味のなかったことをする恒樹を可笑しく思った。

また連絡する、と文面にあったが彼がまた手紙を使うとは思えないので、おそらく電話だろう。彩子の携帯の番号は二年前と変わっていない。けれどこの二年、恒樹からの電話がかかってくることはなかった。

彩子はベッドから起き上がり、机の上に置かれた携帯電話を手に

取った。ボタンを操作し、一度は消そうとした番号を液晶に映す。発信ボタンの上に指を置いたが、すぐにその画面を消した。

三年前、恒樹と彩子が初めて会った日も、またその次に会った日も、約束などないただの偶然だった。その約束のない再会に感動を覚えたりもした。だからこそ、彩子は今こうして会う手段について考えていることを馬鹿馬鹿しく思う気持ちが少ないからであるのだ。

恒樹と会うことを望んでいるかと問われれば、決して否定はしない。けれど今後会うことがないとしても、それならそれで構わないとも思っていた。

二年前、恒樹が日本を発つ際、帰国後にまた会いたいとそう言ってくれた。期待をしていたわけではないが、そう言ってくれたことはとても嬉しかった。

手紙の中にあつた「できれば会いたい」という言葉。できれば、というのは控えめな彼らしいようだが、これではただの社交辞令であるようにも思えた。また連絡する、などあまりにも不確定で約束の意味を成さない言葉であることはよく知っている。しばらく日本に戻れるというのであればいくらでも都合をつけられるはずではないか。何を遠慮する必要があるというのだろうか。

短い文であるからこそ、その言葉の一字一句が非常に重いものに感じられた。書いた本人が意図せずに綴った言葉にまで意味を与えようとしてしまう。

今現在の彩子の恒樹に対する感情は、恋愛と呼ぶよりも執着といったほうが正しいのかもしれない。子供じみたストレートでシンプルな感情表現はきつともう自分にはできないだろう。彩子は自分が大人だと思っただけではいかなかったが、悪い意味で自分は大人っぽく、また子供っぽくも思っていた。変な理屈に拘るようになり、聞き分けが悪くなった。だから再会しても恒樹とあの頃のようにはなれないと思った。

*

同じ頃、矢島恒樹は空港に降り立っていた。

日本へ戻るのは二年ぶりだ。一時帰国しようと思えばいくらでも可能だったのだが、どうにも戻る気になれなかった。

勤務自体は以前の職場に戻り、当面は日本で過ごすことになるのだが、出張で支店へ行くことは相変わらず多いと思われる。恒樹は数年前からそのような生活をしてきたため、以前と同じような状態に戻ったと言える。

離発着を知らせるアナウンスが鳴り響いている。今の時期は旅行者が多いため、空港内は人でごった返している。あまりの騒がしさにうんざりしながらも荷物を手に歩き始めた。遠くを見つめると、こちらへ手を振りながら近づいてくる女性が目に入った。恒樹は急ぐこともなく、その方向へ足を進めた。

「……香奈子。久しぶりだね」

「あんまりうれしそうじゃないのね」

香奈子はサングラスを外し、皮肉そうな笑みを浮かべながら言う。彼女がそういう顔をするほど恒樹の顔には不快の色が漂っていた。

「いや・・・まさか来るとは思わなかったから」

「私だつてまさか恒が連絡よこすなんて思わなかったわよ」

恒樹は力のない笑みを作った。彼女は力強い笑みを返し、恒樹と腕を絡めて歩きだした。

二人はタクシーに乗り込む。

何ということもない雑談が続く中、恒樹は諦めに似た感情を覚えた。抗う気力が削がれていく。相変わらずだ、と恒樹は思う。二年ではさして変わるわけではない。いや、きっと何年経とうと変わることはないのだ。

恒樹は自分たちの今の関係を何と言っているのかよく分からなかった。形の上では夫婦だ。けれど海外にいた二年間、ほとんど連絡を取り合わなかった。転勤の一年ほど前には既に別に暮らしており、もはや互いの存在が生活の一部ではなくなっている。それにも関ら

ず、この関係が完全に切れてしまっていると感じたことがないのも事実だ。

香奈子とこうして他愛のない話をしたのは、もうどのぐらい前のことになるのだろう。一度距離をとってしまつと、次にその距離を縮めることが難しくなる。気まずさを保ちながら接することを互いに避け続けた結果が、三年という年月なのだ。

それでも、こうしてしばらく話していれば、空白や隔たりを感じなくなるほどになっていく。それなりに長い付き合いなのだから、当然のことかもしれない。

「疲れてるの？」

しばし黙り込んでいた恒樹に香奈子が尋ねた。恒樹はそれを否定しようと思つたのだが、

「……少し」

ため息混じりにそう答えていた。

「じゃあ、また今度にするわ」

どこかで期待していた反応を得られて、恒樹は安堵した。

自宅前でタクシーから降りる際、香奈子がこう告げた。

「一緒に住む気はないんでしょう？とりあえず、部屋は一通り掃除しておいたわよ」

「いろいろすまないな」

「別に何も漁つてなんてないから安心してよ」

それは意味深な言葉であったが、恒樹はそれを黙殺した。近いうちに会う約束をし、この日はそのまま別れることとなった。

恒樹はタクシーが視界から消えるまで眺め、その後エントランスへ入る。帰国直後は何の感慨もなかったが、さすがに家へ戻れば懐かしいという思いが湧き起こつた。

簡素な部屋だ。そう恒樹は思う。二人で暮らしていた頃はいろんなものが溢れていた。その頃のことを思い出すと、懐かしいというよりも切なくなる。

ここは恒樹が結婚以前から住んでいたマンションであるため、香

奈子が自分の職場に近いマンションへと移り住んだ。表向きは利便性のためということにしているそうだ。

今日、香奈子と会い、言葉を交わした。そしてまた会う約束をした。

さつき香奈子と一緒にいるとき、奇妙な感覚に襲われた。これは十年以上前、香奈子と会った頃に味わった感覚と同じだ。

人には相性というものがある。その相性の良い者同士は何か特別なことがなくても惹かれあうのだろう。相性の悪い者同士であつてもいくつかの状況が重なりあえば、その悪い相性ですら魅力的に感じられることがある。自分たちが出会ったのはまさにそんな時だったのだろうと今になって思う。

自分たちは、決して互いに都合のいい相手ではない。簡単に言えば求めているものが違うのだ。だから意見が折り合うことがなく、衝突することも多かった。衝突を避け、妥協し続けるうちに深い溝ができてしまったように思う。そんな状態が三年以上も続いているのは、全てはタイミングを逃したからなのだと思っている。別れるきっかけを切り出せなかったのも、また、やり直すきっかけが掴めなかったのもそうだ。例えばどちらの方向に転んだとしても、とにかくこの状態からは解放されたい。それが正直な今の気持ちだ。

鞆の中にある携帯が鳴っている。

恒樹は画面を確認した後、電話に出た。

「……あ、もしもし恒樹？」

電話口から聞こえる妙に緊張している声を可笑しく思った。

「そうだよ、彩子」

彩子は途端、弾んだような声になった。

「今日、帰って来たのよね？」

「うん」

「電話ちゃんと繋がってよかった。手紙ね、今日の朝に受け取ったの。引越したばかりで、すぐに受け取れなくて」

「そっか。まあ出したのもギリギリだったしね」

「住所はともかく、電話番号が変わってたらどうやって連絡とるつもりだったの？」

「ああ……そこまで考えてなかった」

「無計画ね」

耳に届く笑い声に、恒樹も自然に笑みが零れた。

「手紙なんて普段書かないだろ？何を書いているのか分からなくて、つい先延ばしにしちゃってさ。しかも筆不精が祟って上手く言葉が出てこなかった」

「うん。すごく簡単な内容でびっくりしちゃった」

彩子との会話は疲れた体を弛緩させ、眠る瞬間のような安らぎをもたらした。

恒樹は自分と彩子と間に恋愛感情は介在していないと思っていたけれど、それはいくらでも変わりうることだろう。

数日後、彩子はリビングでここ何日かの日課となっていたドラマを観ていた。これは何年も前に放送されていたドラマで、当時何度か飛ばした回があつたはずだ。一話ごとに完結するストーリーなので数話飛ばしたところでさして影響はなかった。けれど今日の最終回を含め全話きちんと観ることができたことにはそれなりの充足感があつた。

テーブルの上に置いていた携帯が鳴る。テレビの電源を切り、電話に出た。

「今、家か？」

「そうだけど、どうかしたの？」

出るとすぐに電話口から声が聞こえた。その電話は恭介からで、彼の部屋の机の上にある封筒を探してほしいとのことだった。

電話を受けながら恭介の部屋へと向かう。恭介の机の上には中央にパソコン、その両端には分厚い本が積み上げられ、雑誌や会報が何冊も散らばっていた。

「どのくらいの大きさ？」

本や雑誌をひっくり返しながら問う。途中、雑誌が滑り落ちそうになったのを慌てて空いた手で抑える。

「雑誌ぐらいの大きさ。病院名や住所が印刷されてるヤツだよ。色は薄い水色。それで、中に書類が三枚入ってるはずんだけど」

彼の所望品があつたことを伝えると、

「病院まで持ってきてくれ」
とのことだった。

このように早口で捲くし立てる恭介はとても珍しいものだった。ここから病院までは車で十分程度の距離で、彩子は電車で向かうことにした。このマンションに住み始めてまだ一週間も経っていないが、生活の利便性は今まで暮らしていたどこよりも優れていると

実感していた。最寄りの駅までは歩いて五分もかからない。

彩子は恭介に言われたように救急入り口の方から病院内に入る。

ここは彩子の通う大学の医学部付属病院である。恭介は内科医で、この大学病院にもう十年勤務している。

彩子が恭介の職場に来るのは初めてではない。けれどこんな風に頼み事をされて来るのは初めてだった。そもそも恭介が彩子に何かを頼むということはあまりない。今回のように使い走りのような事を頼むことですらまずないことだ。もっともその逆はそれほど珍しいことではないのだが。

「こういうの珍しいよね」

「助かったよ」

恭介は封筒を受け取りながらすまなそうな顔をした。

「朝そんなに急いでたの？」

「今忙しいんだよ、すごく」

そう言いながら小さく笑い、腰に手を置いた。彩子はそれを見て口元に手をやって笑った。

「何うれしそうにしてんの？」

恭介が怪訝そうな顔をする。彩子はそれを見えますます嬉々とした表情になり、声にもそれが表れていた。

「恭介はいつも余裕だらけで何かに自分のペース乱されることないでしょ？滅多に見れない姿が見れたから何だか楽しい」

「何だよ、それ？」

彩子と恭介は似ている。それは互いに自覚していることだ。けれど彩子は彼のような要領の良さや咄嗟の状況判断力といったことはまるで似ていないと思っていた。そういったことを間近で目にするとき、結局自分は見ただけなのだと思い知らされる。例えば今日のようなつまらないことで優越感を感じるなどあまりに馬鹿げている。それは嫌になるほど自分でよく分かっていることだ。

白衣を着た人が恭介とすれ違ったびに会釈する。恭介はそれに目礼する。彩子は彼に倣う。すれ違った中の数人に何度か見たことのある

る人がおり、その中の一人は彩子もよく知っている人だった。この男性は何度も家に来たことがある。恭介と同期で、名前は百瀬慎也という。

彼らは和やかに談笑する。この光景は単に彩子があまり目にする機会がないだけで珍しいわけではない。そうでなくとも恭介は人当たりが良い人間だ。彩子にもそれと似た傾向があった。けれど何故か今日は話題を振られても曖昧な返答しかできず、所在なさのために作り笑いが増えていた。会話に加わっているようで頭の中はどこか別の世界に溶け込んでいた。

百瀬は去り際に手を振っていた。恭介は彩子の方に向き直る。

「ここまで、どうやって来たの？」

「電車で」

「ちよつと待てるか？この書類が書けたら今日はもう終わりなんだよ。帰りにどつか飯でも食いに行こう」

なるべく早く戻ると告げ、エレベーターに乗り込んで行った。彩子はエレベーターのドアが閉じるのを見届け、待合室の方へ歩き始めた。

数十分後、二人が病院を後にし、車に乗り込んだ。

大通りに出る前の通りで渋滞に引っかかった。時計に目をやると六時を回っている。もう帰宅ラッシュ時だ。

彩子が前方を伺う素振りを見せると、恭介が今の時間帯は仕方ない、とうんざりした声を漏らしながら苦笑した。

レストランが多く連なる通りにはどうしてもこの大通りを通らなくてはいけない。信号が青でも動く気配がない。やっと進んだかと思えば二度目の赤信号に引っかかる。

それでも交差点を抜ければ車の流れは幾分円滑になった。

彩子がシートに持たれ外を眺めていると、反対車線側の劇場が目に入った。今夜何かの公演があるようで付近には多数の人が群がっている。このホールは立地も良く、音響の良さに定評があるため、

頻繁に使用され、集客数も安定している。

彩子はこの劇場にオペラを観に来たことがある。もう三年以上前になるが、恭介が同僚にオペラの手ケットを一枚だけもらってきたのだ。その同僚はオペラ観賞が趣味の人で、一人でよく観に行くそう。しかしその日が急用で行けなくなったため無駄にするぐらいなら、と恭介に譲ったのだ。もらったはいいが、恭介も特にオペラに興味があるわけではなく、結局彩子の所に手ケットが回ってきた。彩子もオペラを今まで観に行ったことがなく、しかも一人でということだったので気が引けていたのだが、オペラに明るくない者でも名前くらいは聞いたことのある有名な演目だったため行くことにした。その同僚曰く、なかなか良い席だということだった。

当日、彩子は開演時間の数分前に会場に辿り着いた。ほとんど席が埋め尽くされている中で手ケットに印字されている席を探した。なかなかの良席とのことだったが、前の席にかなり大柄な男女が座っており舞台が非常に見づらい席だった。けれどオーケストラによる生音と華やかで煌びやかな舞台にすっかり魅了されてしまった。

彩子は記憶を振り払うかのように、正面へと向き直った。

夕食の場はこれまでに何度も来たことのある南仏料理のレストランとなった。駐車場の関係もあり二人がここに来る機会が多い。ここはもともと古い洋館であったのを改装したレストランである。最近、洋館の二階を宿泊に利用できるようになったそう。

春になり新しいコースメニューが追加されていたため、二人はそれを選んだ。食の好み似ているというのは本当にお手軽だと思う。

コースが半分ほど進んだ頃、恭介が思い出したように言葉を発した。

「俺、結婚することにしたから」

さして切り出しにくそうにするわけでもなく、照れるわけでもなく、ましてやうれしそうにするわけでもない抑揚のない声だった。

「誰と？」

「彩の知らない人」

「そつ」

恭介の返答に少し気を悪くした彩子は口先だけで、おめでとう、と言いなからスープを一すくいした。

「だからさ、出て行ってくれない？」

少しの間をおいて、彩子はスプーンを動かしていた手を止めた。またしても言い出しにくそうなことを恭介は事も無げに言い放った。

彩子は恭介をしばし無言のまま見つめていた。恭介はこれといった反応も示さなかった。

「……引越してまだ一週間も経ってないのよ？」

「そつだな」

恭介はそつげなく一言だけを発し、結論を促すように彩子を見た。そのあまりに不遜な態度に彩子は奇立ちを隠せなくなった。

「今更困るわよ！どこに行けっというのよ？ それに私あそこ気に入ってるの。第一、そんな大事なことが分かってるなら、何で一緒に住もうなんて言ったの？」

彩子は思わず声を荒げた。

怒りの色を帯びた目で自分を見る彩子に、恭介は抑えきれずに吹き出した。

「ごめん、嘘だよ」

彩子はあつげにとられ微動だにできなかった。まだ止まない恭介の笑い声だけが耳に届いている。

「……どうして、そんな嘘吐くの？」

「今日がエイプリルフルだから」

そんなことをすっかり忘れていた彩子は力なく目を伏せた。恭介はまだ笑いが静まらないようだ。その様子に彩子はますますへそを曲げた。

「冗談でもそつという嘘はやめてよね」

彩子は少々乱暴にグラスを持ち上げ、水を含んだ。

「騙される方が馬鹿なんだよ」

恭介はそう言つて水で口を潤す。

彩子は不満気に振舞いながらも、内心は胸を撫で下ろしていた。怒るふりは動揺を隠すためだった。家を出て行かなくてはならないということではなく、彼が結婚するということの方が心を大きく乱されたのだ。けれどそれを気付かれたくないために、ああいった言い方になってしまった。普通なら、きっとその逆であるべきなのだろうと彩子は思う。

メインディッシュが運ばれてくる。白身魚の白ワインソース煮というらしい。

彩子がナイフとフォークを手にしながら、思い出したように言葉を発した。

「エイプリルフルつてフランスだと四月の魚っていうんだって。前に聞いたことある」

恭介は少し黙り込んだ後に問う。

「まさかそれが彩の嘘？」

彩子はまだ先ほどのことを根に持っていることもあり、ふて腐れたような声で否定した。

「これは本当」

恭介は笑いながら彩子にその先を促す。

「何で魚？」

「さあ？ そこまでは覚えてない。日本だと四月馬鹿っていうでしょ。フランスだと魚が馬鹿ってことなのかしら？ 魚って馬鹿そうに見えないのにな」

「そうか？ 餌に引っかかって釣られるって馬鹿そのものだと思うけど」

「さっき嘘に引っかかった私はこの白身魚と同じってわけね」

彩子は切り身にナイフを入れる。そして小さめに切り分ける。

人は互いに牽制しつつ出し抜き合っている。そう感じることもよくある。だからといって物事の全てを一つ一つ疑ってかかっているのは疲弊してしまうだろう。注意を払っていても、たとえ自分に落ち

度がなかったとしても悪いことは何の前触れもなく降りかかってくるものだ。もしそれに悪意があったとしても、そこにある悪意に気づかない方が幸せなのかもしれない。

「馬鹿でも何でも旨ければそれでいいよ」

そう言つて恭介は綺麗に切り分けた魚の身を口に運ぶ。

一見役に立たないもの、価値がないように思えるもの、それらが意味を持つことができるのは他者に快楽を与えることができるからだ。馬鹿と思われ軽んじられたとしても、何の役にも立たないと思われるよりは、その馬鹿な行動を見た人が笑うことができればいいのかもしれない。たとえそれが嘲笑に過ぎなくとも。

少々自虐的な考えだとは思つが、卑屈になり他者に攻撃的になるよりはいいだろう。

「いくら賢くても不味かつたら嫌だからな」

恭介は息を吐き出すようにさらりと口に出した。

例えこれが意図したものでなくとも、彼のこういうところを彩子は好きだった。

静まり返った部屋に雨音が届く。

彩子は姿身の前に立った。乾かしたばかりの髪はまだ少し湿っており、それが余計に彩子の髪を黒く艶やかに見せていた。彩子の髪は真っ黒ではなく色素の薄い茶色がかった細い髪である。幼い頃よりずっとこの髪型で正直もう飽きてきていた。

「変わらないな、彩子は」

「……それはどういう意味にとつたらいいの？」

彩子は髪を弄びながら、小首を傾げる。

その顔は少し不満気なものだった。

「悪い意味じゃないよ。ただ、以前と変わらない姿が見れてうれしくなっただけ」

穏やかな声でそう語りかける恒樹に彩子は微笑んだ。ソファに座ってコーヒを飲む恒樹の背後へと近づいていく。そして彼の肩から絡みつくように腕を伸ばし、その手から飲みかけのコーヒを取り上げた。

それに少しだけ口をつける。もう温くなってしまっているコーヒは猫舌の彩子にはちょうどいい熱さだった。

恒樹からの手紙を受け取ったその日の夜、彩子は自分から恒樹に連絡を取った。

あの手紙は恒樹に試されているような気がした。二年経っても自分と連絡がつく自信が恒樹にあるのなら、それに乗るのも悪くないと思った。けれどあっさりその電話が繋がりに、当然のように彼の声が電話口から聞こえてきた時、彩子は拍子抜けしてしまったのだ。

彩子に会ったたび恒樹は「変わっていない」と繰り返した。他意はなく、ただ懐かしんで言うてくれているということを彩子は分かっている。けれどこうして会うようになり、形だけは以前と同じ関係

に戻ったことに彩子はどこかしら引つ掛かりを感じていた。

確かに、表面上は以前と変わらないものだろう。外見だけの話にしても、たった二年ではそれほど変わることはない。ましてや彩子は透に十年経っても変わらないうと言われたこともある。けれどきつと恒樹はそういった意味で使ってはいない。

内面だけに限るのならば、彩子にとってこの二年間でいろんなことが変わってしまったと思っっている。だから恒樹の「変わっていない」という言葉を聞かされたときに、言いようのない不安に襲われる。それを振り払おうとすればするほど苛つき、次第にその苛つきを隠せなくなるときがある。純粹に想う、という気持ちはとうの昔に消え去ってしまった。そのことを思い知るのだ。

恒樹は彩子を変わっていないと言っただけで、彩子からすれば変わっていないのはむしろ恒樹の方だった。彩子と恒樹はそれほど長い付き合いではないが、出会った頃に比べれば互いのことをそれなり理解できていると思っっている。けれど年数の問題ではなく、ある一定以上は彩子の踏み込めない領域が恒樹にはあった。それ故、彩子は恒樹に聞きたいことがいくつもあつたのだが、自ら恒樹に問いかけるといふことができないでいた。

もともと恒樹という人の真意を探ることは難しく、彼の意図は読みづらいものだった。それには敢えて真意には近づかないようにしようとする彩子の努力の成果でもあつた。

騙し騙しやっていく。彩子にとってこれは誰に対しても同じことだ。程度の差はあれ、透に対しても恭介に対してもそう変わりはない。

この二ヶ月間、彩子は表面上の平和を楽しんでいた。それは胸の奥でくすぶり続けているものにあえて目を逸らすようだった。今まで腫れ物に触るように扱ってきたものに対し、これからは触れようとすることはきつとないだろう。実際、何にも拘らずにいるほうが物事は上手くいき易いものだ。

一方、恒樹も自分のことを彩子に進んで話すということをしな

った。彩子から何かを聞かれればそれに対し真摯に答えるつもりはあったのだが、あまり話せるようなことはないとも思っていた。

例えば香奈子とのこと。恒樹は別居状態でも何ら不自由はなかったため、とにもかくにも離婚を急いでいるというわけではなかった。また、香奈子にしても世間体を気にして離婚に積極的ではない。この状態に何年も甘んじ、どちらもが何の行動も取らずにいた。けれど帰国後、何かにつけ香奈子から恒樹に呼び出しの連絡が入ることが増えた。恒樹は気乗りしないものの彼女の誘いに乗る。これは転職前ならば考えられないことなのだ。あの頃は全くと言っていいほど会うこともなければ、電話で話すことすらしなかった。

香奈子は彩子の存在に感じているのだろうと恒樹は思っている。人物を特定しておらずとも、そのような存在がいるとの予測ぐらいはしていてもおかしくない。また、恒樹には香奈子に気づかれたとしても構わないという気持ちがあった。

恒樹は香奈子との問題はあくまで別個の問題であると認識しており、彩子のこととは切り離して考えている。恒樹が香奈子に話さずにいたのは、わざわざこのことを持ち出して話が今以上に拗れることを避けただけのことだ。

彩子はブラインドに指をかけた。その隙間から外を眺める。

「日曜日ってなんだか雨の日多くない？」

今は梅雨時だが、ここ数日は晴れの日が続いていた。

「そう言われてみれば多いかもね。ただ平日は雨なんてあんまり気にならないから覚えてないっていうのもあるかもしれない。せつかく休日に予定立ててるのに、雨が降って悔しい思いしたから余計に記憶に残ってる、とかさ」

「……そうよね。日曜ばかり雨のわけないわよね」

彩子はテーブルにカップを置き、恒樹のいるソファの肘掛に腰を下ろした。

「俺は、雨嫌いじゃないんだけどね」

「どつして？」

「……まあ、雨の日に良い思い出があるから、かな」

「ふうん。別に私も嫌いじゃないのよ。同じような理由で」

「へえ」

いい思い出とは何なのか、普通ならばそれを語り合ったりするのかもしれない。けれど何故かそう思ったことをしないのは、知らなくともいいと思っっているからだろうか。それとも、それは余裕からなのだろうか。

自問するしかないことを歯痒く思う気持ちもおそらく同じなのだろう。何も言わない恒樹にもどかしさを感じつつも、それは自分自身に対しても言えることだと彩子は自覚していた。

恒樹の携帯が鳴った。

画面を見たときの一秒にも満たない恒樹の眉の動きを彩子は見逃せなかった。恒樹はそつと彩子に目配せしその場を離れる。誰からなどと問う余地は彩子にはない。恒樹の目が全てを語っていた。

少々離れた場所であっても声は漏れ聞こえてくる。人の話し声というものは聞くつもりはなくても自然に耳に入り、脳内ですっかりとその音の意味を認識させる。雑音よりもはるかに厄介なものである。

彼らが会う約束をしていることが伺えた。耳を塞いでも意味はないだろう。どうやら自分には聞こえないはずの音が聞こえるようだ。何度も何度も繰り返される不快な声を遮断するには耳ではなく感情を塞がなくては意味がないように思えた。

話し声が途切れた。

「そろそろ行くね」

彩子は電話を終え戻ってきた恒樹に、顔も見ることなくそう言った。

「送ってくよ」

それを彩子は、寄るところがあるから、とやんわりと断る。そう告げたときの恒樹の顔がどこか安堵したように見え、彩子は思わず指を恒樹の首筋に伸ばしていた。

それは小さな抗議の意を込めて手繰り寄せられる。恒樹が彩子の成すままに引き寄せられるのは後ろめたさを感じているからだろうか。

彩子は恒樹のうなじに触れた指を徐々に唇へと移動させた。恒樹は口内で絡みついてくる舌に応えながら彩子のまだ少し湿った髪を梳いてゆく。

二人の唇がふわりと離れる。

彩子は恒樹の耳元で囁いた。

「傘、借りてもいい？」

*

傘を開いて雨の街を歩く。透明のビニール傘は視界を遮らない。

朝早くにこの通りを歩くのは初めてだったため、いろんなものに物珍しく見えた。逆に初めて来た場所でも一度来たことがあるように感じることもある。別にこれはデジャヴという現象ではなく、ある程度の条件が揃えば起こりうることだ。

この辺りは彩子が以前住んでいた所に少しだけ似ていた。そこでは三年ほど暮らしたのだが、彩子はあの場所があまり好きではなかった。何かと便利な場所ではあったが、国道沿いのため騒音も多く、あまり治安もいいところではなかった。

彩子が好きだったのは幼い頃に住んでいた家の周辺だ。閑静な住宅街で自然も多かった。あそこは今住んでいるところに近い雰囲気がある。

彩子の家では、日曜日の朝はランチを食べに行く習慣があった。日曜の朝くらいゆっくり食事をしたいという母親のもと、小さなころから母と二人で車で十分ほどの場所にあるカフェへ毎週のように行っていた。母と過ごした日曜の朝は何故かいつも雨が降っていたように思う。毎週日曜日が雨であったはずはないのだから、単に雨の日が深く記憶に残っているだけだろう。

車を降りると少しでも濡れないようにと屋根の下まで走る。少しの距離だから傘を開いているうちに入り口まで行けるからだ。店内は雨のせい客足も疎らだった。店にとってはありがたいがたくはない雨でも、彩子にとっては静かな空間をもたらしてくれるため、むしろ雨は好きだった。

メニューはいつも同じものだった。そのカフェは一種類のモーニングメニューしかなかったのだろうか。これも雨の記憶と同じで印象の強いものしか覚えていないからかもしれない。窓際の席を外を眺めながらバタートーストを口に運ぶ。席はいつも窓際だった。窓際であれば同じ席でなくてもよかった。カウンター席に座った記憶は全くない。

別の店にも行っていた記憶はあるが、こうやって思い出すのは頻繁に行っていたあの店だけだ。

昔のことを思い出すのはいつも切なさの中に潜む幸せを掴み取るうとする時だ。その正体は不安が和らぐ瞬間に似ている。

時計の針が九時を指す少し前、彩子は透の部屋の前にいた。

平日ならまだしも休日ならまだ傍迷惑な時間、彩子は透の部屋のインターホンを鳴らした。透はまだ眠っていたのか、インターホンを鳴らしてからややあって、ドアの向こう側から物音が聞こえた。

透は相手を確認することもなく、ゆっくりとドアを開けた。

「……どうしたの？」

くぐもった声とは裏腹に、透の表情は穏やかだった。

「もしかしてまだ寝てた？」

「ううん、起きてたけど」

透は顔を横に背けながら前髪をかき上げた。

「ご飯、食べに行かない？どうせまだなんですよ？」

透は少し俯きがちになり口ごもった。それから少しの間の後、

「……十分待ってて」

そう言い残して、扉を閉めた。

閉められたドアを前に彩子は少し笑った。透は断るものだとばかり

り彩子は思っていたので、彼女にとってそれは意外な返答であった。よくは見えなかったが、透は飴玉を舐めているようだった。

透は食事を摂りたがらない。厳密に言うとな前で食事を摂るのを極端に嫌う。自分が食べている姿を人に見られるのが嫌いなのだ。大学生ともなれば外で食事を摂るような機会は格段に増えるが、透はそのような機会を一切絶っている。透にとっての「人前」には当然彩子も含まれている。透が彩子の誘いに乗ったのは単に空腹であったから、という程度のもので、彩子が例外でないということにはならない。

彩子は昔の透がどうであったか思い出すことはできない。けれどこの二年ほどでその奇癖は強く出るようになったと感じていた。そもそもこれを癖と呼んでいいものかどうかも分からない。

透が飴をよく食べているのも空腹を紛らわすためだと彩子は思っていた。なぜなら透は拒食症の類ではなく、食べること自体を拒否しているわけではないからだ。透のことをよく知らない人からすれば彼女は拒食症か何かの病気かと思うかもしれない。そう思われても仕方のないくらい透は痩せていた。背が高いので余計に痩せているのが目立つ。すれ違いざまに振り返る人も多い。

昔から痩せ型ではあったが二十歳前後の女性の体つきということから考えると厚みがまるでない。これは彩子が透と何度も構内ですれ違ったことがあるにも関わらず、すぐに彼女だと気づかなかつた理由でもある。

二人は透のマンションから歩いて数分のところにあるカフェへ入った。何度もここへ来たことのある彩子は、それまでのように窓際の席に着いた。その後を追うように透は彩子の向かい側の椅子に腰を下ろした。

彩子と透は同じモーニングメニューを注文した。ここに来るのが初めての透が彩子に倣う形となった。トーストにスクランブルエッグ、サラダといったものだが、それに彩子はアイスレモンティー、透はグレープフルーツジュースだ。

透は窓の外を虚ろな目で眺めている。彩子は冷水を一口飲んだ。

「透が付き合ってくれたの、意外だった」

透の視線が下向き加減になった。

「……彩子が誘ってきた方が意外だったけどね」

透の言葉には、意外だと思っただろうとして誘ったのか、という意味合いが含まれていた。多少なりとも透が不快に感じたのは事実だろう。それでも彩子には興味があったのだ。

「彩子はよくここに来てたの？」

「よくって程でもないけど、でも来るときはたいてい一人。一人の方が落ち着くし」

「……たぶん、彩子のそれは私のとは違うよ」

自分は一人の方が落ち着くからという理由で一人で食べているわけじゃない。

彩子は透の足りない言葉を自動的に補充した。

料理の盛られた二つのプレートがほぼ同時に運ばれてきた。二人は食事に手をつける。先にフォークをとったのは透だったが、先に口をつけたのは彩子だった。

透はフォークをそれ以上動かすことなく彩子をじつと見つめている。彩子はその視線に気づいたが、構わずトーストを食べ続けた。

トーストを半分ほど食べ終わった頃、彩子は尋ねる。

「見られるの嫌いなくせに、見るのは好きなの？」

「……別に」

透は彩子から視線を逸らし、トマトを口に運んだ。彩子は、飴を舐める時のそれとは異なる口の動きを眺めた。その視線に気づいたのか、透の口の動きは早くなった。

これは見られる時間を極力少なくするためなのか。それとも単に空腹だったからなのか。

滅多に見ることができないであろう透の食べ方は綺麗だった。

透は自分が食事をする姿を他人に晒すのが嫌いな理由を、以前彩子にこう説明していた。

人間の三大欲の一つである食欲。それを満たそうとしている姿を晒すのは本能のままに生きている姿を晒すことだ。だからそれを見られたくないというのは人が裸を見せるのを嫌う心理と似ている。そんなようなことを言っていた。

理由が単純にそれだけだとは思えなかった。けれどその心理は理解ができないものではなかった。程度の差はあれ、誰しもそういったものはあるだろう。透は人よりかなり神経質なことだ。

本能のままの行為を理性で抑える、すなわちそれが「誰の目から見ても綺麗な食べ方」ということに表れている。

彩子はそう解釈していた。

彩子が外に目をやると雨はほとんど止みかけているのが分かった。

「ねえ、透」

透は手を止めて彩子を見た。

「記憶って覚えておくものじゃなくて思い出されるものだと思わない？」

「……もっと分かりやすく言ってよ」

透は困ったように口の端を上げた。

「目で見て、耳で聞いて、舌で味わって、匂いを感じて、手で触れた記憶。それらが何かの拍子に溢れだすの。その何かによって思い出されるものなんじゃないかなって今思ったの」

「彩子にとってその何かってというのは？」

「……雨かな」

彩子は視線を外へ向けた。

「私、雨の日になると思い出すことがあるの。別に覚えておかなきゃって思ってるわけでもないのに、思い出しちゃうの。こうやって雨が降るのを眺めながら紅茶を飲んでると、なんだか泣きそうになるんだよね」

「……それは彩子にとっていい思い出なのね」

「そう思う？」

「少なくとも嫌な思い出ならそんな話しないでしょ？」

「うん、そうかもしれない」

彩子は浮かんだレモンをストローで底に沈めた。氷がカラカラと鳴る。

「透には何かある？」

「さあどうかな。何かはあるんだろうけど、思いつかない」

透はそう言ってジュースを飲み始めた。

既にストローには数ヶ所の噛んだ痕が残っている。

透の噛み癖は苛立ちや不安感といったものを抑えるときに出てくるのではないか。

そんな風に思う時がよくある。それはいつも彩子を不安にさせる。

不安の侵食を押し止めるように、彩子は突然こう切り出した。

「私ね、好きな人がいるの」

「それは、さっきの話と関係あるの？」

「ううん、その話とは関係ないわ」

彩子がかういった話を透にするのは初めてのことだった。

彩子と透は今まで不自然に思えるほど、そういったことには触れないでいた。例えば、何かのきっかけで相手の恋人の存在に気づくことがあったとする。けれど相手が自ら話そうとしない限り、それ聞くことはしない。そういうスタンスをとってきた。

だからきつと透は意外に思っていることだろう。

「ずっと好きだったの。最近よく一緒にいられるようになって、その人のことをますます好きになっただわ」

彩子の目線はグラスの辺りに彷徨っていた。

「へえ、どういう人？」

透の問いは彩子が十分に予測できたはずのものだった。けれどそのごくありふれた問いに答えることを彩子は躊躇っていた。

その様子を透が訝しげに見る。

彩子は迷っていた。透がいろんな面で潔癖な質であるということを知っている。彩子は透のそんなところが好きだったが、だからこ

そ、彼女に全てを話すことが躊躇われる。

そもそも、これは誰にも知られなくなかったことだ。誰かにこのことを話す日など来るはずがないと思っていた。誰に、どのようにそれを伝えても、それを理解してもらえとは思っていない。

彩子は干渉というものを嫌っていた。するのもしられるのも同程度に不快だった。彩子が透といて居心地が良いと感じていたのは、不必要に干渉されることがなかったからだ。けれど、相手を知れば知るほど自分を晒したくなるということに気づいた。そんな風に思えたのは、透が自分にとって魅力的な人間であるからなのだろう。

全てを話すことはできない。けれど、嘘だけは吐きたくなかった。「その人は私にとって憧れの人で、あんな風になれたらいいなっずっと思ってたの」

ストローを弄びながら彩子は続ける。

「……それで今、一緒に住んでるの」
彩子はそれきり口をつぐんだ。透は黙り込んだままだ。上がった雨が静寂を強調する。

顔を上げて互いの表情を伺うことも気が引けるほど、二人の間には重苦しい空気が漂っていた。

透は少し掠れた声で言う。

「その人は、彩子のこと好きなの？」

「さあ？嫌いではないと思うけど」

彩子は邪気のない笑みを透に向けた。同時に、透は呆れたように小さく息を吐いた。そして喉を水で潤す。

透は渋い表情のままだったが、それでも彩子は張り詰めていた空気がふつと緩むのを感じた。

好きにすればいい、透はそう言って頼杖をつく。

透のその言葉が肯定を表すものではないということ彩子は知っていた。けれど、こうして自分の思いを彼女に伝えることができたことに小さな満足を得ていた。

P r i v a t e R o o m

&
a
m
p
;

8
1
9
5
;

四

ある日、恒樹はそれまでずっと使用していたカップを割った。

それは耐熱ガラス製の少し大きめのカップで、彼が紅茶を飲むときはいつもそれを使っていた。決して高価なものではない。何かこれといった思い出があるわけでもなかった。あるとすれば愛着だろう。

大きな音とともにそれが壊れたとき、恒樹はそれを片付けることもせず、しばし上から眺めていた。

彩子はそんな恒樹の姿を少し離れた位置から見ている。

それが意図的であったのかどうかは分からない。わざと壊したようには見えなかった。けれどそれが故意であったとしても驚きはしない。

恒樹は穏やかな反面、激しいところも併せ持っている人だった。それは弱さの裏返しであるように思えた。彼がそのような素振りを見せたのは、決まって過去の話、特に香奈子の話をするときだった。今でこそ恒樹は香奈子のことを彩子に話すことはしないが、以前はよく話していた。その際、彼の表情は壊れそうなほど悲痛なものになるところがあったのだ。

人の心とガラスは似ていると彩子は思う。一方は移ろい易く、もう一方は壊れ易いものである。どちらもその形を維持していくのは難しい。だからこそ壊れやすいものを扱うときは自然と細心の注意を払うようになる。とはいえ緊迫し張り詰めた気持ちになるわけではなく、むしろ穏やかで安らぎに満ちた気持ちになれることが多い。

彩子には大事にしているガラスケースがある。彼女はそれに対し強い執着があるが、想いが強くなればなるほど、穏やかさや安らぎというものは影をひそめていくような気がしていた。代わりに湧き起こる感情はどこか悲哀を帯びているものだった。

何かに執着するということは同時に沈鬱さを伴うものなのかもしれ

れない。

帰国後、恒樹が香奈子とよく会っていることを彩子は知っている。それは彼の意に染まぬもののようにであるが、よほどのことがない限り、彼がそれを断ることはない。

彩子はそのような彼を見る度に、顔も知らぬ香奈子の存在を自分の中に認める。普段はまるで架空の存在のように思える彼女を、その時だけは確かに存在している人物であると認識できるのだ。このことは多少なりとも彩子に不安を与える。

けれど恒樹は彩子に優しく、何かと彼女を気遣う素振りを見せる。何故、恒樹は自分と同じように香奈子と接することができないのだろうと彩子は思う。皮肉にも、そう考えることが冷静さを保つことに繋がっている。

恒樹は香奈子を拒絶しないことで彼女から逃げている。その逃避の結果に自分と恒樹との関係があるのだということを彩子は理解している。

そして彩子もまた恒樹に逃げていた。

「彩」

彩子は振り返った。

「それ取って」

恭介が眼鏡を指して言った。彩子はカウンターの上に置かれていたそれを手に取り、恭介のもとに足を進めた。

恭介に眼鏡を手渡すとき、彩子はふと、グラスを持つ彼の指に目を留めた。恭介の左手の中指はペンだこのせいで爪が少し変形している。彩子がそれに気づいたのはほんの少し前のことだった。

ごく近い位置にいても気づかないことは多くある。当然、その逆もある。自分は恭介のことは分かっているようで分かっていないのだろうと彩子は思う。これは、よく見知っている者であっても顔を思い浮かべようとした途端、どんな顔をしていたか分からなくなる感覚に近い。

彩子はその場に留まったままぼんやりとしていた。

「どうかしたのか？」

彩子は咄嗟に視線を移動させ、別の言葉で誤魔化した。

「それ、よく使ってるのね」

ああ、と恭介は自分の手に目をやって、

「気に入ってるからね。まあ、壊しちゃったらその時はごめんね」

それは三月の恭介の誕生日に彩子が贈ったグラスだった。二人はイベントごとに互いに贈り物をしてきた。誕生日だけに限れば、かれこれ十年以上続いている。

「案外仕舞い込んだりしてるものに限ってすぐ壊すのよね」

「そうそう。だからあんまり大事には使ってない」

そう言って二人は笑った。

贈り物にはその人の性格がよく現れる。特に贈る側ではなく贈られた側に立ったときに強く現れるように思う。

それがガラス製品や陶器の場合、それを使用するかどうかはその人の性格によるものが大きい。それが高価なものであるのか、また、贈られた本人が気に入っているのかも関係してくる。

彩子は惜し気もなく使う方だ。そして恭介も同じくそうだ。けれど恒樹はきつと使わずに取っておくのではないかと彩子は思う。

もし彩子が恒樹にあの壊れたカップの代わりのものを贈ったとしても、彼はそれを使わないように思う。

使用しないことで相手に感謝を示すということもある。そういう優しさもあるのだ。例えば、恒樹は壊れてしまえばその破片ですら大事に取っておきそうである。彼の優しさというのはそういう質のものだ。

形あるものを大事にする。そうすることでそれに付随する人の気持ちを持ちを大事にしている。

彩子もまた形あるものを大事にする。けれど恒樹のそれとはまた違うものだと感じていた。恒樹のものは優しさと捉えることができるものだ。けれど彩子は自分のそれをどうしても身勝手な執着心であるようにしか思えなかった。小さなことに拘り、それを断ち切る

ことができない。胸の奥に引っかかったものを取り除くことも忘れることもできずにいる。

彩子は未だ自分と恒樹の関係を恋人と呼ぶには相応しくないと思っている。彩子に恒樹の真意は分からないが、香奈子とのやり取りを隠す素振りのなさから察するに、彼も彩子と同じようなものなのだろう。

しかし、恒樹は彩子との関係もまた周囲に隠す素振りを見せない。単に杜撰なだけなのかもしれないが、もし香奈子がそれを知るに至ったら彼はどうする気なのであるのか。変化を求めない彼がそのことを利用する気であるとは思えなかった。

恒樹とは逆に、彩子は恒樹のことを周囲に知られまいとしていた。二年半ほど前のことだが、彩子は恒樹と一緒にいるときに百瀬慎也と会ったことがある。彩子が驚いたのは、恒樹と百瀬が知り合いであったことだ。恒樹にしても、彩子が百瀬と知り合いだとはまさか思わなかっただろう。もっとも、一番驚いていたのは百瀬本人だったのかもしれない。

彩子は何年も前から恭介を介して百瀬と会っている。しばしば家にも来ることがあり、何かと言葉を交わす機会があった。恒樹と百瀬が知り合ったのは今から十年前のこと、医師と患者の身内という繋がりだった。それ以来たまに会うようになったそうだ。

共通の知人がいるということ自体は何らおかしいことではない。けれど年も立場も違い、おおよそ何の接点もないと思われる者たちが知り合いであったということは、やはり偶然だとは言えないのだろう。

六年振りに透と大学で再会したことも、今こうして恒樹と会っていることも、全てはいろんな偶然が重なり合った結果なのだ。彩子は思っていた。何か一つでも違えばもう二度と会うことがなかったかもしれない。だから、多くの偶然が重なり合った結果にあるものは、必然と呼ぶべきものなのかもしれない。

彩子はその偶然の中に恭介を巻き込みたくないと思っていたのだ

が、やはりその結果は必然的に起こるものだった。

後日、恭介の口から矢島恒樹の名前が発せられた時、そして恒樹とのことについて聞かれた時、彩子は思わず慥然とした態度を取ってしまった。多少不自然に思われようと百瀬に口止めをしておけばよかったと思った。そうすれば避けられたことなのかもしれない。そうでなくとも百瀬が恭介に話さなければ済んだことであるため、勝手に恭介に恒樹のことを話した百瀬を恨んだ。これは八つ当たりには違いないのだが、彩子はどうしても恭介には知られたくなかったのだ。

百瀬が恭介にどんな風に話したのか、それは彩子の知るところではない。けれど、過干渉ではなく、むしろ放任ともいえる恭介が、そのときばかりは怒っているように見えた。そのことは彩子を酷く混乱させた。

どうして恭介が怒る必要があるのか、彩子が思いつくその理由は一つしかない。

恭介が彩子にとって保護者であったからだ。恭介にしてみれば恒樹がどのような人物であるかは問題でなく、彼にとって問題であったのは恒樹の立場に他ならない。

彩子は恭介の問いに、そんなことに答える必要はないと突っぱねることもできた。けれど彩子は恭介に誤解されることを怖れた。だから彩子はこう答えた。自分たちの関係は恋愛の類ではない。ただ欠けた部分を補い合うようなものにすぎない、と。

彩子がそう答えたのは、この件について恭介に触られたくなかったからではなく、それが紛れもない真実であったからである。あの頃の二人は今よりも不確かな関係でありながら、彩子は今よりもずっと恒樹を信頼していた。今のように彼と深く関わるようになっていくにつれて不信は募っていった。あまり互いのことに踏み込まないという姿勢を貫いていくほどに、二人の間の溝は広く深くなっていくようであった。

この溝は、もともと二人の間に存在していたものである。だから

彩子はそれを無理に否定する気はなかった。その存在を認めることが互いを尊重することに繋がると思っていたからだ。

もつとも、その溝の存在に不満を持つていなかったわけではない。一人の人間として興味のある恒樹を理解できないままにいることに物足りなさを感じることもあった。

だから彩子は恭介にこう付け加えた。恒樹の本心は雲を掴むようなもので全く分からない。近づけば近づくほどに分からなくなる、とすると恭介はこう言ったのだ。

『近づくほどにその人を遠く感じる。それは当たり前のことなんだよ。肉体が近づけば精神もそれに寄り添うなんてことはありえない。それなのに近づいたと勝手に勘違いして、勝手に遠くに感じてしまう。実際は何も変わってなんかいないのに』

恭介が何故こんなことを言ったのかという理由を彩子は未だに理解できずにいる。ただ、恭介の言ったことは彩子の気持ちを乱させるものだった。

恒樹よりも更に彩子の近くにいるのは恭介であり、彩子が心の奥底で求めていた人間は恭介であった。どれほど恭介に近い立場にいても彩子はずっと恭介との距離を感じていた。自分たちは決して交わらない関係にある。生活を共にしていても、いろんなことを共有するようになったとしても、自分たちが触れ合うことは絶対でない。彩子はその交わらないものを少しでも屈折させたいと思っていた。

だから彩子は恭介にこう告げた。自分は恭介に対してそれと同じことを思っている、と。

そう伝えるのが精一杯のことだった。それを彼がどう捉えるかは賭けのようなもので、気づいてもらえずとも仕方がないと思っていた。

けれどやはり恭介は鋭く、それだけで理解していたようである。それ以降、彼の言動には彩子に対する牽制と思われるものがいくつもあった。

そんなとき、この日のことが頭を掠める。それがたとえほんの数

秒のことであっても、彩子は何も考えることができなくなる。次第に、彩子は恭介に近づこうとする反面、彼の何もかも全てを知っているとしても言うような言動を恐れるようになった。必死に隠しているものを全て見透かしているような目が怖かったのだ。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

五

カーテンの隙間から差し込む光に透は目を細めた。

机の上の時計に目をやると、九時に差し掛かる頃だった。昨夜遅くまで起きていたため目覚ましをセットするのも忘れて眠ってしまったようだ。昼過ぎに彩子がここへ遊びに来ると言っていたが、まだ時間があるので焦って身支度をする必要はない。

透は起き上がって窓を開けた。強い日差しが降り注ぐ。風は凪いでいた。

この部屋にはエアコンが設置されているが、透がそれを使用することはほとんどなかった。昔から冷風が苦手なのだ。だからと言ってそれほど暑さに耐性があるわけでもなく、夏は透にとつて嫌な季節である。

去年はまだ比較的過ごしやすかったが、今年は五月の時点でもかなり暑い日があった。六月も暑い日が続いたが梅雨時ということもあり何とか我慢できていた。けれど七月になってからはかなり厳しくなってきた。扇風機ぐらいは買った方がいいかと思案中だ。

三年になつてからはアルバイトや学内の図書館で過ごすなどして、早い時間に家へと戻ることはほとんどなくなった。実家からの仕送りだけでは生活することは難しい。学費はほぼ免除とはいえ日々の生活費は稼がなくてはいけない。家庭教師のバイトは短時間で良い収入になる。奨学生として成績を落とすわけにはいかないのだから、いろいろなことに必死だった。

こういったことは他と比較することが難しいとはいえ、透は自分の家庭は貧しい部類に含まれると思っていた。親の収入があまり多いわけでないことに加え、兄弟が多いということはそれだけで家計を圧迫する大きな要因である。

透は幼少期より贅沢な生活に憧れていた。贅沢と言ってもそれは子供じみた漠然とした憧れである。けれどこの強い憧れが後の自分

にあまり良い影響を及ぼさなかったと透は感じている。

過去のある時点から、自分はよく見栄を張るようになった。また、人を見下すような態度を取るようになっていった。これはきつとコンプレックスの裏返しなのだろう。

決して誰かに話すことなどしない。人に容易く話せるようなものならばコンプレックスとは言わないだろう。それを克服して初めて、他者に打ち明けられるようなものである。

透はこのコンプレックスこそが人前で食事を取ることが難しくなつた大きな原因であると考えていた。

物を食べるという行為にはその人の本性がよく出ると言われる。人は生活にゆとりがなければ本能的な生き方に近づいていくものだ。精神的な余裕が人間を人間ならしめているのだろう。常に理性的でありたいと思つてきた透からすれば、例えば食に執着心を示すことができなかつた。

本能に忠実な人間を見ると嫌悪感すら抱く。けれど同時に自分も彼らと同類なのだと思われることを恐れている。その恐れと不快感に苦しめられている。

そして、こんなことを恥じることを下らない拘りだと自覚している。昔はそうでもなかつたものの、近年では明らかに日常生活に支障が出てしまっている。口には出さずとも不審に思っている者も多くいることだろう。

数週間ほど前、彩子の誘いを素直に受けたのは自分自身を試すような気持ちからだつた。最も親しいと言える人間との食事でも不快感しか味わえないというのなら、もう改善の余地はないと思つた。けれど実際その場を体験してみるとその不快感は思つたほどではなかつた。ただしこれは悪癖が徐々に改善されてきているからではなく、やはりその場にいる人物によるものなのだろう。

透にとって彩子は理想的な人間であると言えた。もつとも、彩子自身が理解している彼女の性格と、透が彼女に抱いているイメージには多少の隔たりがあるのだろう。今になって思えば、彩子が透の

理想的な人間だったのではなく、自分の理想像が彼女によって形成されただけなのかもしれない。

透と彩子は互いに共通点を見出すということをしなかった。実際、自分たちは似ているところか正反対だ。干渉を避けたのは、互いを理解し合うのは難しいと分かっていたからだと思う。

けれど相手の理解できない言動であつても、それを許容することはできる。それで妥協することを選んだ。それは無関心とは違うものだ。

「お昼まででしょ？ 適当に買って来たよ」

部屋までやってきた彩子は開口一番にそう告げた。それを断る理由には透にはない。椅子から立ち上がり、テーブルの前に座った。

透と彩子はここ最近、食事を共にすることが何度となしにあった。彩子がどういった意図でこうしているのかは分からないが、透にとつてこれはリハビリみたいなものだった。

長方形のテーブルに二人は横に並んで座った。透は以前彩子に、向かい合うとどうにも落ち着かない、と告げていた。隣り合わせというものは、向かい合うよりも位置的には近くにいることになる。けれど人と距離をとるといふのは物理的な問題ではないのだ。顔を向き合わせないということは何かを隠し続けることのような後ろめたさを透に感じさせることになった。それでも透には一抹の後ろめたさよりも、自分に向けられる視線を恐れていた。

彩子が袋の中から冷やし中華とビールを取り出しテーブルに並べる。

初めて食を共にした日以来、彩子は食事中の透を極力見ないようにしていた。その配慮は透にも分かるものであった。

静かに麵をすすする彩子を横目に透はビールを呷った。透が食べ始めたのは彩子が半分ほど食べ終わった頃だった。それでも透は彩子よりも食べるスピードが速いため食べ終わるのはたいてい同じくらいになる。

先に食べ終わりデザートに手をつけていた彩子は、ふと透に問い

かけた。

「透は今年も帰らないつもりなの？」

バイトがあるから、と隣を向くことなく返す。

「どうしてそんなにバイトばかりするの？」

「うちはあまり裕福じゃないから」

透は食べ終わった冷やし中華の容器をナイロン袋の中に入れた。

貧乏であるという自覚はあるにもかかわらず、裕福ではないという言い方をした。自然とこういう言い方をしてしまうのは、今まで見栄を張ってきた成果なのかもしれない。

「食欲を満たすために食べるっていうのが嫌なのよ」

透はいきなり核心ともいえるものに触れた。

彩子は突然のことに釈然としない顔をしていたが、すぐにそれが何のことなのか分かったようだ。

「……じゃあ飴は？」

「飴を食べるのはあくまで好きだから。でも食事として食べるものをおいしいと思わなくなったのよ」

おいしいと思わないものを食べないでいるのはある意味贅沢なことかもしれない。

彩子は食べかけのゼリーを眺めながら、

「いくら好きでも、これを食事代わりに食べ続けるのは嫌かな」

甘味物だけで空腹を満たすことは困難だ。

透は本日二本目の缶ビールのプルタブを引き上げた。

「私はそれでもいいわ」

一口飲んで、

「私はたぶんずっとこのままだと思っ」

独り言のように呟いた。

欲望を断ち切れればいい。そうすれば何も問題はない。

彩子は食べ終わったゼリーの空容器を脇に置いた。そしてチョコレート菓子を袋から取り出した。

「透はストイックだよ。でも私はそうはなれない。欲張りだから、

一つ叶えばまた一つ欲しいものが増えていくの」

彩子は透にもチョコレート菓子を差し出す。

「それが普通なんじゃない？」

透は差し出されたものをすんなり受け取る。けれど透はそれを口元までは持つていったものの、指先でつまんだままじっと眺めていた。そして気怠そうに言う。

「余計な拘りを持たずに自分の思うままに振舞えるのって、私は羨ましいけどね」

「……私ってそんな風に見える？実際にはそんなことできないわ。どうしても、どこかで線を引いてしまうから。というより、そうしないといけないのよ」

彩子は呟くようにそう言った後、透に問いかける。

「ねえ、近くにいる人を遠くに感じる感覚って分かる？」

透はいきなり振られた別の話題に戸惑いながらも、彩子が言わんとしていることに想像がついた。

「……何となくなら」

透の返答に彩子はクスリと笑った。そして明るい口調でその先を続ける。

「近くにいる人も、その人を所有してるわけじゃないんだから、理解できなくても当然のはずなの。それなのに勝手に自惚れて、勝手に遠く感じて、勝手に傷つく。実際にはその人に近づいてるわけでも何でもないので、自分たちは近くにいるって勘違いしてるだけ」

彩子はすらすらと真理のようなことを語った。

言葉を選んでる素振りがない様子は、まるで事前に用意されたセリフを読み上げているようだった。

「近づけば心が共有できる、そんな単純だったらいいのにね」

そして彩子はこう言い切った。

「私はね、欲張るから満たされなくなったの」

その言葉は小さな細い針が突き進んでいくように透の胸の奥底に留まった。

透がこういう風になったのは満たされない思いを無理矢理にでも満たそうとしたからだ。自分の姿勢は一見ストイックに見えるだけで本当は非常に貪欲なものだと透は思っている。

透は残りのチョコレート菓子をかじった。

「きつと彩子より私の方が欲張りだと思っわ」

本当のことを語ったつもりだ。けれどそれは全てではない。

今の透には自分が欲張りだと彩子の前で認めることが精一杯だった。彩子が自分のことをどういう人間に捉えているかは大体の想像がつくが、それが買い被りであることを示すための他の方法が思い浮かばなかった。

ストイックであろうとすることがそもそも見栄なのだ。それが下らないことだと自分にどれほど言い聞かせてみても、けっしてそれを捨てることはできなかった。これを捨てることは、今の自分を構成しているものの全てを壊してしまうことと同じだったからである。

透は彩子に問いかける。

「色褪せてでもずっと形が残るものと、鮮やかな色を残したまま消えていくもの、彩子ならどっちを選ぶ？」

今度は彩子がいきなり振られた話題に戸惑う番であった。彩子はその返答に思いあぐねているのを見て、透はその先を語った。

「私は鮮やかなまま消えていくものの方がいい。刹那的な衝動っていうのかな・・・そういうものの方が私には大事なの」

無様な生き方だけはしたくない。味も色も形もなくなったものに価値はないのだ。その思いだけは捨てることができない。

彩子が帰った後、透は静まり返った部屋で風の音を聞いていた。

机の端に置かれたボトルに手を伸ばす。もはや癖とも言えるこの行為に、ほとんど意思は働いていない。

目を閉じてその中の一つを取り上げ、そのまま飴を舌で絡めとる。少しずつ口内に広がってゆく甘味は次第に鼻腔へと達する。

これは一体何の味なのだろうか。その答えを求めるたびにそれは

小さくなっていく。

ガリツという音が耳の奥で響いた。透はその音を確認したのと同じ時にうつすら目を開いた。

*

夏季休暇の間、彩子は恒樹の家に遊びに行くことが多かった。恒樹はよく仕事で遅くなったが、そういったとき彩子は恒樹が帰って来るまで彼の自宅で待っていた。

その間、彩子は恒樹の自室で暇をつぶした。

このマンションは恒樹にとって実家でもあるため、この部屋には彼が十代の頃に興味を持っていたものが多数残っている。それらは彩子にとっても興味深いものであった。

この部屋は結婚後書斎にしたそうだが、もう必要ないと感じたものは少しずつ処分していると恒樹は話していた。それでもそれらは彼の部屋を未だ埋め尽くしていた。五百冊は収納できるというスライド式の本棚にはハードカバー本や文庫本がぎっしり詰まっている。その隣にある大きな棚には画集で半分ほど占められている。他には大量のCDも置いてある。

ここは独りでいても飽くことがない。数年前にも、彩子はここにいるときは音楽をかけながら本を読んで過ごすということをよくしていた。そして恒樹は彩子が気に入った物を処分も兼ねて彼女に譲っていた。そのうちに共通の話題も増えていった。彩子は話題作りをしたいがためにそうしていたわけではないのだが、結果としてそれが目的の一つにもなっていた。

恒樹は印象派の画家が好みで、この部屋に置かれている画集は印象派の画家のものが多く、恒樹は中でも特にルノアールとモネが好きで、二人でいるときは彼のお気に入り作品を見せてくれたりもした。

ある時、ルノアールの初期作品のモデルの少女が彩子によく似て

いると、笑いながら見せてくれたことがあった。その絵の中の少女は栗色の髪をして黒いドレスを着て微笑んでいた。解説を読むとこの少女は八歳とあったが、彼女の浮かべた微笑はその年齢よりもずっと大人びて見えるものだった。

恒樹がこの少女と似ていると言ってくれたことを彩子はたいそう嬉しく思っていた。昨年彩子が使用していた名画がプリントされたカレンダーの中にちょうどその絵が含まれていた。この絵は六月に使われていたのだが、彩子はその月が過ぎ去っても次の絵柄に変えることができなかった。その絵を目にすると何年も前のことがつい先日のように思い起こされたからだ。

彩子は目の前にある鏡へと近づいていく。

恒樹と再会してから彼が何度も繰り返した、変わっていないという言葉。彩子はそれを鏡に向かうときによく思い出す。

外見に関しては、おそらく恒樹が海外へと経った二年前の春からそう変わってはいない。それでも恒樹と初めて会った三年半前と比べると自分の外見は変わったと彩子と思う。それは意図的な変化であり、確実に恒樹の影響であったのだと言える。

恒樹と頻繁に会うようになったのは三年前の春だったと記憶している。あの頃、恒樹はよく香奈子の話をしていた。その当時まだ十七歳だった彩子にとって、彼らの関係は全く別次元の話であった。初めのうちは聞き役に徹していた彩子も次第に自ら進んでその話を聞くようになった。

彩子の興味は恒樹本人ではなく恒樹と香奈子の関係であり、その立場であった。彩子は自分自身を彼らと同次元の存在へと変えたかった。

その術として彩子を選んだのは単純なものであった。それでも服装やメイクを少し変えるだけでそれに相応しくなれるのならば、その程度の努力を惜しむはずがない。それがただの虚飾に過ぎなくとも、見破られなければどうということはない。実際、変わりゆく彼女に否定的な言葉をかける者はいなかった。

周囲を誤魔化すのは容易でも自己を誤魔化すことは容易でない。

自分はある頃と同じく、虚飾に塗れているのかもしれない。彩子は恒樹にあの言葉を言われるたびに、そして鏡の前で彼の言葉を思い出すたび、変わってしまった内面とともに変わらない外見にも失望する。自己を裏切るのはいつだって自分自身であるのかもしれない。

玄関の方から、鍵を差し込み、それを回す音が聞こえた。

この家の鍵穴は古いせいで噛み合わせが悪くなっており、次第に回し難くなってきている。開けるときにはちよつとしたやり方があるのだが、無理に開けようとするとこつといった音が響く。恒樹はよくこつといった開け方をしていた。

恒樹は数年前から新しいものに付け替えようとしていたそうだが、急を要することでないためそのままにしておいたのだ。そのうち海外転勤が決まり二年間この家を空けた。そして帰ってきたはいいが、今となってはこの鍵にも慣れてしまったため、彼は結局これを放置していた。

彩子は玄関へと向かう。

「お帰りなさい、恒樹。今日は早かったのね」

「ただいま。珍しく早く終わったんだよ」

彩子は恒樹の腕に絡みつく。その温もりが先ほどまで彼女に纏わりついていた不安を和らげた。

六

空は高い。けれど気温は夏の名残を漂わせていた。

透は大学構内のラウンジにいる。学内で彩子と待ち合わせるときはここを利用することが多い。

後期に入り、数日が経った。

三年目の夏季休暇はアルバイトを多めに入れ、たまに友人と出かけ、ということを繰り返しているうちにあっという間に過ぎ去った。透と彩子は学部が違ったため構内で出会うということは滅多にない。だからこうして時間を作らなければ会うこともなくなった。

透はさっきの講義で使用した資料に目を通していたが、直にそれが頭に入ってこなくなり脇へと片づけた。

たまたま空いていた奥の席はテーブルの横に窓がある。窓の外には背の低い木々が密集しており、ほとんど景色は臨めない。辛うじて光を取り入れている程度のものだ。

透は景色の見えない窓を眺めながら、自分と彩子は互いに秘密が多いと改めて思った。今までその秘密を共有しようと思ったことはない。興味がない、というよりはあえて興味を持たないようにしていた。本音を言えば気にならないわけではない。

自分たちの秘密は誰にも話すつもりのないものだ。けれどそれをつい吐露してしまうときもある。

例えばそれは酔っている時だ。いつもとは比べ物にならないほど饒舌になることがある。彩子もまた、そういう傾向にある。そういった時に限り、彩子は恒樹について話すことがあった。

その時に感じたのは、前に彩子が話していた「好きな人」というのが、恒樹のことではなく別の人なのではないかということだ。彩子の話しを聞くうちに、その中にいくつか矛盾が生じていることに気づいた。また、彩子は恒樹とのことを「傷を舐め合うような関係」と言ったことがある。だからそれが恒樹のことではないと考えた方

が自然だった。

彩子が強い憧れと尊敬を抱き、近くにいながらも決して触れ合うことはできない相手。透はその人物に心当たりがあった。

カフェオレを片手に彩子が現れた。食事をするわけではないため、彩子は透の正面の席に着いた。

「最近、どう？」

透は思わずそう尋ねていた。彩子は苦笑する。

「どつって……そんな漠然としたこと聞かれても答えようがないわよ？」

「あの人は、どうなったの？」

「……別にどうにもならないわ。だってあの人には付き合ってる人いるし」

「結婚してる、じゃなくて？」

一瞬、彩子は怪訝そうな顔をしたが、透の言わんとしたことに気づいたのか彩子から表情が消えた。

「つまらなそうに顔をそむけた。」

「なんだ、気づいてたんだ？透って勘いいね」

「気づいてないって言った方がいい？」

「気づいてないふりをし続けてくれた方が良かったかな」

彩子はカフェオレを一口飲んだ。

透は彩子を正面から見つめる。透の目に、彩子の顔は一見微笑んでいるように見えた。けれどその目の奥には冷ややかなものが潜んでいた。

「本当にその人のこと好きなの？」

「……本当にとってどういう意味？」

「どつって、そのままの意味よ」

彩子は顎を少し上げた。

「好きよ。これでいい？」

「愛されたいだけでしょ？」

彩子は胸の位置で組んでいた指に力を入れた。

「透に何が分かるのよ」

「短い付き合いじゃないんだし、これでも分かっているつもりだけど？」

「透に関係ない。余計な詮索はしないで」

彩子には透を非難するつもりはなかった。彩子は今、動揺しているのだ。

彩子は透に自分を晒したいと思ったことがある。その時は干渉を受け入れるだけの余裕があった。嫌っているはずの干渉を受け入れてでも、相手と何らかの繋がりを得たいと思っていた。

けれど今のように強い不安を感じているときは、とても干渉を受け入れることなどできはしない。拒絶することではか自らを保つことができなかった。

「このこと、透はどう思った？」

「どうって……」

「自分には理解できないこと？私を軽蔑する？それとも」

「カフェオレで酔ったの？」

透は思わず彩子の言葉を遮った。

彩子は今にも泣き出しそうな顔をしていた。こんな彩子を見るのは初めてのことで、透の心は揺れた。

透の知る限り、彩子は冷静な人間であった。周囲の者が焦っているようなときでも、彼女一人が平静を保ち、的確に物事を処理する。そんな場に立ち会ったこともあった。そんな彼女がさっきの会話でどうしてここまで動揺し、感情的になっているのか透には理解できなかったのだ。

透が気づいてしまったことは彩子も気づかれなくなかったことであつた。透自身、彩子に話すことのできないことはある。しかしそれらを同等に捉えることはできない。

彩子は頬杖をついて顔を窓の方へと向けている。向かい合っているため、彼女が顔を背けていても、透がその横顔を見ることはでき

る。そのほとんどは手のひらで覆われているが、わずかに瞳が覗いた。それは涙に濡れていた。

思わず透は尋ねる。

「……どうしてそれが泣くほどのことなの？」

彩子は何も答えなかった。おそらく何か口にしようとするれば、今以上に感情が昂ぶるからであろう。

透は周囲を窺う。

端の方の席を選んでおいてよかったと今になって思う。この位置であれば他の席から彩子はほとんど見えない。そしてある程度の騒がしさがあるため会話の内容を聞き取られる恐れもまずない。

透は先ほど遮ってしまった彩子の問いに答えることにした。

「私は別に軽蔑なんてしないわ。確かに驚いたけど、それは思ってもみなかったからよ。理解はできなくても許容はできるわ」

頬を覆っていた彩子の手が口元へと移動した。目元が露わになり、その赤みは彩子の感情の揺れ幅と比例していた。

彩子が目を伏せたとき、手の甲を涙が伝った。透はそれをじっと眺めていた。

*

恒樹は香奈子に指定された店へと向かう。そこは香奈子がよく利用しているという店で、今そこにいるから仕事が終わり次第来て欲しい、という連絡が入った。恒樹は一時間ほどそちらに着くと答えたのだが、実際は伝えた時間よりも三十分ほど遅れてしまった。

店内に入り、視線を巡らす。数秒の猶予を持って、恒樹は足を進める。

「お疲れ様」

「何の用？」

恒樹は香奈子の顔も見ずに、その隣に腰を下ろす。

「久しぶりに一緒に飲もうと思って」

香奈子はそう言って、恒樹に自分と同じ物をオーダーした。恒樹から無意識にため息が漏れた。

この半年というもの、こういったことが何度もある。香奈子は久しぶりに、などと言っているが、恒樹にとっては久しぶりなどという気はしていない。恒樹がこういった誘いを断れないでいたのは、これを話し合いの場として利用したいと思っっているからである。もっとも、彼女からその話題に触れることは一度もなく、恒樹にしても何度かその話を持ちかけたのだが、はぐらかされてばかりだった。話にならないのであれば、それを不快に思っっているのであれば、断ればいいだけのことである。しかし恒樹はこのような呼び出しを受けるにつれ、口で言うほど不快に感じなくなってきたのだ。これは、慣れ、というものなのだろうか。

「香奈子、できればこういうことはやめてくれないか？」

「どうして？」

「……迷惑だから」

香奈子はグラスを手の中で弄ぶ。カラカラとなる氷の音は恒樹に次の言葉を急ぎ立てているような気にさせた。

「正直、君が何を考えてるか分からない。俺に何をさせたいんだ？」

香奈子はグラスをテーブルの上にゴトリと置く。

「強いて言うなら、私は以前のように戻りたいの。でも恒にその気はないんでしょう。だからこれで我慢してあげてるの」

「……はつきり言って、こうして会うことすら俺には苦痛だよ」

「ずいぶん、はつきり言ってくれるのね」

「……本心だからね」

「今まで散々本心なんて言ってこなかった人が何言ってるのよ」
グラスを持つ恒樹の指に力がこもる。香奈子は恒樹を追い立てるように続ける。

「私と別れて別の人とやり直したいんでしょう？」

「……そういう話をしてるんじゃないよ」

「またそうやって本心は言わないのね」

香奈子は冷ややかに言い放つ。恒樹は黙った。

今、香奈子に問われたこと、すなわち彩子のために別れたいというのが本心かどうかであるが、これについて恒樹は否定する。恒樹にとつて香奈子のことと彩子のごとは全くの別問題である。

確かに香奈子と上手くいっていれば彩子との関係は成立していなかったであろう。しかし、だからといって彩子と上手くいかなかったら香奈子と元鞘に戻るのかと言われればそうとは言えないからだ。それでも香奈子と完全に切れることなど、恒樹にはおそらくできない。零か百か、そんな極端なことを望んでいるわけではない。

「どっちにしても、いつまでもこんなこと続けるわけにもいかないだろう?」

「そうね、恒は本当に疲れてるみたいだし、何だか悪い気がしてきたわ」

恒樹の言うこんなこと、というのは別居のことを指していたのだが、香奈子は今日のような呼び出しのことと理解したようだ。

「今度はいきなりじゃなくてちゃんと約束してから会いましょう。それならいいでしょ?」

「ああ」

「じゃあ、次はいつ会える?」

「……週末からまた出張だから、早くとも来週の半ばぐらいになるよ」

「戻ったらすぐに連絡ちょうだい」

香奈子は席を立った。恒樹はその後姿を見つめる。

香奈子は昔からこうであった。人との接し方が高圧的で独断的だから人と衝突することがよくある。恒樹は香奈子のそういう面を不快に思うことはあったものの、それを咎めることはしなかった。それには面倒な言い合いになるのを避けるためというのも確かにあったが、恒樹は香奈子がある意味ではとても好いていたのだ。二人はまるで似ていないが、だからこそ他の人間からは分からない互いの一面を見ることができた。

恒樹は香奈子の性格を知り尽くしているつもりであったし、香奈子にしても自分を一番理解しているのは恒樹であると思っていた。

二人は大学の頃からの付き合いで、卒業して一年後に結婚した。その頃からこのスタンスはずっと保たれたままなのだ。幸か不幸か、恒樹のこの「事なかれ主義」は彼らの関係を悪化させない最大の要因であった。

だから未だに離婚は成立しておらず、協議をしても平行線のまま決着がつくことはなかった。今日のように話し合いにすらならないことが常だった。

香奈子は少なからず彩子の存在を知っているようだ。先ほどの口ぶりは単なるカマかけではないだろう。

恒樹の香奈子に対する感情は決して憎しみではない。かつては確かに彼女を愛していたのだ。だから無下にはできず、強引にことを推し進めることに消極的であった。

恒樹は離婚に伴う煩雑さについて、ある程度は分かっているつもりでいた。恒樹の両親も離婚しており裁判沙汰にまで至ったという経緯がある。その財産分与で母が得たのがあのマンションだったというのが皮肉である。

その母も恒樹が大学生の頃に他界した。恒樹の目から見ても母は苦労しているように映った。それは婚姻中も離婚後も変わらなかった。その長年の苦労が祟ったのだろうか。母の死因は胃癌だったのだが、医者にかかった頃には既に末期であり、発覚してから程なく息を引き取った。それがあまりにあっけない最期であったため恒樹はなかなか母の死を受け入れることができなかった。

受け入れることができるようになった頃に湧き上がってきたのは、母への哀惜ではなく、父への怒りだった。母の死を悲しめないでいる自分を情けなく思いもした。冷たい人間であると恥じた。

恒樹にとって彩子は労わることができ存在だった。彼は何の見返りもなく自分から愛を与えることのできる存在が欲しかった。恒樹は彩子という時だけ自分の中に思いやりや気配りといった細やか

な愛情があることを認識できた。そういった意味において、彩子の存在は恒樹にとって香奈子の代わりではなかった。

恒樹が彩子に香奈子のことを話したのは、出会ってしばらく経ってからだった。厳密に言えば、結婚していることを話したのは初めて会ったその日のことで、別居していることについて話したのはその数ヶ月後だったと記憶している。

彩子と交わした会話の中に何度となく香奈子のことが出てきていたように思うが、恒樹は進んで彼女のことを彩子に話そうとはしていなかった。あの頃、香奈子についての何を話しても、結局は彼女に対する非難しか出てこなかったからだ。つい口について出てしまいうそになる言葉を必死で抑えていた。どうにもならないほどに深い溝を作ってしまったからこそ、彼女に対する否定的な言葉を口にするのは却って辛いものがあったのだ。次第に香奈子のことを考える時間は少なくなり、特に彩子という時は全く思い出しすらしなくなるようになった。

それは後ろめたさによるものではなく、恒樹は彩子と二人でいる時は彼女以外の全てから解放されたいと思っていたからだ。

全ては逃避であった。これが一時的なものに過ぎないのか、いつか自分はそれと向き合う気であるのかどうか、恒樹には疑問であった。この疑問を抱えていくにつれ、一体、自分は何を繕おうとしているのかが分からなくなった。そのうちに自分は何ら罪悪感など抱える必要はなく、今確かに存在している流れに身を任せればいいのではないかと思うようになっていった。そう考えるとどこか気持ち晴れたように感じた。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

七

彩子は恒樹のことを考えるとき、安らぎを感じながらもどこか不安に襲われる。それはきつと自分たちの関係が不安定なものであることに起因しているのだろう。

恒樹は香奈子と会っていることを彩子に隠す素振りがあまりない。それが逆に信用に繋がっている面もある。だから彩子ができることを不快に思うことはあまりない。しかしそれは彼らが二人でいるところを実際に見たことがないせいかもしれない。

もし恒樹と香奈子が一緒にいるのを目にした時、自分はどう思うのだろうか。逆に、二人でいる時に香奈子と会うようなことがあつたら、恒樹はどんな風に振舞うのだろうか。

自分の名前を呼ぶ聞き慣れた声に彩子が顔を上げると、目の前には恒樹がいた。その瞬間、胸の一部にあつた一抹の不安が消え去るのを感じた。

ここは二人が待ち合わせによく使うダイニングバーだ。一階席と二階席があり、二人は二階席の方をよく利用する。恒樹と過ごす時間は彩子にとって貴重なものだった。それほど頻繁に会えるわけではない。そしていつまで続くか分からないような関係だ。こうして穏やかな気持ちで過ごすことにこそ価値がある。逆に言えば、そうでなければ価値がないのだ。だから互いに感情をぶつけ合うようなことはしない。

彩子は自分たちの関係はまるで箱庭の中で見る夢のようなものだと感じている。同じ夢を見、同じ夢を共有していく。二人はその中で互いの価値を見出している。

彩子は化粧室で鏡を覗き込んだ。髪型もメイクも特に崩れてはいない。リップグロスだけを塗り直した。

鏡に映る自分の姿に少し違和感を覚えた。これは今に限らず、鏡を覗くたびによく思うことである。同じ鏡ならばそう印象が変わる

ことはない。けれど場所が変われば全く違うように見える。これは単に鏡の所為なのか、それとも自分がその場にに応じて変わっているからのかは分からない。今日、既に何度もこうやって自分の姿を映している。今の自分の顔は其中で一番大人びているような気がした。

ふと、隣から視線を感じた。鏡越しに目をやるとその人物と鏡の中で目が合った。彩子の知っている人かとも思ったが、どう記憶を思い起こしても誰とも合致しない。今の自分の姿に何かおかしいところがあるようにも見えない。

彩子は横に向き直った。

「あの、何か？」

不思議そうに問いかけると、女性は少し驚いた様子であったが、すぐに柔らかく微笑して答えた。

「いえ、何でもないの。ごめんなさい」

彼女の涼やかな外見とよく合う透き通った声だった。三十代前半くらいだろうか。この店にいる女性のほとんどがそうだが小奇麗な人であった。黒いパンツスーツが良く似合っていた。

女性は先に出て行った。少し不審に思った彩子だったが、特に気にかけることなく化粧室を後にした。

彩子が席に戻ろうとすると恒樹が煙草を吸っているのが見えた。

彩子は少し離れたところからその様子を伺う。紫煙をまとった恒樹はどこか別人のように見えた。それはこの店の持つ空気のせいなのか。それとも自分が少し酔っているからなのか。

しばしぼんやりと眺めていると恒樹と目があった。恒樹は灰を落としながら彩子にやわらかく笑いかけた。彩子はそれにつられて表情が緩んだ。

そろそろ出ようと恒樹が言った。彩子は足にも酔いが回っているようだった。彩子の様子に気がついた恒樹は、階段を下りる前に彩子に腕を貸した。階段を下りている時、カウンター席にさっきの女性がいるのが目に留まった。彼女も恋人連れのようだった。

階下を眺めていた彩子に彼女が気づき、あつというような表情を示した。そしてその女性は隣にいる男性に何か耳打ちするような仕草を見せた。そのとき、男性の横顔が彩子の視界に入った。いつもならば後姿だけでも気づくはずだった。その隣にいたのは恭介だった。

いくら酔っているとはいえ見紛うはずはない。

恭介がこちらにちらりと視線を向けた。彩子は恭介と目が合ったような気がしたが、彼は何事もなかったかのようにすぐに向き直った。

恒樹と彩子は階段を一段一段下りていく。この店を出るにはあのカウンターの前を通らなくてはならない。その瞬間が徐々に近づいてゆく。

恭介は彩子に気がついてはいるはずなのだ。彩子は絡めた恒樹の腕を更に抱き寄せる。恒樹が何か声をかけたが、彩子はそれには答えず少し足を速めた。

カウンターチェアに座る恭介と立っている彩子はだいたい目線が同じくらいになる。二人はスツとすれ違った。その瞬間、彩子は息をするのも忘れていた。

そして怖いもの見たさのような感覚から、彩子は視線を左へとやった。恭介の視線は右に向けられていた。形状のよく似た瞳が至近距离でかち合う。彩子の目には険しさの中に怯えを潜ませていた。恭介の目には好奇の中に非難を含ませていた。

それはほんの数秒の出来事だった。けれどその一瞬一瞬に様々な意味が込められているかのような重い数秒であった。

彩子の指に力がこめられた。恒樹に体を預けるようにして店を後にした。

通りでタクシーを拾った。

恒樹は腕にしがみ付いたままの彩子を気分が悪いのかと気遣った。彩子はそれに対し首を横に振ることで否定を伝えた。二人は恒樹の

マンションに着くまで一言も口を聞くことはなかった。

室内に入り、彩子はやっと恒樹の体から離れた。彩子があるときに見上げた恒樹の顔は優しく微笑んでいた。

彩子にはこの笑みの意味するところが分からなくなっていた。彼は笑顔で本心を隠すのだ。

目は一瞬の心の動静が表れやすい。一方、口は長期的な心情の変化を表す。笑顔は目からも口からも本心を遠ざけてしまう。だから何も語らずに笑うことは相手を惑わすことに適している。

彩子は今までこのことに気づかなかったわけではない。彩子も恒樹と同じくずっとそうしてきたのだ。

彩子はもはやそんな風に笑うことができなくなっている。こうして作り笑いをやめてしまえば恒樹に自分の本心が伝わるのだろうか。察してほしいと思いつながら、彩子は目を閉じた。恒樹は彩子の唇に自分の唇を静かに落とす。

恒樹も彩子も、二人でいる時には一切余計なことを考えたくないと思っていた。

恒樹が逃れたいと思っていることと彩子が逃れたいと思っていることは質が異なる。それらはまるで正反対だ。けれど恒樹が彩子に抱く罪悪感と彩子が恒樹に抱く罪悪感とは同質だ。恒樹は香奈子への想いを憎しみに変えないために、彩子は恭介への想いを押し留めるために、互いを利用する。

目的のために誰かを利用することは罪悪感を伴う。罪悪感を消すために自分を欺こうとした。騙し合って愛し合っているという事実を忘れるために、自らをも欺瞞の渦に陥れた。

けれど、彩子は恒樹を愛するようになっても恭介を忘れることはできなかった。結局、望むものが増えたに過ぎなかった。一方、恒樹は彩子を愛するようになったことでもかつて自分の中にあつた香奈子への想いを思い出すようになっていた。次第に、自分が彼女を憎むことなどないと感じ始めていた。

今まで何とか釣り合いの取れていたはず関係は、罪悪感を消すこ

とよつて徐々に軋み始めていた。

背中を這う恒樹の指が造られた愛を更に強く縫い合わせていく。それを受け入れるのかどうかの選択肢は彩子に与えられているように思える。しかしそれは答えが一つしかない、巧妙に細工がされた仕掛けなのだ。だからこれにはまっぴが道はない。自分自身が仕掛けた罠にはまるよりも、他者に仕掛けられた罠にはまっぴがくことの方が賢い選択だ。彩子は自分にそう言い聞かせる。

彩子の恒樹への執着は、満たされない想いに比例して肥大している。行き場をなくした想いは肉体という狭い器の中で荒れ狂っている。満たされない想いも、造られた想いも、散り散りに引き裂かれていきそうな感情の全てを抱え込み、それらを恒樹に委ねようとした。

突如押し寄せた波とともにそれらは深く潜るように、奥へと沈められていく。思考を閉ざし、感覚だけを研ぎ澄ませる。

そうしてさえいれば、その先にある確かな平穩を手に入れることができるはずだった。

求められれば捧げたくなる。捧げれば求めたくなる。だからこそこの関係は成り立っている。これを意味あるものにし続けなければいけない。そのためにこの胸に触れるものは熱く沸き返るような情熱でなくてはならない。例え偽物であったとしても、それに気づきさえしなければ何ら支障のないことだ。

けれど、黒を白と思ひ込めるほど盲目になることはできなかつた。それに気づく瞬間、全てが崩れていく。必死に抱え込もうとしても、その傍から何もかもが引き剥がされていくのだ。

ここに愛は存在していると言えるのだろうか。二人は互いに利用し合っているが、その比重はどちらの方が大きいのだろうか。

その答えは黒い渦に飲まれていった。

*

彩子は玄関のドアを開けた。恭介はまだ帰ってきていないようだった。

リビングへ入る。テーブルの上に置かれた煙草を取り上げた。恭介が忘れていったものなのだろうが、これがいつからここにあったのかを彩子は知らない。

最近、彩子と恭介は顔を合わせていなかった。同じ家に住んでも、丸一日会わないまま過ごすこと日が増えた。それでも一緒に住んでいるということは別々に暮らしていて会わないのとは違う。だからそのことで悲観的になることはなかった。けれど昨夜あんな形で恭介に会ってしまったことは、彩子を打ちのめすには充分のことだった。

煙草を元の位置に戻し、ベランダへ出る。

少し寒いぐらいだったが、体が妙な熱を持っており、今の彩子に夜気は心地よく感じられた。そのまま手すりにもたれかかり、街の明かりを眺めていた。

恭介は玄関のドアを開けた。

リビングに足を踏み入れたとき、彼はベランダに出ている彩子を見つけた。日中ならともかく夜ともなればかなり冷え込んでいる。それにもかかわらず彩子は薄着のまま手すりにもたれかかっている。窓は開け放たれたままなので、窓から冷気が部屋に吹き込んでいた。

恭介は更に足を進め、開け放した窓に手をかけた。

「彩」

恭介の声に彩子はハッと振り返った。そしてすぐに目をそらした。

恭介は室内に入ろうとした彩子を見下ろしながら言う。

「久しぶり」

「……昨日会ったじゃない」

彩子は顔を背けながら恭介の横を通り抜けた。

「無視したくせに」

恭介がそう言いながら口元に薄い微笑を浮かべている。彼の言動一つ一つが彩子にとっては挑発的なものに映った。

彩子は恭介の方に向き直った。

「邪魔をしたくなかったから気を遣っただけよ。無視したのはそっちでしょ？」

「俺は驚いてただけだよ」

恭介はテーブルの上の煙草を取った。慣れた手つきで一本取り出し、火を点けた。

煙を吐き出しながら、その先を続ける。

「あいつがさ、俺とそっくりな子を見たって笑いながら話してきたんだよ。まさかお前のことだとは思わなかったからさ」

あの女性の視線にはそういう意味があつたのかと今更ながら彩子は納得した。

「全然驚いてた風には見えなかったわ。さすがね」

質に優劣をつけなければ、こつやつてすらすらと嫌味が出てくる辺り、彩子も恭介と近いものがある。

「お前も青ざめてたわりにはけつこつ平然としてるように見えたよ。さすがだね」

恭介の声には嘲笑の中に少しの怒気を含んでいるように感じられた。彩子は彼の言葉の内容よりも、その声に対して少し苛立った。

「もしかして怒ってるの？」

「そつかもな」

「何に對して？」

「分かっているのに聞き返す癖は何とかならないのか？」

明らかに恭介が不機嫌であるのが伺えたが、それは彩子にしても同じことであり、ますます苛立ちが募るだけであつた。

今まで彩子と恭介が互いに激しい感情のぶつかり合いをしたことはない。大人と子供の差があるため、恭介が彩子に対して冷静さを失うことなどなかったからだ。

けれど二年前のあの時は一歩間違えれば酷い口論になっていたのかもしれない。そして今とあの時の状況は同じものだ。恭介の自分に対して冷静さを失わせてみたいと思つた。彼の保護者としての顔

を崩してみたかったのだ。

昨夜と同じぐらいの距離で二人の視線がぶつかる。昨夜と違うのはその目線の高さだ。普段であれば何とも思わないはずのこの視線が今は見下されているように感じられて彩子の不満は増していく。

「私だって怒ってるわ。その理由が恭介に分かるの？」

「どうせ下らないことだろ。お前はいつも下らないことで機嫌を損ねるから」

「それは恭介が私を試すようなことばかり言うからじゃない」

恭介は勢いよく煙草を灰皿に押し付けた。

「それが下らないことじゃなくて一体何なんだ？」

「恭介だって下らないことで怒ってるくせに」

「いい加減にしろよ」

低く響く鋭利な声だった。彩子はじつと恭介を見つめる。

恭介は顔にかかった前髪を指で払った。そのまま手を額に宛がう。それは必死に苛立ちを抑えようとしている素振りだった。

「お前変わったな」

普段恒樹に言われることとの逆を恭介に言われたことを彩子は可笑しく思った。

「そう？よく変わらないって言われ」

「変わったよ」

恭介は彩子の言葉を遮る。そしてそのまま黙り込む。

「恭介の言いたいことが分からない。私が変わると何か不都合でもあるの？第一、変わらない方が変じゃない？」

恭介は何も答えない。彩子は恭介の腕を掴み、微笑を浮かべながら覗き込む。それが彼にどんな風に映るのか、彩子は熟知している。「ねえ、変わらない方が扱い易かったとでもいうの？」

恭介は彩子の手首を掴み、声を荒げた。

「これ以上俺を怒らせるな！」

ほんの数秒、二人は全く動かなかった。

彩子の手首を掴んでいた力が緩められると、彩子は恭介の手を振

り払った。

一つの目的は遂げられた。

それは彩子が望んだ通りの結果だった。また、今まで必死に築き上げてきたものが失われた瞬間でもあった。

彩子は部屋に戻ると、ベッドに腰を下ろした。突如強い疲労感に襲われ、ベッドに倒れ込むように横たわる。少しひやりとした感触が心地良かった。同時に胸を刺すような悲しみが沸き上がり、思わず両手で顔を覆った。体を丸め、布団の端を握り締める。

掴まれた手首に少しアザができていることに気づいた。まだ掴まれた感触が残っている。

心の平穏を保つことができない。胸を締め付けるように突き上げてくる痛みにも身を固くする。

彩子と恭介は奇妙な関係だ。二年前、彼らが別々に暮らすようになったとしても、二人の関係はそれまでと少しも変わることはなかった。以前と変わらず二人で会うことが幾度となくあった。そんな中、彩子は恭介への想いを忘れたと思っていた。こんなことに悩まされることのなかった頃へ戻りたかったのだ。

今年の春、もう一度生活を共にするようになったきっかけは恭介からもたらされたものであった。彩子はその誘いを迷うことなく受けた。もしかしたら昔のようになれるのではないかという期待があったからだ。初めのうち、彩子の心は穏やかな波の上を漂っているようであった。けれどそれは一歩踏み間違えれば崩れ去るようなものでもあった。

平穏を維持していくために、彩子は恒樹の存在を必要とした。恒樹への想いを執着だとするなら、恭介への想いは思慕といったところだろう。

彩子はできうる限り恭介の負担にならないよう気を払っていた。彩子にとって、恭介存在はあまりに大きい。ずっと求めていた彼を失うことだけは避けたかった。自分の存在が恭介にとって迷惑なも

のとならないための努力は惜しまなかった。

けれど恭介にとつては彩子の我が儘を受け入れる用意はあつても、恋愛感情に依えるつもりはない。だから彼は彩子に釘を刺すようなことを言う。考えてもみればそれは当然のことで、恭介の判断は正しい。誰の目から見ても、恭介が彩子に深入りすることは避けるべきなのだ。そして、彼が彩子を受け入れる必要はない。そのことで彩子が傷ついたとしても彼には何の落ち度もなく、責任を感じる必要もないことだ。

何もかもが無駄なことなのだと、時折、彩子は感じていた。

何故、自分が愛したのが恭介だったのだろうと彩子は思う。不毛な相手だと分かっていたはずだ。ただ想いが通じないだけではない。仮に想いが通じたとしても、何にもならない。それなのに彩子の想いは止まることも、引くこともなかった。彩子にとつて彼でなければならぬ理由などない。そんな理由は必要ないのだ。

透は彩子の想いを「愛されたいだけ」のものと称した。それは射た答えなのかもしれない。

ただ、元はそんなことを望んでなどいなかった。傍にいたことができれば、それで幸せだった。彼に一番近いのは自分だと思つていて、自分の知つている彼だけがその全てだと思つていた。どんどん欲張りになった。そして、どんどん臆病になった。

嫌われるのではないかという不安に襲われる。嫌われないために多くを望んではいけないのだと自制するほどに、想いは弾けんばかりに膨れ上がる。その繰り返しだった。

彩子はしばらく眠つていた。それは深い眠りだった。目覚めたとき、寝起きはそれほど良い方ではないのに、頭がすっきりしていた。どのくらい眠つていたのだろうかと時計に目をやると、五時半を回っていた。しかしそれが午前なのか午後なのか判断がつかなかった。彩子の手首に巻かれているものもアナログ時計である。

外の様子を伺つても、薄暗く余計に判断がつかなくなつてしまった。彩子は冴えた目ですつと外を眺めていた。徐々に陽が差し

始めた。夜が明けていく。

夕方であってくれればよかったと彼女は思う。彩子とはにかく時間を潰したかった。眠っているうちに、いつそ何日も過ぎていて欲しかった。

昨日、恒樹は海外に発った。彼はいつ帰ってくるのだろうか。

無性に、恒樹に会いたいと思った。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

彩子は帰宅前に恒樹のマンションの前まで来ていた。

恒樹は帰国する際、彩子に連絡をしないこともよくあった。だからというわけでもないのだが、もしもう帰ってきているのなら今日会えればいいと思った。

まだ帰っていないければ無駄足となるが、あえて事前に連絡を取らなかった。電話というものは、繋がらなければその場で希望が断られたような気分になるからだ。また、時間を潰すことが目的でもあった。彩子は真つ直ぐ家に帰りたくなかった。今、あの空間は非常に息苦しいものなのだ。

あれから数日経つが、彩子は恭介と会っていない。何ら言葉も交わしていない。あのときは互いに気が立っていた。ただそれだけで済むはずのことをこうして引きずってしまうのは、やはり、今まで一度もあんなことがなかったからだろう。

彩子には恭介が未だ怒っているのかどうかの見当もつかない。かつて思っていたほど、自分は恭介を理解していないのだと思う。勝手に彼を分かったつもりでいただけだ。

彩子にとって恭介は知りすぎた相手である。恭介にとっての彩子もそれと同じである。相手を深く知ること、知った上でそれを尊重することは別物である。互いのことを知り尽くすことが、深い理解に繋がるわけではない。

結局、こうして恒樹に逃げることとなる。逃げているも仕方がないと分かっているが、一体、何と向き合えば逃げていないことになるのかが分からなかった。

彩子はずつといるんな嘘を重ねてきた。自己保身のために媚を売ることも、それに甘んじること、思い起こすほどに自分を偽る行為だった。よく嘘を吐く人はプライドの高い人なのだろうが、嘘を吐くのが上手い人は自分に自信のある人だ。自信もないのに嘘が吐

ける人は自分自身を偽っている人だ。それが自分だ。自己を偽り、現実を見ようとしなさい。

水中から外界を眺めるように、切り離された場所から自分のいるべき場所を伺う。そこからは現実ですら空想と化す。悪い現実から夢へと目覚める。

エレベーターで三階まで上がる。一步一步、足を進めるごとに、落胆の瞬間が近づいてきているのを感じた。だから期待を押し込めようとしていた。

あと数歩というところで、部屋の前に誰かがいることに気づいた。彩子の両目に映るものは彼女の足を止めさせるに十分なものだった。

彩子は今まで何かが起こってもそれほど動揺せずにいることができた。そしてその「何か」が重大なものになればなるほど、自分より平静を保つことができたように思う。保つというより装うといった方が正確なのかもしれない。装うことはまさに嘘を吐くことに等しい。

今、自分の目の前にいる女性がどういいう人物なのかを考える必要はなかった。推測をするまでもなく確信を持つことができた。彼女の容貌も、そこから放たれる雰囲気も、恒樹から聞いていた通りのものだった。

香奈子といつか対面することもあるだろうとは思っていた。ただそれがあまりに突然だったため、少し驚いただけだ。

彩子は立ち尽くしていた。こういった場合、すぐにその場を離れるべきなのだろうと考えていた。例えもう既に彼女が自分のことに気づいていたとしても。

香奈子は彩子の方を見る。睨む、と言った方がいいような視線だった。彩子がすぐに気づいたように、香奈子もまた、すぐに確信を持つことができたようだ。

香奈子は彩子の方へ近づいていく。そして足を止めるのと同時に口を開いた。

「恒に用があつて来たの？」

「ええ」

「まだ帰ってきてないわ」

「それは、出張からですか？それとも」

「出張からよ」

香奈子は彩子の言葉を遮った。何かが彼女の癪に障ったようだ。そんな苛ついた素振りが、彩子にますます平静さを与えた。

「それなら帰ります」

彩子は軽く会釈をして立ち去ろうとしたのだが、香奈子は彩子を引き留めた。

「少し、いい？」

恐れよりも好奇心が勝つたのだ。彩子は迷うことなく頷いていた。香奈子は扉を開け、どうぞと彩子を奥へ招き入れた。彼女からは自分こそが本物であるという優越感が溢れているようだった。

リビングのブラインドは閉じられていて、室内は全体として薄暗い。

彩子はここへはもう何度も来ている。恒樹の留守中に先に来て待っているということもあつた。それにもかかわらず、全く別の空間に足を踏み入れたような気分になった。ここに夢はない。ただ現実があるのみだ。

ここはかつて彼らが暮らしていた場所だ。分かっていたようで、上手く理解できていなかったようだ。香奈子がここを自由に出入りするということは自然のことだ。彼女が別宅を構えようと彼らがまだ婚姻関係にあるという事実が消えることにはならない。場違いなのは自分の方だと彩子は今になって自覚した。

それでも彩子はこの空間の圧力に飲まれるわけにはいかなかった。彩子は香奈子の後を追いかけてリビングへと入る。既に香奈子はソファに座っていた。彩子はその近くまで進むものの、その場で立ち尽くした。

「座ったら？」

香奈子にそう促されても、そこから動くことはできなかった。緊張しているわけではない。いや、自分が緊張しているということをおぼれている。これは、彼女に対する抵抗に他ならなかった。

香奈子は彩子を見ることもせず、話を始めた。

「恒とはいっから？」

「三年……もうすぐ四年になりますね」

四年、ということだが実質は一年半ほどの付き合いだ。

香奈子は大きいため息を吐く。

「……見当がつかないのよ。恒があなたと会うきっかけがどこにあったのか」

香奈子が疑問に思うのも当然であった。恒樹は仕事後や休日に出歩くことがあまりない。それほど隙のない人間というわけでもなく、物事を段取りよく処理できるタイプでもない。学生時代からの付き合いなので、香奈子は恒樹の性格については知り尽くしているつもりだった。だからこそ彩子と接点が全く見えない。

恒樹にこういった存在がいることを香奈子は既に知っており、その人物像がある程度は想定していた。けれど彩子はその人物像と一致しなかった。香奈子の目から見て彩子と恒樹は少し不釣り合いのように思えた。彩子は自分たちよりかなり若いということもあり、生きていく世界が違う人間という印象を抱かずにいられたかった。

なぜ恒樹が彩子に執着するのが分からない。けれど恒樹が彩子を誰よりも大事にしているということは紛れもない事実のようだ。きっと彩子にもその確信があり、それが彼女にこの余裕を持たせている。香奈子はそう思った。

彩子の余裕は虚勢以外の何物でもなかったのだが、冷静さは時に圧力にもなる。

「……オペラは好きですか？」

彩子の問いに香奈子はおもむろに眉をひそめた。

「特に興味があるって程でもないわ。有名な演目なら観に行こうと思う程度かしら。恒だって私と似たようなものよ」

わざわざ恒樹の名を出す辺りが香奈子の彩子への敵対心を表していた。

彩子はそれを軽く受け流す。

「私はオペラに全く興味ないんです。何年も前に一度観に行っただくらいで」

「関係ない話はもういいわ。私が聞きたいのは」

「私が一度だけ観たオペラは「椿姫」なんです」

それを聞いたときに香奈子が少し目を見開いたのを彩子は見逃さなかった。

「あなた、恒樹と観に行く約束してたことあったでしょう？」

彩子は香奈子の目を見据える。その目が少し揺らいだように見えただが、彩子は構うことなくその先を続けた。

「あなたの隣の席が私の席だったんです。でも私の席は舞台が見えづらくて。見えづらそうにしてたら恒樹が声をかけてくれたの。連れが来れなくなったから隣の席をどうぞ、って。それはあなたのことですよね？」

香奈子の顔がどんどん色を失っていく。それに対して彩子は自分の気持ちがあんまり昂ぶっていくのを感じた。彩子は気分が高揚していくのを抑えるのに必死だった。それはとめどなく流れ出る水を手で押し止めようとするようなものだった。抵抗は徒勞に帰し、溢れんばかりに彩子から放たれていた。

「すぐく面白かったわ。オペラってまるで夢の世界ね。煌びやかで華やかで。偶然、知人からチケットが回ってきたんですけど、最初は気乗りしなかったんです。でも行って本当によかった。そのおかげで恒樹に出会えたし。それに恒樹はあなたの席を譲ってくれたついでに、あなたのポジションもくれたから」

横目で伺った香奈子の表情は必死に彩子への怒りを抑えているようだった。苦虫を噛み潰したような顔というのはこういう顔のことをいうのだろうか。彩子は思った。香奈子のように綺麗な大人の女がヒステリックになるのは見えていてあまり気分の良いものでない。

最後の一言はあまりに余計であつたと彩子は自省した。

「嘘よ。そんなわけないじゃない」

彩子は平然とさつき自らの放つた言葉を否定する。

彩子は今まで誰かとこんな風に対峙したことはなかった。いつも今とは立場が違つていた。香奈子を通して過去の自分の姿を見ている。この構図が意味するものは、この場の主導権を握っているのが自分ということだ。彩子が香奈子に聞きたいことなど何も無い。逆に香奈子が彩子に聞きたいことは山ほどあるのだ。自分の返答の一つ一つに対する香奈子の反応が可笑しかった。

彩子は詰問されているのではない。自らの想いを悠然と語っているだけだ。

自分は何ら引け目を感じることはない。彩子は自分に強く言い聞かせた。

「もしあなたが来てたら、あの日は舞台の見えづらい席でオペラを観てたわ」

言葉がまるで劇中のセリフのように澱みなく流れ出す。

「もしあなたが来てたら、私が恒樹と会うことなんてこれから先だつて絶対なかつたわ」

過去のある一点を繋いだ糸は切れることなく今なお存在している。

「もしあなたが来てたら、あなたは私なんか振り回されることなかつたのよ」

言葉とは裏腹に高らかに勝利宣言を行う。

畳み掛けるように言葉を紡ぎ出すほどに、彩子の高揚した気持ちには沈静化されていく。それは不思議な感覚であつた。

優位に立った者だからこそこんな妙な気分を味わうことになるのだろうか。今の彩子には香奈子への憐れみなど感じる必要などないはずなのだ。

唇を噛み締め彩子の言葉をじつと聞いていた香奈子がやっと口を開いた。

「あの日、急に仕事が入つたの。だから夕方になって恒に行けなく

なっただって伝えたわ。その時は別に怒ってなんていなかったのよ。でも帰ってきた恒とは喧嘩になったわ。あれはあなたと一緒だった後だったのね」

そして香奈子は俯いた。

あの日、恒樹と香奈子が喧嘩になったという事は彩子にとって意外であった。香奈子の言うように、恒樹は怒っているように見えなかった。むしろ香奈子に理解を示しているようすらあったのだ。

彩子には彼らが何を思っているのか、何に拘っているのかが理解できない。彼らの間には確かに愛が存在しているというのに、何故こんな風に拗れるのだろうか。やはり自分には踏み込めない領域なのだと改めて認識した。そして、彼らを嫌な関係だと思った。

彩子はこう切り出した。

「あなたがどう思ってるのか知りませんが、恒樹はあなたと別れるつもりなんてないわ。あなたと私だったら、恒樹はあなたを選ぶと思うから」

香奈子が訝しげに彩子を見る。

「私が恒樹といたのは彼が海外勤務になる前の一年ほどよ。それと帰国してからのこの半年間。結婚して八年も経つあなたとは違うの」

彩子は苦い笑みを漏らし、更に言葉を続ける。

「知ってます？恒樹って私がいるときにあなたから電話かかってきたら席を外すの」

それが一番悔しくて悲しかった、と静かに彩子は付け加えた。

「良くも悪くも、互いに利用してただけよ。恒樹は現実から逃げたかっただけ。私も彼は手近にいたからちよつと良い存在だったの」
「香奈子は彩子の言葉の意味するところを正確に理解できたわけではないだろう。けれど彩子が恒樹を自分から奪つつもりはないという事は理解できたようだった。」

彩子はこの女性が自分に抱いている悪意が薄れていくのを肌で感じ取った。香奈子の目が徐々に伏せられていくのを彩子は醒めた目

で眺める。憐れみを向けるのはこれで終わりということだ。

彩子は香奈子と対面した時から、自分の体の奥から、熱く、赤黒い感情が湧きあがってくるのを感じていた。香奈子に挑発的な態度を取ることでそれを抑えようとしていた。けれど徐々にそれが難しくなってきた。

堪えきれずに彩子はこう言った。

「だから、これからも恒樹と会いたくなったら一緒にいるぐらいいいですよね？」

そして香奈子に笑顔を作って見せた。彩子は自分が相手にどう映るのか熟知している。その笑みは毅然とした余裕と傲慢さに満ちていた。

それは彩子の持つ印象からすれば全くそぐわないものであった。だからこそ香奈子のプライドを刺激するに相応しいものであった。

香奈子が勢いよく立ち上がる。彩子はその動きにつられるかのように香奈子に視線這わせる。香奈子の表情は怒りに満ちており、彩子にはそれが可笑しく感じられ、うっとりとしたような眼差しを香奈子に向けていた。

香奈子のバッグが彩子の左目の端辺りを線のように走った。

「ふざけないで」

香奈子が廊下を駆け抜けていく足音とともに、彩子のその笑みは解かれた。それと共に涙が零れた。

果てしない欲望もどこかで線を引かなくてはいけない、以前透に語った自分の言葉が脳裏を過ぎった。口ではいくらでもそんな言葉は言える。もっと早くそうしなければいけなかった。そんなことは嫌になるほど分かっていった。それができなかったのは恒樹を失った後の世界を思い描くことができないからだろうか。

恒樹の穏やかに微笑む目が好きだった。それが自分だけに向けられているのがうれしかった。けれど次第にどうすれば自分だけが愛されるのかと、そればかりを考えるようになっていた。

今日、彩子は自分の中にある恒樹に対する独占欲を初めて自覚し

た。それはこの目で香奈子の存在を確認できたからだ。彩子がこの家に来るようになった頃、既に恒樹には香奈子の影はなかった。そしてその頃にはもう恒樹が香奈子の話を口にするとはなくなっていた。

また、恒樹が香奈子と接触を持っていることを不快に思いつつも彼を縛るようなことをしなかったのは、恒樹が自分を大切にしていると感ずることができたからだ。そもそも、彩子は香奈子と張り合うことなど必要でなく、恒樹にとっての一番を争う立場に二人は立っていないかった。

恒樹は形こそ違いが確かに彩子を愛しており、決して蔑ろにするつもりはなかった。その事実だけで彩子は十分満たされていたはずで、何ら余計な細工を施さずともよかった。

さつき彩子が香奈子に対して語った言葉の中に、彼女が目を背けていた事実があった。もし選ばなくてはならない状況がきたのなら、恒樹はおそらく香奈子を選ぶだろう。

恒樹はかつて香奈子を愛していた。そして彩子は自分が決して香奈子の代わりにはなり得ないということが分かっていた。恒樹が自分を愛しているということ以上に絶対的に存在する事実は、恒樹が決して恋人として自分を選ぶことはないということなのだ。

彩子は自分に悪意を向ける香奈子に対して優越感のようなものを抱いていたが、それは沸き上がる嫉妬や焦燥を無意識の内に覆そうとすることから生じていた。

彩子は何ら優位に立つてなどいない。常に味わり続けていたはずの敗北感を認めたくなかったただけだ。憐れみを向けられるべきは、偽悪的な言動をすることでしか自分を保つことのできなかつた彩子の方だった。

*

零れる涙を指で拭くと目の端に痛みを感じた。

部屋の端に据え置かれている姿見の前に立つ。左目の端は赤く腫れていた。血が少し出ていたようだったが、それはもう既に止まっており、再び傷口が開くようなことはないように見えた。傷そのものはたいしたことはなく、打ち身による鬱血と腫れが主だった。それでも瞬きをするたびに刺すような痛みを走った。

彩子は小さくため息を吐く。

この傷は恒樹が日本へ戻ってくるまでに治るだろうか。こんな場所に傷を作ると目立つ上に傷を負った経緯の説明もしづらい。

あれこれと言いつくを頭に張り巡らせてみるものの、そのどれもが取ってつけたような誤魔化しばかりだった。嘘を考えていると思ふことが余計に、嘘をより偽りめいたものに思わせるのかもしれない。自分自身を偽り続けなければ嘘を突き通すことはできない。彩子は、自身は嘘をつくのが得手との自覚があったが、それを貫き通すことは不得手であると思っていた。

どうせ繕ったところで所詮は偽物、すぐにボロが出るものなのだ。傷が治らなければそれまで会わなければいいだけの話だ。彩子は彼の同情を引きたいわけではない。

患部を冷やそうと思い、キッチンへ向かった。

ボウルに水を張り、その中に氷を入れる。タオルを浸し、しばらくおいてから引き上げる。タオルを硬く絞ろうとすると指先にうまぐ力が入らなかつた。かじかんだ指には痛みだけが残る。緩く絞った状態のまま目端にそれを宛がった。

どうしようもなく気が滅入っている時でも、その状況に対応しようとしてしまう。悲しみだけに浸ることができればいいとも思うが、それを避けることによって一瞬ではあるが不安が消えたように感じることが出来る。同時に、自分がいるべき現実へと回帰させる効果もある。

もう十時になっている。

ここにいる理由はないのだから早く出ていこうと彩子が考えていたとき、玄関のドアを開ける音が彼女の耳に届いた。それは待望で

はなく失望の予感であった。

この家の鍵穴は古いせいで噛み合わせが悪くなっており、次第に回し難くなってきた。開けるときにはちよつとしたやり方があるのだが、無理に開けようとするとこつといった音が響く。恒樹はよくこつといった開け方をしていた。

彩子は左目に宛がったタオルを握りしめた。力を込めた指の間から水滴が腕へと伝っていく。袖を濡らす冷たさよりも更に冷たいものが彩子の背筋を這った。あまりの冷たさに胸が震えた。

彩子の右目が恒樹の姿を捉えた。恒樹はボストンバッグとビジネスバッグの両方を床に下ろす。

「明かりが点いているのが外から見えたんだけど、やっぱり来てただ」

そう言つて変わらぬ笑顔を彩子に向ける。

「どうして今日帰つて……」

「思ったより早く片がついたんだ」

「……それならすぐ連絡くれたらよかつたのに」

彩子は恒樹に聞こえるかどうかスレスレの声でそう発し、顔を背けた。

「携帯の充電、もう切れてるから」

彩子は頭に強い疼きを感じた。恒樹が発する言葉も自身が発する言葉も一音一音バラバラに聞こえ、ちつとも意味をなさなくなっている。彩子がこつという風になるのは大抵、周りの流れに自分がついていけないと感じるときだ。

何かが上手くいかない時やひどく気分が沈んでいる時、何故か悪いことばかり重なって起こる。それは今まさに彩子が置かれている状況だ。良い予感はずっと肩透かしを食らうことが多いにもかかわらず、悪い予感というものは、頭上にあるものが重力に従い足元へ落ちるかのごとくその身に降りかかる。まるでそれらが互いに引き寄せ合つてでもいるようだ。

自身が起こした行動のその全てが悪い方向へと流れて行っている

ことを、あまりにも悔しいと感じた。それとともに徐々に涙が溜まっていくのが分かった。

彩子は声になつたかどうか分からない声で呟く。

「今日は恒樹に会いたくなかつた」

あんなにも彼の帰り待つていたにもかかわらず、彩子口をついて出てくる言葉はこんな程度のものであつた。

「どうかした？」

彩子に近づき、その肩に触れようとした恒樹の手を軽く押しつけた。思わず跳ね除けてしまひそうになつたのだが、どうにかそうせずに済んだ。けれどその僅かな衝撃は涙が零れ落ちるには十分だつた。

床に数滴の雫が散らばる。彩子は身を擦つて恒樹から離れた。

顔を見られたくなかつた。かといつてそれを口で伝えようもない。既に涙の絡みついた声を聞かれるわけにはいかない。例えこの抵抗がもはや意味のないことだとしても、恒樹の前で泣くのは嫌だと思つていた。

先ほどの香奈子との争いを知られたくない。恒樹がいずれ何らかの形でそれを知ることになつたとしても、彩子自らの口でそれを伝えるわけにはいかないのだ。

恒樹に勘づかれてはいけない。そのためにはいつもと同じように振舞わなくてはいけない。

そのプライドを自ら踏みにじるかのように涙は頬を伝う。涙とはこんなにも抑えるのが難しいものだつただろうか。そもそも何故自分分は泣いているのか、泣くほどの何があつたというのか、と彩子は自問した。そんなことに考えれば考えるほど涙は止めどなく溢れ出してしまふ。

「何かあつた？」

恒樹は彩子に問いかけながら肩を抱く。彩子は何も答ええない。彩子は右半身だけを恒樹の方に向けた。涙に濡れ赤くなつた瞳に恒樹が映る。

恒樹はいつも優しく、いつも温かく、いつも切なげに彩子を見る。それは今も変わらなかつた。

確か自分は嘘を吐くのが得意だったと、彩子の頭にその事実が浮かべる。あまり好ましくないこの特技を今活かそうと思った。

「うれしいからよ」

懸命に絞り出された声は脆弱だった。

「でも、いきなりだったからびっくりしたの。だから……」

「だから、泣いてるって？そんな風には見えないよ」

彩子は震えを抑えるために唇を二、三度軽く噛み締めた。

恒樹は指先で彩子の涙を拭う。彩子はそつと目を閉じた。

「そう見えるならそれでもいい」

恒樹の腕をすり抜け、そのまま玄関へと向かう。足取りは少し速めに、けれどそれはあくまで逃げているわけではないものだった。

恒樹は彩子の後姿を数秒見つめた後、駆け出した。そして彩子を後ろから抱きすくめる。

「俺もうれしいよ」

恒樹の声、言葉、腕、それらの温かさがますます彩子を追い詰める。

恒樹の手首の辺りに熱い涙が落ちた。

「……違う」

彩子は恒樹の腕を掴み、俯きながら恒樹の方へと向き直った。そしてゆっくりと顔を上げた。

「私はうれしいから泣いてるんじゃない」

嗚咽で息が詰まりそうになるのを堪え、その先を告ぐ。

「悲しいのよ、どうしようもなく」

恒樹の両腕が彩子の崩れ落ちる体を支える。恒樹はそのまま膝を床につき、彩子を抱きしめた。恒樹は何も言わなかつた。

九

彩子は一週間ぶりに自宅へと戻った。こんなに長い間家をあけたのは初めてのことだった。

袖を捲り文字盤に目をやる。深夜一時を数分過ぎた。

音を立てないようにドアを閉める。普段であれば特に気に掛けもしないことにこうして気を回している自分を面倒に感じた。今、気にすべきなのは時間などではないはずだ。

彩子がリビングの電気をつけようとしたとき、恭介が一人掛けのソファに座っていることに気づいた。テーブルの上のパソコンの明かりが微かに彼を照らしている。

彩子は恭介の方へと足を進めた。覗き込むと恭介が眠っているのが分かった。スーツのジャケットは床に脱ぎ捨て、シャツもボタンを二つ外し、ネクタイを緩めた状態だった。

膝の辺りに置かれた彼の手の中にはアルコールらしき液体の入ったグラスがある。彩子はそのグラスをそっと取り上げた。彼の手には力が入っていないかった。これでよく落とさずにいられたものだと思いながら、グラスをテーブルの上に置く。グラスがガラス製のテーブルと触れ、カチリと音がしたが、恭介の目はそのくらいでは覚めないようだった。

暗がりの中で見る恭介の顔には少し疲れが滲んでいた。

彼はどのくらいの時間こうしているのだろうか。帰宅は遅くなることが多いが、ここ最近もずっとそうだったのかもしれない。

リビングはずっと掃除をしていないと一目で分かるほどに散らかり放題だった。恭介のいるソファ以外、まともに座れそうところもないほどだ。

恭介に声をかけようかとも思ったが、明日にしたほうがいいと思っ直した。彩子はテーブルの上に置かれたリモコンを手に取り、少し肌寒く感じる空調の温度を少し上げた。

そして部屋を出て行こうと身を翻した瞬間、床に脱ぎ散らかされていたジャケットに足をとられた。咄嗟のことで手をつくのが遅れ、膝をフローリングに強打した。

ダンツという音が部屋中に響いた。彩子自身その音に驚いたほどだった。それと同時に膝に強い痛みと痺れを感じ、彩子はその場に座り込み膝頭を押さえた。痛みよりも情けなさから目頭が熱くなつていくのが分かった。

時計の秒針の音すら聞こえる静寂の中、衣服が擦れ合う音が彩子の耳に届いた。次に小さな呻き声が出た。彩子はその方向にゆくりと顔を向けると、半目を開いた恭介と目が合った。

彩子は目を見開いた。

「……彩?」

「あ……ごめんなさい」

彩子の喉から引きつったような声が漏れた。

恭介は首を回し、大きなため息を吐く。そして、

「何が?」

そう吐き捨てソファからゆっくりと立ち上がる。

彩子はまだ床に座り込んだままで、恭介は彩子を見下ろす格好となった。彩子にとって、その目がどこか冷ややかなものに映った。

「何がって……」

彩子は問いをなぞるようにそう漏らした。そして恭介の顔を見ることができずに床に視線を落とした。

とつさに謝ったのは恭介を起こしてしまったことについてだったが、恭介はそれ以外のことを指しているのだろう。恭介は彩子がそれに気づくことを分かった上で意図的にそう言っている。寝起きで嫌味が言えるほど頭の回る恭介に適当な言葉で取り繕っても意味はない。彼の嫌味に対し反論をすることもできず、また、彼の意図する問いにも答えられずにいた。ただ、上からの痛いほどの視線を感じていた。

冷えた空気の中に刻まれる音が数秒の時をまるで永遠の長さのよ

うに思わせる。思わず鼓動が速くなる。

ジツポのカチツツという音が聞こえた。

恭介は彩子が答えることができなかつた問いを再度問う。

「どこに行つてたんだ？」

彩子は相変わらず俯いたまま顔を上げようとしなかつた。恭介は耳の後ろ辺りに指を差し入れ、髪を梳いた。

「別に言いたくないならいいよ。彩の行きそうなどくらい見当つくし」

彩子は床に落ちていたジャケットを恭介に投げつけた。それは恭介の腿の辺りをわずかに掠めただけだつた。

彩子はその行く先を確かめる流れで恭介を見上げた。恭介は、何だ、と言いたげな表情で彩子を見る。

「恭介のそういうとこ、むかつくのよ」

恭介は表情を変えない。それで、とその先を促すような素振りも見せた。

「自分は何もかも分かつてるとでも言いたいの？」

「……ある程度は分かつてるつもりだよ。だから心配してる。お前のやつてることは無茶苦茶だから」

彩子は恭介の言葉が進むにつれて視線を伏せていった。

それを眺めながら、恭介はその先を告げる。

「もしお前が俺への当てつけであいつと会つてゐるならもうやめろ。無駄だから」

当てつけというのは、確かに間違つた表現でないのかもしれないけれどそれを恭介の口から聞くと、彩子は反発を感じずにはいられなかつた。彩子は恒樹との関係が逃避であることを認めているが、自分を決して受け入れはしない恭介にそんなことを言われたくはないのだ。

恭介は彩子の様子を伺いながら、こんな時でもなければ言えないことを次々と述べていく。

「俺はお前には応えられないから」

恭介は念を押すように、無駄という言葉の意味するところを噛み砕いた。

「別に俺はお前のことを迷惑に思ってるわけじゃない。はつきり言つて、それ以前の問題なんだよ」

彩子は押し潰されるような感覚を味わった。体の中心から徐々に力が抜けていく。

もし自分たちの関係が修復できないほどに壊れることになるのなら、彩子はある意味において自由になることはできる。けれど全てが終わるといふことを彩子は望んでいるわけではない。元々の彩子の目的は、あくまでこの関係をできうる限り持続させるということだった。彩子は恭介と一緒にいられるのならそれ以上望むことはなかった。平穩という枠組みの中で彼を愛し続けることができればそれでよかった。

きつと恭介もそのことに気づいていることだろう。だから今こうして彩子に告げたのだ。まだ後戻りできるのだと、彼はその選択肢を彩子に与えてくれているのだ。

それなのに、彩子はこういふときはいつも素直になれないのだ。同情や憐れみといった部類に含まれる優しさには縋らず、差し出された手を跳ね除けてしまふ。優しさを受け入れず、敢えて事態を悪化させる方向へと進ませるのは、後に引けないと思つてしまふプライドだ。

自分の望みと引き換えに手にできるのはそんな下らないプライドでしかない。けれどそのプライドは守るに値するものであるのだ。彩子の望みは肥大してしまい、自分の望んでいるものは決して手に入ることはないと分かっている。だからこそ、せめてプライドだけは守ろうとする。彩子はそれを自覚できるほどには自分を見失っていないかった。

恭介は床に腰を下ろした。彩子は真つ直ぐに彼を見る。恭介の目には力がこもっていないかった。先ほどよりも至近距離でみる彼の顔は疲れ果てているように見えた。その原因のほとんどが自分である

という事実には切なくなり、彩子は自分の手を力を込めた。

恭介は爪が食い込むほどに握りしめられている彩子の手を取った。彼の行動は彩子の胸を震えさせたが、彩子は何も言わず、その行方を見ていた。彩子の手は彼のもう片方の手で包み込まれ、彼の左頬の辺りに添えられた。

そして彩子に問う。

「お前は俺がどうすれば満足？」

どうあれば満たされるのか、彩子の中にその答えは既に出ている。しかしその言葉を口にするにはできない。彩子の望みをそのまま恭介に強要することは、あまりにも利己的だ。彩子は恭介を困らせたわけではない。だが、どの方法を取っても彩子の望みは恭介を困らせるものでしかない。我が儘な言動で彼を振り回すことしかできない自分が嫌で仕方がなかった。

「……もういい」

彩子はそう言って恭介の手を引き剥がした。

「さつき無駄だって言ったじゃない。もうどうにもならないって恭介が言ったのよ？」

我が儘に振る舞いながらも、徹底して凶々しくなることができなかったのは、恭介に見放されなくなかったからだ。

彩子は霞んだ視界の中にいる恭介の顔を見た。恭介の顔は困り果てた末の呆れた笑いでもなく、いつものように不敵に笑んでいるのでもなかった。それはあまりにも憂色を帯びたものであった。

*

恒樹は自宅にいた。彼の目の前には香奈子がいる。

もう何年も、この家で二人がこうして向かい合うことはなかった。香奈子ではなく自分がここにることが異様なことであるかのようを感じる。

二人はまだほとんど言葉を交わしていない。恒樹から二言三言、

声をかけたのだが、それに対して香奈子は一言で返す。部屋中に寒々しい空気が流れる。

香奈子はコーヒールを一口飲み、ようやく自ら口を開いた。

「私、あの子に会ったわ」

「そうみたいだね」

「本人から聞いたの？」

「いや……ただ、明らかに様子がおかしかったからね。君に会ったんだろうと思った。やっぱり会ったんだ？」

「散々だったわ」

「すまない」

香奈子は少し煽るような口調で話題を変える。

「私をここに呼んだのには何か意図があるの？人目を気にせずに話ができるっていう以外の何かが」

恒樹は脚の上で握られていた両手に力を込めた。

「この間、前みたいに戻りたいって言ってただろう？それが過去のどの時点を指すのか分からないけど、こうしていることが自然だった頃も確かにあったんだな、と思って」

「少なくとも、今の私たちは自然じゃないわね。こんな冷たい空間に戻っても仕方ないわ」

「いろいろと香奈子には悪いことをしたと思ってるよ」

香奈子はいつになく低姿勢な彼の言葉に眉をひそめた。

「本当は私が悪いって言いたいんでしょ？恒がそうやって言葉の上だけでは自分の所為に見せたとところで、あなたがこれから私に言おうとしていることは、自分に非があると思ってるなら絶対言えないことだわ」

「否定はしないよ。だけど、その上で自分が悪いと思ってるのは本当だ。香奈子の言う俺が今から言おうとしていることってというのは、早く別れてくれ、とでも？」

けしかける香奈子に対し恒樹は冷静に言葉を選び出す。それは香奈子の興奮を削いでゆく。

香奈子は椅子の背にもたれ、ふて腐れたように息を吐いた。

「私かね、あなたに執着し続けたのはあの子がいたからよ。あなたに別に好きな人ができたのが悔しかったの。とつくに冷め切っていたはずだったのに、それが分かった途端、一気に譲れなくなっただわ。私って案外単純な性格だったみたいね」

恒樹は強張っていた表情を少し緩めた。

「香奈子は単純でもいいと思うよ」

「馬鹿にしてるの？」

香奈子のその問いに、恒樹から笑みがこぼれた。

「馬鹿になんてしてないよ。少なくとも、本心を隠しすぎて自分が何を考えているのかさえ分からなくなるのに比べたらはるかにいいよ」

香奈子は恒樹の笑みの奥に潜む陰りが次第に広がっていくのを見ていた。

恒樹が自分の本音をあまり表に出さないといいことを苦々しく思うことはあったが、それでも彼のそういうところが自分との関係を良好にさせている要因であることを十分に理解していた。それが彼の優しさだということも分かっていたのだが、香奈子はそれを認めたくはなかった。

香奈子の知る限り、恒樹は誰に対してもこうであった。不器用に思えるほど、彼は誠実であることに拘り続けていた。確かに彼はよく嘘を吐いたが、それは他者を傷つけないために用いられることばかりで、自分の体裁のためにそれを行使することはなかったはずだ。そんな彼の存在は香奈子にとって必要でありながら、煙たくもなかった。そうやって彼が誠実であろうとすればするほど、香奈子は苛立った。何故もつと上手く立ち回ろうとしないのか、といつも思ったものだ。香奈子からすれば彼は損ばかりしているように見えたのだ。本心とはすなわち自分の望みだ。恒樹はそれが分からないという。彼は自分の望みに素直ではない。恒樹は自己犠牲的で克己的だ。手を伸ばせば届くはずのもので手をごまねいて見ているだけだ。欲

望を抑圧しすぎた結果、彼はそれをどこかに見失う。欲望を見失ったことで彼は一見無欲になる。

けれど抑圧されたものは彼の中に確かに存在しており、いかに形を変えようとも微かにうごめき続けている。彼は自分の中にある正体の分からないものに悩まされる。無欲であるうとする自分と、それを消すことのできない自分。いつも彼は自己矛盾の中にいた。彼は自分自身のその嘘に苦しめられていた。

「……恒は、何を考えてるの？」

香奈子は恒樹の分からないなりの本心を聞き出そうとした。

恒樹はその問いかけへの返答に思いあぐねていた。今の気分は透き通るように落ち着いているようでいて、胸の奥底では暗い渦が巻いている。視界が濁っていてその正体をはっきりと捉えることができない。

恒樹は事前に用意していた結論を本心として述べることに決めた。「香奈子の言うような関係にはもう戻れないかもしれない。でも、もう、こんな陰険なやり取りはしたくないんだ。君は都合が良すぎると思うだろうけど、俺たちはもっと普通にやっていけないのか？」

恒樹は香奈子をまじろぎもせずに見る。

香奈子は恒樹を睨むような目つきで見た。

「今までのことは水に流して仲良くやっていきましょう、とでも言うの？随分と都合のいい話ね」

「俺もそう思うよ」

「……でも、そんな都合の良い関係になれるものなら、なってみたいものね」

恒樹は香奈子を見る。

その香奈子の顔は恒樹が久しく目にするもののないものであった。恒樹は香奈子につられたように穏やかな顔つきになった。

「恒に嫌われてたんじゃなくて少し安心したわ」

「……嫌ってなんていないよ。愛だ恋だは抜きにして、俺は君という人間は好きなんだ、元々ね」

駅を出て、大通りの脇にある細い路地に入る。そこを真っ直ぐに進むと二つの建物の間に地下へと降りる階段がある。レンガ造りの側壁を通り抜け、Müllerというプレートのかかった扉を開けた。

ここは彩子の友人の父親が経営しているドイツ料理店である。

恒樹とは以前ここでよく会っていた。どこかで待ち合わせようと言われた時、彩子にはこじか思いつかなかった。

二人が初めてここに来たのはあの劇場からの帰りだった。ここに来るに至ったのは彩子が誘ったことであるが、その後は特に約束をせずともここで会うことがよくあった。あるとき恒樹と話した内容を彩子はもうほとんど思い出すことができない。あれから約四年が経つが、あの時と今で二人の関係は何もかもが変わってしまったということ、ここに来ることで改めて感じていた。

二年半ぶりに来たこの店も少し変わっていた。定位置となっていた席を選ぼうとしたが、テーブルの配置が少し異なっていた。当時ここで働いていた者も入れ替わり、今では自分を覚えているのは厨房の者ぐらいだろう。あの頃は従業員の数人と言葉を交わすこともあった。

変わらないものは人に安心を与える。例えば自分が変わってしまったとしても、変わらないものに触れると自分自身が元に戻るような気がするからだ。

逆に自らに何の変化も起こっていない場合に、変わってしまったものに触れると自分が置いていかれたような気を起こす。

自分も含めその両方が変わってしまったえば、一方への興味をなくしてしまふこともある。

変化を嫌う気持ちは決して理解できないわけではない。

彩子は何度も時計に目をやった。彩子は恒樹の到着を待ちながら

も、その時間が迫ってくることに恐れを抱いていた。恒樹が持つてくるであろう結論を恐れているのだ。

先日、恒樹は香奈子と会ったそうだった。恒樹がそのような話を彩子にすることは今までになかった。恒樹は何も言わなかったが、彩子が香奈子と会ったことに気づいているのだと思っただ。彼らがそこで交わした会話の内容について、彩子は想像することしかできない。

こういった状況での想像というものは、悪い方向にしか向かわないものだ。いくつもの場合を想定して彩子は今この場にいる。

彩子は恒樹の手を離そうと思っていた。二人の手はすり抜けるようにしか握られてこなかった。離すといっても初めから握られていないものをどう離すというのか、とも思う。彩子はそのようなことに悩まされているにもかかわらず、本来であれば好都合とも思える恒樹の結論を恐れているのだ。

彩子は不安定な立場にいる。これは今までもそうであつたし、この関係が続く限り、これから先もずっとそれが変わることはない。だからどうすれば安定した立場になれるのか、その答えを探し出そうとしていた。けれどその答えが出ることはなかった。

彩子は香奈子のような立ち位置にいたかった。恒樹と香奈子は今でこそ仲が拗れてしまったとはいえ、元は違う形が存在していた。だからこそ、今あのようになってしまった。存在していたからこそ壊れることができたのだ。

自分たちにはその前提の形が存在していない。ないものが壊れるはずがない。そして壊れた破片すら残らないのだ。

「待たせてごめん」
「ううん」

恒樹は席に着く。彩子は恒樹を正面から見ることに抵抗を覚え、彼の肩の辺りに視線を泳がせていた。今は何かを口にする気分ではなかった。ので飲み物だけをオーダーした。

次第に恒樹の顔が曇りがちになり、緊張が彩子を取り巻く。恒樹は重い口を開いた。

「この間、香奈子と話をしたよ。今までに比べたらちゃんとうき合えていたと思う。まともに話ができたのは本当に久しぶりだったんだ。それで、いつまでもこんな状態でいられないから、どうにかしないといけないと思った」

恒樹のその言葉に、彩子は口を開いた。

「どうにかつてどうする気なの？完全に戻るか、戻らないかってこと？」

「それはまだ分からない」

「だったら、どうしてこんな話を私にするの？」

恒樹は小さく息を吐く。

「……彩子はどうしたい？」

「答えになってない。私が聞いているのよ？恒樹こそどうしたいの？」
間を置かずに彩子は言った。

恒樹は彩子を見る。そして彩子を見つめたまま黙った。

彩子はずっと恒樹を卑怯だと思っていた。

恒樹は全ての選択肢を彩子に与えてきた。彩子を選ぶ結論は、自分が出す結論と相違ないことを確信している。だから恒樹は答えを彩子に委ねる。彩子はそれを自分で選んだものとしてやっていくしかない。全てが彩子の手にある。それは全て仕組まれていることだ。彩子は恒樹にそれと同じことをさせることができる。きっと恒樹が選ぶ結論は、彩子が出す結論と相違ないからだ。

しかし、それを彼にさせようとする自分を卑怯だと思った。

「恒樹は贅沢よ。どんなに愛していてもそれが報われないことだつてあるのに、どうして手に入るはずのものをわざわざ遠ざけようとするの？」

恒樹に対する問いかけでありながら、その返答を待たずに彩子は続ける。

「恒樹は何に拘ってるの？私に遠慮してるの？」

「……別に遠慮をしているわけじゃないよ」

「恒樹は私にとって大切な人だから、幸せを願わないことはないの。」

私といても一時的な慰めにしかならないわ」

満たされない想いを抱えていた二人は、次第に互いの中に存在する重なり合った影を見出すようになった。その影を眺めるうちに、憐みを向け合うようになった。

互いを慈しみ、慰め合う。その行為に愛はあつただろう。

けれど、どんなに慰め合ってみても傷が癒えるわけではない。愛が錯綜する。依存が形成され、どんどん落ちていくだけだった。

恒樹も彩子も傷つくことを恐れるあまり、虚像と向き合うことができなかつた。このことは多くの嘘を塗り重ねても消えることなく、常に根底にあり続けていた。これは何よりも重く、そして痛いものだった。

「それでも俺は、彩子と一緒にいたいと思うよ」

恒樹の目はいつもものようには微笑んではいなかった。そのことは彼の言葉が本心である証明に繋がるわけではない。けれど彩子は彼の言葉に嘘はないものと分かつていた。

そして、彼の言葉はまさに彩子の望んでいるものだった。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

十

「戻ってきたならよかったじゃないか、とは言えないみたいだな」
「……何を嬉しそうにしてるんだよ？」

休日、恭介は百瀬慎也と自宅にいる。彩子は昼過ぎにどこかに出かけて行った。

百瀬は事情を知っている。恭介はとりあえず百瀬に話せるところは全て話しているのだ。恭介は一連の事態がそもそも百瀬によりもたらされたようなものだと思っていた。これは八つ当たり以外の何物でもないのだが、恭介はこの件に百瀬を巻き込むことに何ら負い目を感じていなかった。

百瀬は恭介の反応を楽しむつもりではなく、純粹に心配をしているのだ。恭介だけでなく、彩子や恒樹に対しても同じだった。百瀬は彼らと複数で会うことはないが、一人一人と話をする機会が何度となくあった。だから全体の事情を把握しているのは百瀬であると言える。

彼の態度が面白がっているようにも見えるのは、思考が重く深刻な方向へ向かわないようという気遣いからだ。恭介にすればそれは余計な気遣いであり、そしてそれを嬉しくも感じている面も多少あった。

恭介は彩子がいつから自分に想いを寄せていたのかを知らない。確信を得るに至ったのはそれほど前のことではない。気づかなかつたのは恭介が彩子に対して無関心であったからではなく、むしろその逆で、彼はずっと彩子に対し心を砕いていた。

兄夫婦の死後、恭介と彩子は一緒に暮らすようになった。恭介は彩子を放っておくことはできなかつたため、これは自然な流れであった。

彩子の父親と恭介は母親が違い、年も一回り離れていた。だから兄弟というよりも親子のような接し方をしていた。昔の恭介と彩子

の関係がそれに近いものであった。四年ほど前からそれまでの関係が徐々に変わっていったように思う。

恭介は爪をカチカチと鳴らした。百瀬は苛立っている恭介を静観していた。

百瀬と恭介は二十年來の友人だが、百瀬は恭介が感情的になるところを見ることはほとんどなかった。彼はいつも冷静で、取り乱すようなことがない。例えば今のように苛立っていてもそれを表情に出すことはしない。

もつとも彼は感情を表に出さないとこころはあるが、何を考えているのか分からない人物ではない。それは付き合いの長い者でなければ分からないものではなく、適切な言動によりそれがフォローされていたからである。

対照的に百瀬は表情が豊かであった。といつても彼は人前で苛立ちを見せたり、悲哀を漂わせたりするわけではない。負の感情だけを隠すのだ。

本人はそれを生來のものだと思っていたが、恭介はそれを長年の努力に因るものであると思っていた。

だから恭介は百瀬のその表情と内面が一致しているとは思っていなかった。

「いっそのこと、あいつらがうまくいってくれればいいのに」

「いや、それはあまりにも厄介払いしすぎだろう……」

恭介は厄介払い、という百瀬の言葉に苦笑した。恭介はある一点を除いては彩子のことを厄介だと思ったことはなかったのだ。

彩子が自分に非常に気を遣っているのを分かっている。できうる限り自分の負担にならないようにしているのだ。それが分かっているからこそ、突き放すことができないでいた。

彩子は他者に寛容であるように見えて、その実、非常に排他的なところがあった。確固たる自分の世界があり、その世界を共有している者だけ触れ合っている。他者に心を開くのはその世界を開く

ことであり、その世界を閉ざすのは他者を拒絶するときである。

かつて彩子の世界が自分に開かれていたことを恭介は知っていた。けれど恭介はそれを見ない振りをしてきた。自分がそこへ入り込むことが果たして彼女のためになるのかどうかという強い迷いを感じていた。いくら自分たちは内面も似通ったところがあるとはいえ、その全てを共有しているわけではない。

正直なところ、恭介は彩子との多くの類似点を認識しつつも、それらをあえて受け入れないようにしている節があった。それ故、その迷いに決着がつくことはなかった。

扉が閉ざされていく過程は開かれていく過程よりもはるかに見えづらいものだった。恭介がその過程を見ることは叶わず、気がついた頃には完全にその扉は閉ざされていた。

「正直、もうお手上げ。意固地になって自制心が変な方向に働いてるから手に負えない。気を回すべきことはそっちじゃないだろうに。そういうところが」

百瀬は思わず笑ってしまった。

恭介は百瀬を少し睨んだが、その理由を彼が知ることはなかった。恭介の声に苛立ちが表れ始めていることに百瀬は気づいた。百瀬は滅多に見られないこの光景が意外であり、可笑しくもあったのだ。

百瀬はその先を促す。

「そういうところが？」

恭介は大きく息を吐き、間を置いた。

「……苛付く」

「で、それを本人に言えないってことか」

「……言えるわけないだろ」

「本人の気持ちとしては、迷惑をかけたくない、嫌われたくない、つてとこだと思うよ」

恭介は百瀬の分析にうんざりしながらも感心した。

「……お前、他にあいつと似たようなやつ知ってんの？」

「さあ、どうだろうね」

その含んだような物言いに、恭介は自嘲めいた微笑を浮かべた。恭介は彩子が自分を拒絶していることを分かっていた。本人は気づいていないのだろうが、彩子は自分を一度拒絶した人間を受け入れなどしない。だから彩子は今の状態にしがみ付くことになったのだ。

この状態を維持することに恭介は不満があるわけではない。徐々に彼女との距離を埋めていこうとした。

もっとも、恭介は距離を縮める振りをしていただけで、彩子と同じ世界に住み、対等な立場で向き合おうとしていたわけではなかった。

そうしてしまえば余計に傷つけるだけだと思っていた。けれどそれは逆であったのだと気づいた。

今となつてはそれをどうすることもできないと感じていた。

*

年が明けて数日が過ぎた。この時期、夜に出歩けば誰もが浮かれているように映る。きつと他の人の目からすれば自分もそう映っているのだろう彩子は思った。

先ほどまで透も一緒にいたのだが、彼女は先に帰った。彩子は透を見送りに外に出たところだ。

今日、ここに透が来たことは意外だった。相変わらず飲み物ばかりを口にしていたが、こういった場に顔を出すだけでも大きな変化のように思えた。

今、透には恋人がいる。相変わらず互いにこういったことを話すことはないが、以前と同じく話さなくとも何となく分かるのである。ただ今回に限っては、透は自分に気を遣っているのではないかとも思った。こういった気遣いは今までになかったことだと思いつつも、今の彩子にはそれを好意的に受け取ることはできなかった。

「彩ちゃん？」

後ろからの声に彩子が振り返ると、そこには百瀬の姿があった。

「あ……お久しぶりです」

百瀬は気の良い笑みを浮かべていた。この人を前にすれば大抵の人は警戒心を解くだろう。けれど彩子はこれまでの経緯を知っている彼には壁を作ってしまったがちだった。

「こんなところで会うなんて思わなかったよ。もしかして矢島と一緒に？」

「いえ、友達と一緒になんです。百瀬さんはこれからどこかへ？」

「俺は二件目だけだね。恭介も誘ったんだけど論文の仕上げが大変みたいでさ。最近付き合い悪いんだよね」

「そうですか」

彩子はそのまま口ごもった。

恭介は歩み寄る姿勢を見せていた。それを拒絶したのは彩子だった。それ以来、互いに避けている。謝れば済む話とも思えない。今さら彩子に彼の機嫌を取るようなことなどできるはずもない。

口ごもった彩子に、百瀬が問いかける。

「……もしかして最近、あまり会ってないの？」

彩子は頷く。

「恭介は私に優しいけど、そのくせ時々冷たいから、どうすればいいのか分からなくなるの。迷惑なら迷惑だって、はっきり言ってくればいいのに」

「……それを恭介ができないと分かかって言ってるの？」

「そうよ」

彩子は強い視線は保ったまま、しかし声の調子は落とした。

「……あの人は、いつも大事なことは言わないわ」

それを聞いて、百瀬は小さく笑った。

「まあ、確かにね」

「でも、百瀬さんにはいろいろ話すんでしょう？」

彩子は間髪を入れずに百瀬にそう返した。百瀬は一瞬驚いた顔をしたが、すぐにまた彼がよくする笑みを見せた。彼もまた、笑顔で

本心を隠す性質であった。

「君はさ、矢島のことが好きなんじゃないの？」

「……百瀬さんはどうしていつも私にそういうことを聞くんですか？」

「君があまりに痛々しく見えるから。俺に何かできることはないの？」

「確かに、誰かに何かを聞いてほしい時はあるわ。別に解決策なんて求めてなくて、ただ聞いてほしい時が。だけど不必要な時にカウンセラー気取りで詮索されるのは不愉快なだけよ」

彩子は自分の口から出た言葉に驚いていた。余裕がないということとはここまで他者に攻撃的になってしまうものなのだろうか。

彩子は百瀬に他意はなく、ただ純粹に心配してくれているということを知っている。にもかかわらず、吐き出した言葉の無神経さに苛立ちと悔しさを感じた。同時に、酷く悲しくなった。

彩子はふいに零れそうになった涙を指で押さえた。

「ある一定の枠の中で誰かを愛するとき、それを恋と呼ぶ以外に適当な言葉はあるかしら？恒樹のことは好きよ。けれど恭介に対するのとは違うと思うの」

彩子は、何故こんなことを百瀬に話しているのだろうかと考えながら言葉を選んでいった。胸の内を誰かに聞いてもらいたかったわけではない。話したところで彼が答えをくれるわけでもないのだ。誰にも話したくなかったことを、今こうして話している自分が不思議だった。

百瀬が躊躇いがちに彩子に問う。

「どうしてそんなに恭介を？ずっと疑問だった。君ならもっと他に……」

百瀬の疑問は彩子にとっての疑問でもあった。その答えをずっと彩子は探していた。それが一時の気の迷いなのではないかと思うこともあった。そうであってくれればいいと思っていた時期があつたのも事実だ。

「恭介は私にとっての憧れで理想だったから。あんな風になれば
つてずっと思つてた人なの。……そうとしか言いようがないわ」
彼が彼であること以外の理由はなかった。

「私は、私と一緒にいるときの恭介しか知らないわ。だからそれ以
外での彼のことは分からない。それが当然なんだけど、それが嫌だ
った」

百瀬はそれ以上何も言わなかった。

彩子も何も話せることはなかった。

百瀬と別れ、彩子は中へ戻った。

自分に向けて振られる手に、急ぐこともなく向かっていく。戻る
のが遅いと言う友人の声を受けながら席についた。

ここ数カ月、出歩くことが増えた。こういった場に顔を出すと新
しい友人も増えていく。彼らとは浅い関係に留まることがほとんど
であるが、ほとんど自分はこういった関係を築くのが得手である
と思つた。

もともと自分はこういう人間だ。だから密接な関係を築こうとす
ると失敗に陥る。上手くいつているのは透ぐらいのものだろう。

距離の取り方を誤ると、相手に自分の理想を押し付けるようにな
る。それが相手への失望に繋がる。相手に期待をせずに深い関係を
築くことほど困難なことはない。

恒樹に関して、彩子はもう自分から何らかの手立てを施そうとは思
つていなかった。その気があるうとなかろうと、自分にできるこ
となど何もないうちに思えたからだ。

恭介に関してはどうかにかしたいと思つていたのだが、気持ちだけ
が空回りし、結局何の行動も起こせなかった。何かを起こせば何
もかもがその時点で終わってしまうような不安を感じていた。

収束に向かうかに思えたあの一連の騒動は、寒々しい空間を彩子
に与えるだけの状態で留まったままだ。それはまるで足元からどん
どん水に浸っていくような感覚だ。そして次第に沈んでいく。身動

きがとれず、逃れることはできない。窒息しそうなほどに苦しくとも、ただこの状況を味わうことしかできないのだ。

深夜、帰宅した彩子は誰もいない部屋に明かりをつけた。冷蔵庫の中から水を取り出し、グラスに注ぐ。そして解熱剤を流し込む。

水を飲み込む際に少し咳き込んだ。

一週間ほど前に引いた風邪は悪化しているようだった。悪化させるようなことしかしていないのだから当然なのかもしれない。

家に帰りたくないという理由で夜を出歩いている。独りになりたくないという理由で不特定多数の人間と付き合っている。

どんなに外で騒いでも、交友関係が広がるうとも、こうして家に独りでいれば虚しさしか残らない。そんなことは分かり切っていたはずだ。愚かな自分には失望するばかりであった。

玄関の扉の開く音がする。

そして扉が閉まる音が静かな部屋に響いた。音の震動とともに胸が震えた。

開け放たれたドアの隙間から、廊下をすり抜けていく恭介の姿が見えた。彩子はそれを怖いと感じる。

彼が怖いわけではない。彼に突き放されることが怖かったのだ。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

彩子は今、恒樹の家のリビングにいる。白い革張りのソファに腰を下ろす。

昨夜、彩子は恒樹からの電話を受けた。恒樹の声は決して明るいものとは言えなかった。むしろ少し強張っており、彼の要件は彩子にとって期待すべきことではなく、明らかに望まぬ事項であることを語っていた。

恒樹は彩子に話したいことがあるので近いうちに会いたいと言った。それに対し彩子が、それは今ここで言えないことなのかと問うと、恒樹はそうだと答えた。その時の恒樹の声の調子はそれまでよりも低く張り詰めたもので、彩子の不安は更に掻き立てられた。

その場では明日の夜、恒樹の自宅で会うという約束だけをして電話を切った。明日と指定したのは彩子からだった。結論を先延ばしにしても仕方がないと思ったからだ。

恒樹は彩子の隣に座った。

手を伸ばせばすぐに触れ合える距離は、彩子に安心ではなく緊張を与えた。こうして隣り合わせに座ることは普通のことである。それでもこれから彼が話す内容を予測できている彩子にとっては、少し遠く感じるぐらいの距離を取ってくれた方がよかったのだ。

恒樹は緊張しているようだった。彩子を出迎えたときの彼はさすがと言っべきか、平静を保っていた。それが徐々に失われ始めているのを感じた。

彩子はなかなか口を開こうとしない恒樹に何の話かと問うた。恒樹は意を決したように語り始める。その瞬間、彩子に戦慄が走った。

「実は春からまた海外勤務になることが決まったんだ」
「……そう」

恒樹の言葉に、彩子は気の抜けたような返事をした。

彩子は恒樹の話が悪い知らせであるといことは予想していたものの、これは予想していなかったことであつた。

もともと恒樹はしばらく日本に戻ってきているだけであつて、いずれは戻らなければならなかつたという事を思い出した。

「また長い間、向こうにいることになるの？」

「……いや、それはまだはつきり分からない。今日、彩子に話しかつたのはこのことじゃないんだ」

恒樹は言葉に詰まつた。彩子は更に悪い知らせというものに全く予想がつかなかつた。

敢えてその方向へは思考が進もうとしないようだつた。

「やり直すことに決めた。香奈子と」

先ほどまで言い出しにくそうにしていた人から出た言葉とは思えないほど、それはきっぱりと言ひ放たれた。

彩子がじつと恒樹を見ると彼は伏目がちになつた。

彩子はそんな恒樹に対し何かを発しようとして口を動かそうとするのだが、肝心の言葉が出てこなかつた。

この数ヶ月の間に、恒樹と香奈子との間に一体何があつたのか彩子には知る由もない。数年前からほとんど会うことさえなかつた彼らが何故、今頃こんなことになつているのか分からない。恒樹は香奈子からかかつてきた電話に出る時、明らかに不快そうしていたことを思い出す。けれど、彼が不快そうに見えたのは彩子を氣遣つた結果のもので、本当はそうではなかつたのかもしれない。やはり、恒樹の真意を探ることは難しい。

いつか彩子が香奈子に語つたように、恒樹は香奈子を選んだ。もうかなり前から彩子には恒樹が出す結論が分かつていた。分かつていたからこそ、それを回避させる手立てを講じていた。例えば、彩子は恒樹に香奈子と縊りを戻すよう促すことがあつた。そう言えば恒樹がそれを否定するのを知つていたからだ。

望みを手にするためなら、いくらでも自分を純粹に装ふことができた。

正直なところ、彩子は恒樹が本気で香奈子と縊りを戻そうとするとは思っていなかったのだ。彩子は恒樹の優柔不断さを齒痒く思いつつも、それを肯定していた。自分たちの関係がどれほど揺らぐとも、完全な終末を迎えることはないと信じていられるからだ。

けれど恒樹は香奈子を選んだ。彩子の頭の中で何度も想定された結末が現実になった。覚悟はしていたが、現実ともなれば予想していた以上の衝撃が襲う。

何より彩子は、恒樹と香奈子との仲が修復されたとしても、自分と恒樹の関係は今までと同じ状態に留まるものだと思っていただけだ。しかし恒樹の話から察するに、もう二人で会うことはできないという意味が含まれているようだった。

彩子はやっと一言だけ口にすることができた。

「……そうするのが一番いいと思うわ」

震えすら感じ取られてしまいそうな距離にすることが却って、彩子に冷静さを与えた。

そして、こうして物分りの良い振りをしてしまうのは恒樹のためではなく、自分のためであるように感じていた。

「ただ、恒樹が私にそのことを話すとは思わなかった。だって恒樹は優しいから、こういうの言い出しにくかったでしょう?」

「……それは優しさじゃない。ずるいだけだよ」

「それでも私は、ずるい恒樹が好きだったわ」

物分りの良い振りは長く続かず、彩子は静かに恒樹を責めていた。「どうせならずるいままでいてくれた方が良かった。どうして私に話したりするの?知らないままでいられるのなら、これからずっと会えなくても、その方がまだ良かったのに」

何を言っても何も変わることはないと分かっている。これは自身に対するただの気休めでしかなかった。

けれど気分が落ちつくことはなく、それどころかますます恒樹に対する後ろめたさが強くなり、彩子はそれ以上の言葉を飲み込んだ。彩子の言葉を最後に二人は沈黙に包まれた。互いにそれ以上話せ

ることが見つからなかった。

動くことも、呼吸をすることも躊躇われるほどの静寂の中、突如、恒樹の携帯が鳴り響いた。

電話を取ろうとしない恒樹に対し、彩子は出るよう彼に促した。

恒樹は画面を眺めたまま出ることを躊躇っていたが、数秒後、目を伏せて電話に出た。

彩子の予想に反して恒樹は席を立たなかった。故に、全く物音のしないこの部屋において、会話の内容など彩子にほとんど筒抜け状態であった。

電話の主は今からここへ行くことへの諾否を恒樹に求めている。

恒樹はそれを断ろうとしていたのだが、それに対して彩子が横から口を挟んだ。

恒樹はかけ直すと言い、すぐに電話を切った。

「……何も切ることないじゃない」

そう言って彩子は立ち上がる。恒樹は彩子の腕を掴み、それを制止しようとした。

「話はもう終わったんだから帰るわ。だから断る必要なんてないでしょう?」

「……まだ、終わってはいないよ」

「これ以上、あの人と揉める余計な理由を作らないほうがいいわ」

彩子は微笑んで、自分の腕を掴んでいる恒樹の手を軽く押した。

そのまますり抜けていく彩子の手を、恒樹はもう一度掴んだ。

「俺はずっと彩子のこと、好きだったから」

彩子は自分を覗き込む恒樹の目をじっと見つめていた。次第にその視界が霞んでゆくのを彩子は止めることができなかった。

優しさに包まれた残酷な言葉を受け入れることは容易いことではない。それにもかかわらず恒樹はこんな時にまで優しい目を彩子に向ける。その目の奥は悲哀で満ちていると分かる。彼のこの目が容易でないことを無理矢理にでも受け入れさせようとさせる。恒樹は最後までずるい。だから彩子もそうならざるを得なくなるのだ。

「だったら……」

彩子の声に恒樹の瞳が揺れた。それに構うことなく彩子は続ける。「……だったら、どうして私を選んでくれなかったの？」

彩子は今までに何度も打ち消してきた言葉を搾り出すように告げた。

*

翌朝七時、彩子はリビングのソファの上にいる。帰宅後、水を飲むとキッチンまで行ったはいいが、急に気分が悪くなったためソファに横になっていた。結局朝までここにいた。

数週間前に引いた風邪は治る気配がなく、ますます悪化しているように見える。酷く咳き込むことが多い。その度に熱が上がっているが、それについて深く考えようという気にならない。頭が強く疼く。そして昨日のことを思い起こすと胸が締めつけられるのだ。

携帯が鳴った。

すぐに手の届く位置に携帯があるにもかかわらず、コール音を数回確認した後に彩子は電話に出た。画面を見て確認しなくとも相手は分かっている。

「……恒樹」

無意識なのか、それとも意識的にであったのか彩子本人にも分かんなかったが、低く、力のない声で応えた。

「彩子、すまない」

恒樹の第一声は何かに対する謝罪であった。彩子はソファに深くもたれながら、恒樹に問う。

「……何が？」

「……本当にこんなことになってしまつて悪かつたと思つてる」

「どうして、謝るの？」

「許して欲しいわけじゃないんだ。そんなことは言えない。それで

も
」

「謝って楽になりたいとでも言うの？」

謝罪の言葉しか口にしない恒樹に彩子は思わず責めるような言い方をしてしまった。

恒樹はしばし黙ったが、

「彩子のことは本当に大切に思ってたよ。これは本当だから」

「……分かってるわ。私、今までそれを疑ったことはないの。でも恒樹は私を選ばないってことも分かってたわ」

「もう一度、会えないだろうか？ちゃんと話をしたい」

「会って何を話すの？私はまた同じことを聞かされなきゃいけないの？」

「それでも、昨日みたいな別れ方じゃ嫌なんだ」

彩子は今、電話を取ったことを後悔していた。無視することもできたはずの電話を取ることに決めたのは、彩子の心の隅に小さな期待が残っていたからだ。

けれど今、その小さな期待でさえ粉々に打ち砕かれてしまった。

その代わりに得た確信は、恒樹は後処理を施そうとしているだけだということだった。彼は誠実にそれを行おうとしていたが、彩子が今求めていたのはある意味での不誠実さであった。彼の誠実さは却って彩子を追い詰める。

もはや彩子とはかくこの状態から抜け出したいという思いだけが頭の中を巡った。

「もう、会うことはないわ」

彩子は独り言のようにぼそりと呟いた。

少しの沈黙の後、恒樹が何かを言いかけた。それと同時に彩子は、

「さよなら」
そう一言だけを発し、そのまま電話を切った。恒樹が何か言葉を発しようとしたのが分かったからこそそうしたのだ。

部屋には何の音もしなくなった。彩子は画面を見つめたまま静止

していた。

「そんなこと言っていないのか？」

ドアが開く音とともに声が聞こえた。

彩子はさして驚く素振りも見せず、声の主を見やった。

「……聞いてたの？」

「聞こえたんだよ。聞かれたくない話ならこんなところですよ」
恭介の腕が彩子の前を伸び、テーブルの上に置かれた腕時計を手にした。無表情のまま何も発しない恭介に彩子は静かな怒りを覚えた。

「今日はやけに早いね。いつも遅いのに」

「今日は早く行く用があるから」

恭介は袖の釦を留めながらそう言った。その光景をじっと眺めていた彩子に恭介が視線を向けた。彩子は動じることなく、さっきの電話の内容について話し始めた。

「あの二人がどういう選択をしようと私にどうこう言えることはないわ。それで誰が傷ついたとかなんてあの二人には関係のないことだもの」

「今日はやけに物分りがいいね」

恭介はそう言いながらも手を休めず、出かける支度をしている。

「恭介も好きにしたら？私に気を遣う必要なんてない」

「言われなくてもそのつもりだよ」

即答されたことに、そしてその内容に、彩子は唇を噛み締め黙り込んだ。そして恭介に背を向ける形で向き直り、肘掛にもたれかかった。

「何で苛ついてんだよ？朝っぱらからそんな風にされちゃ目障り。だからあんなこと言わなきゃいいのに。馬鹿だな」

恭介からは彩子の顔は見えない。同時に彩子も恭介の顔は見えない。けれど互いに相手が今どんな顔をしているのか容易に想像がついた。

「俺はお前らが上手くいってくれた方が都合が良かったから残念だ

よ

彩子はまた熱が上がってきたように感じた。何か反論しようと思
うのだが、熱に浮かされた頭では言葉が上手く出てこない。ろくに
思考が働かないほど頭痛を感じているにもかかわらず、恭介の言葉
ははつきりとした輪郭をもって彩子に届いている。そしてそれは打
ち込まれた鉛玉のようにその場所に留まり続け、更に不快さを増長
させていく。体の奥から湧き上がってくる熱いものを押さえること
だけで必死だった。

彩子がもう遠慮は必要ないと言ったものの、今の恭介の言動は彩
子を怒らせるために放たれているようであった。もつとも恭介
は気を遣わなければ今までにこれだけのことを言っていたというこ
となのだろう。そして言わなかっただけですとそう思っていたと
いうことなのだ。

思えば、これはいきなりではない。ここ最近はずっと彼の態度は
このような類のものであった。そしてそれに伴い、彩子の態度もそ
れに近いものとなっていた。

家で顔を合わせても言葉を交わすということはほとんどなく、逆
に今のように言葉を交わしても互いの顔を見ることすらしない。
同じ家で暮らしていながら互いに無視し合うのは、別々に暮らして
いて顔を合わすたびに無視し合うよりも辛いものだ。

「急いでるならそんなことばかり言っていないで、さっさと行ったら
？」

彩子は勢いよく立ちあがりリビングから出た。その瞬間、強い眩
暈に襲われたが、そのまま自室へと入る。

ベッドに向かおうとしたが、途中ふらつき、チェストの端に勢い
よくぶつかってしまった。

それとほぼ同時に大きな音と衝撃が彩子に響いた。彩子はそれに
驚きつつも、ゆっくりと床へ視線を落とした。

彩子はこれをずっと大切にしていた。ガラス製なのでいつか壊れ
るようなこともあるだろうとは思っていた。けれどこんな形で壊し

てしまうことをどうして考えられただろう。

悲しみが彩子を怒りの迷路から抜け出させた。けれどその抜け出した先にあったものは空白でしかなかった。何も残らなかったのだ。彩子はその場に座り込んだ。そのまましばらく呆然としていた。

部屋は静まり返っている。破片を見れば見るほどに修復などできようもない状態であることが分かる。ガラスケースの中にいるんなものを入れていたこともあり、その重さが負荷になったようだ。

それをじっと眺めていた彩子は破片に埋もれたネックレスやブレスレットを選び分けようと手を伸ばした。薄く割れた小さな破片が指先に傷を作る。

彩子は大きく三角に割れた破片を摘み上げた。摘んだときにもそれについていた小さな破片が刺さった気がしたが、気にならなかった。

それを軽く握り締める。頭が上手く働かず、行動の後に思考が伴っていた。流れる血を見て痛みを感じる。普段であれば紙で切った浅い傷であっても痛みを厭い、それを避けようとする。けれど今はその何倍も深く痛みの伴うものであるのに躊躇うということをしな
い。

未知の領域へ足を踏み込むような高揚感が沸き起こり、夢と現実の狭間を漂うような行為へと誘っていく。それは悲しみを打ち消していくようであった。さらに奥へと足を進めるように、手に力を込めた。けれど鋭い痛みにより手の力は弛緩してしまった。

ふと、それを手首に当ててみた。それは先ほどの行為と同じ目的の基にあり、さらにそれが推し進められたものであった。まだわずかに機能している現実的な彩子の思考は、馬鹿なことをしていると思うものでほとんどを占めていた。けれど夢心地でありながらも確実に機能している他の部分が実行を促していた。

欠片を持つ手の方に力がこもる。自らに痛みを伝えるのはその先へ進むことを止めさせるためであろう。けれどそれを認識させまいとするのはその先への期待感であり、その期待感こそが、自らを甘

い畏に嵌めていく。彩子は未だこの行為の全てが非現実であった。勢いよくドアが開いた。

「何やってんだよ？」

入り口からの声に彩子は顔を上げた。そこには恭介が立っていた。彼が目の前にいることもまた彩子にとっては非現実であるように映った。

彼の視線は彩子の手に向けられている。彩子もゆっくりと自分の手に目を落とした。血だらけの指にはガラス片が握り締められていた。そしてそれがもう片方の手首に当てられている。

「当てつけのつもり？」

恭介が何に対してそう言ったのかを彩子が理解するには少しの間を要した。恭介の言葉の意味を彩子が理解でき、それに反論しようと口を開きかけたその刹那、

「面倒ばかり起こすな」

そう言い残すと恭介はドアを閉めた。

ドアは軽く閉じられたただけだというのに、彩子にはその音がやけに大きく聞こえた。彩子は閉じられたドアを虚ろな目で眺めていた。不思議と涙は流れなかった。

彩子はもう恭介のこういった言葉に慣れてしまっている、それも理由の一つだろう。けれど今、彩子が認識できるのは手の傷の痛みだけで、それ以外のものは何も感じる事ができなかった。

視線を壁の方に向けたとき、鏡の中の自分と目が合った。

彩子はすぐさま鏡から目をそらし、ふらりと立ち上がり、ベッドに腰を下ろした。

深めの傷からの血は、まだ止まっていない。それを目に映さないために目を閉じた。この傷がそれまでのことの全てを現実であると告げているように見え、直視することが憚られたのだ。

静かな室内に携帯の鳴る音が届いた。携帯はリビングのソファの上にもあるはずだが、壁を一枚隔ていても静まり返った部屋では十分に聞こえてくる。

相手が誰かなど考える気すら起こらなかった。それが誰であったとしても今の彩子にはどうでもよいことであった。

*

スピードを加速させていく。七時過ぎに出るつもりだったのだが、十五分ほど家を出るのが遅れた。予定の時刻に間に合わないかもしれないと思った矢先、赤信号に引っかかる。苛立ちが募った。

恭介の中に後悔はある。ここ数力月の自分の対応と、先ほどのまま家を出てしまったことに対してだ。彩子を心配に思う気持ちは当然ある。彩子が本気であったのかどうかは問題でなかった。一時的にそういった衝動に駆られることはそう珍しいことではないからだ。辛い現実直面した時にそれから目をそらすことを決して悪いこととは思わない。それで救われるというのなら、その方が望ましいくらいだ。

彩子はそういった場合において、一見、強い意志をもって臨んでいるように見える。けれど実際には、それはただの強がり過ぎず、自分で自分をますます追い詰めているだけだ。本人におそらく自覚がないのだろうが、それが事態を余計に拗れさせている。

さっきの電話を恭介は聞くつもりなどなかった。できることなら聞きたくもないものだった。彼にその内容の全てを把握できたわけではない。それでも大体の想像はつく。電話は彩子から一方的に切ってしまったようだったが、それは彼女の悪癖と言えるものを目の当たりにした瞬間だった。

彩子はいつの頃からか本音や感情を表に出すことをしなくなっていったように思う。最近はその顔が顕著だ。今の彩子からは苛立ちや完全な拒絶しか感じ取ることしかできない。ここ数年を知っている者なら誰でもそう感じるだろうと思う。恭介は幼い頃から見知っている分、余計にそう思うのだろう。もっとも、それは彼の認識が違

つてきただけで、彩子は元々そうだったのかもしれない。

変わらないことを求めても、人はどのようなきつかけでどれほどの影響を受けるか分からない。こうであってくれればいいと思うことは単なる押し付けでしかないのだろう。それでもその姿を見るに堪えないと彼は思っていた。気持ちを理解できないわけではないが、だからと言って許容できるものではなかった。

彩子が変わることと恭介に何か不都合があるのだとすれば、その変化の過程が自身と被っているように見えることだろう。恭介は彩子を介して自分自身の過去を垣間見ることになる。そんなとき、やるせない気分になる。そんなところまで似る必要はないのだと堪らなくなるのだ。

結局は自分のためなのだという考えに行き着いたとしても、恭介はそれを悪いと感じることはなかった。何故なら彼らは決して対等の立場に立ってはいけなからだ。距離を保ち、常に冷静さを保たなければならぬのは恭介だけだからだ。ずっとそれを正しいことと信じ、そうしてきただけのことだ。

昼に恭介は百瀬と会った。

恭介は百瀬の姿が視界に入ると、少し身構えつつも、それと同時に気分が萎えていくのを感じた。恭介の頭の中でこれから先に起こりうるものが次々と浮かんだ。まず百瀬は相変わらずの気の笑い笑みを浮かべて自分の正面の席に腰を下ろすだろう。そして彼は自分に軽口を叩くのだ。

「朝から苛ついてんのな」

「……気のせいだよ」

恭介はそう呟いた後、数時間前に擦れ違った百瀬を無視してしまつたことを思い出した。

百瀬は他人の痛いところを的確に突いてくる。それは自分以上であると恭介は思っていた。恭介のそれは半ば無意識にしてしまうのだが、百瀬のそれは意識的にやっている。しかも恭介は百瀬に対し

自分のカードを出し尽くしている分、分が悪いと思っていた。今は一人にして欲しいと思いつつも、気を紛らわすことのできる何かを探していた。

「そっぴゃ、前に彩ちゃんに会ったよ」

わざわざこの話題を選ぶ辺り、自分の苛立っている原因は百瀬の中で確定しているのだろうと恭介は思った。

苛立ちは増すかに思えたが、却って引いていくだけだった。

「……そう」

「本当、似てるよな。自分でも思うだろ？」

「何を今更……。昔から嫌になるほど言われてきたよ」

「見た目の話じゃないよ。性格というか話し方が同じで驚いた。ちよつと話したただけなのに圧倒されたよ」

「俺はそんなにお前を圧倒させるような話し方ばかりしてるのか？」
「そういうところだ、と百瀬は笑った。」

恭介は髪を& amp ;#25620;き上げる。

面倒に感じながらも惰性で尋ねた。

「で、何を話したわけ？」

「余計な詮索はするなつて。俺、相当口が軽いと思われてるみたいなんだよね。嫌われてるかも」

淡々とした百瀬の物言いに、恭介はテーブルに手を付けて立ち上がった。

「だったら最初からそんな話するなよ」

吐息まじりにそっぴゃい放ち、身を翻した。

百瀬は椅子に深くもたれかかりながら、恭介の背に声をかけた。

「『恭介は私にとっての憧れで理想だった。あんな風になりたかった』つて」

恭介はしばし足を止めたが、振り返ることなくその場を後にした。彼は顔色を変えることもなく平然と足を進める。その足取りとは裏腹に、心には暗雲が垂れ込めていた。

自分たちが似ていると言われる度に、恭介はそれを否定すること

が多かった。それはまさしく事実を認めたくないだけのことであつた。

彩子と向き合っていると不快な部分を暴き出されるかのような気分になることがある。似たような傷を持つが故、対峙することでそれが開かれる。それはまるで合わせ鏡のように奥へ奥へと深く突き進んでいく。それに耐え切れず、思わず壊してしまいそうになる。どちらか一方を取り払ってしまえば解決されるのではないか、そんな風に思うことがあつた。

自分たちの間に共有しているものは、そういった心のある部分だつた。この関係においては主観と客観の違いが認識できなくなる。相手を傷つけることは、すなわち自分を傷つけることと同義だつた。わざと傷を与え、相手が痛みから逃れようとする様を眺める。それでやっと自分たちは同一ではなく乖離した存在であると気づくことができた。

愛しい対象をあえて傷つけるような真似をすることが一体何になるのか。

きっとそれは自分自身にとっては苦い薬のようなものなのだ。そんなことで救いを見出すことしかできない。そんな下らないことに意味はない。だから、これ以上深入りするようなことはしない。これから先も、それを変えることは彼にはできないのだ。

恭介は玄関の扉を開けた。リビングの明かりがついているのが分かり、そのことに恭介は安堵した。

それは、また彩子が出まがいのことをするのではないかという気持ちがあつたからだ。恭介は彩子が数日間家を空けること自体には、それほど心配はしていない。恭介は彩子を危なっかしいと思いつつも、それなりに彼女のことを信用している。何をしようともそれについては自分で決着をつけるだろう。だからそれについては口出しをする気はない。

ただ、今朝のことに關しては自分に非があると思つている。謝罪

などする気はないが、それでも恭介の中には罪悪感があるのだ。

また数ヶ月前の一件が繰り返されるのではないかと、それを想像するだけで頭が痛くなる思いがした。

リビングまで足を進める。このところ帰宅後は玄関から自室へと真っ直ぐ向かっていた。この部屋を覗くことなどまづなかった。

彩子は朝と同じく、ソファの上にいた。顔を覗き込むと眠っているのが分かった。彼女の右手の指や手のひらには血が滲んでいる。少しは手当らしきものをしているようだが、おざなりなものであった。恭介は長いため息を吐きながら、彩子の手を取った。

恭介はその手に触れた瞬間、身体の熱さに驚いた。そして頬に触れるとかなり熱が高いことが分かった。呼びかけてみるものの、ぐったりとしていて何か反応を返すことも辛そうに見えた。心配から焦る気持ちとは裏腹に、何故こうなるまで放つて置くのかと腹立たしく思いもした。

けれどそれは彼自身にも言えることであつた。朝、彩子の様子がどうだったか思い起こそうとしても、恭介にはただ苛立っていたことしか分からない。その時点でもうその兆候はあつただろうに、他のことに気を取られて全く気づかなかつた。

あのととき交わした言葉は抑揚のない声で語られていた。もつともそれが装われたものであることを恭介は知っている。ほとんど見ようとしなかつたため、彩子がどんな顔をしていたかも分からない。思い出せるのは最後に見た呆然とした顔だけだ。

あのととき、彩子以上に苛立っていたのは恭介の方だった。その理由は他の誰でもなく自分自身に対してだった。

背中に手を回し、抱き上げた。その熱さが直に伝わった時、彼は思わず体が強張わせた。

彩子の目がうつすらと開く。

その力ない目線が自分を捉えているように思えたが、恭介はそれを見ない振りをした。

P r i v a t e R o o m

&
a
m
p
:

8
1
9
5
;

ここはまるで透の部屋だと彩子は思った。それと違うのは部屋の広さだ。あの狭い部屋ではベッドの上が自分の定位置だった。そして今は別の理由でここが定位置となっている。

自分の置かれている状況は理解できている。それすら分からなくなるほど酷い状態であったわけではない。それまでもずっと体調は悪く、決してわざとではないが、それを悪化させるようなこともしていた。あの恭介が焦るほどの状態だったようには思えなかった。そして焦る彼を興味深く眺めてしまえるほどの余裕もあった。

恭介は多少なりとも責任を感じていたということだろう。もっとも、彩子は恭介に言われたことをそれほど気にしていなかった。普段であれば気にしただろうが、何よりあの時はそれどころではなかった。今、彼の言葉を思い出してみても、それでも何ということはない。今更あの程度のことでは傷つくなどということはない。あの時は苛立つただけだった。そして今は何も感じることはない。

看護婦が別の点滴に取り替えながら何やら話しかけている。彩子はそれに対して生返事をする。

「そう言えば、数年前にもここであなたを見かけたんですよ」

「そうですね……」

それまで話を聞き流していた彩子であったが、その内容に対しては反応を示した。

それは確か五年ほど前のことだと記憶している。あの頃はまだ、今のような悩みはなかった。そんな頃の記憶は今となっては何の価値もないように思えた。むしろ虚しさだけしか残らない。何故あの頃のままでいられなかったのかと後悔を掻き立ててしまうからだ。

「松永先生、お呼びしてきますね」

「待って！」

突然半身を起こしそれを制止しようとする彩子を、看護婦は不思議

議そつに見る。

「……忙しいと思いますので、今はいいです」

小声でそう告げた。

今、恭介に会うのはできれば避けたいのだ。けれどそれを伝えることはできないため、このような言い方になってしまった。

再び横になった。

少しは良くなったように思えたが、まだまだ起き上がれるような状態ではないようだ。

肺炎ということだった。以前から感じていたこの胸の痛みはそれに因るものなのかとぼんやりと思った。そういう類のものではなく、別の理由からきている痛みだと思っていた自分が馬鹿らしく思えた。ずっと眠り続けていたため、身体は辛いが今は眠ることはできない。

右の手のひらには包帯が巻かれていた。ついでに手当てをしてくれたのだろう。彩子はその後ろくに手当てもせずにガーゼで押さえただけであった。深かったが縫うような傷ではないと勝手に判断し、放っておいた。精神的にも参っていた上に、痛みすら忘れるほどに酷く気分が悪かった。手当てどころではなかったのだ。

けれどこうして横になり、何もせずにいると痛みを意識を集中してしまう。指を動かすことすら躊躇われた。

彩子はふと、あのとき恭介が声を掛けなかったら自分はこうしていただろうか、と考えた。

おそらくこの手の傷は今よりも深くなっていただろう。けれどそれ以上のことにはなっていないと断言できた。決して本気ではなかった。興味本位の範疇に含まれていたものでしかない。何よりそうすることで誰かの気を引こうとしたわけではない。

けれど恭介は勘違いしているだろう。綾子は恭介に誤解されたままであることが嫌だった。かといってその誤解を解くためにそのことを口にするのも嫌だった。

今回のことは、彼にとって面倒であったに違いない。

恭介は何かがあれば、それなりの対応をするだろう。そしてそれに対し何か文句を言うようなことはしないだろう。けれど彩子にとっては彼が自分に何かを言うことが問題なのではなく、思われることだけで辛かった。

彩子は今まで極力、彼に迷惑はかけまいと腐心してきたが、それは一連の出来事のせいであって帳消しになったように思われた。

彩子はずっと何かを考えている。

それは過去のことであつたり、未来のことであつたりしたが、現在と言つた方がいいようなものばかりでもあつた。ここ数日のことと今これから起こるであろう事への想像、その想像を前提とした対処法、そんなことばかりであつた。

このようなことを考えていると時の経過が眠っているときのように早く感じる。

ドアが開かれた。

その方向に目をやらずとも、足音や気配からドアを開けた人物は誰だか分かつた。

彩子は左手をベッドの上につき、力を入れて体を起こした。そして顔にかかつた横髪を耳にかける。

恭介が立ち止まる。彩子は正面を向いたまま、横目だけで恭介を見た。

「いつから？」

突然の問いに対し、彩子は何のことかと聞き返そうとしたが、すぐにそれが症状の出始めた頃のことだと分かつた。

「三週間ぐらい前に引いた風邪が治らなかつたのよ。酷くなつたのはここ数日だけ」

「何で言わないんだよ？」

「……放っておいても治ると思つたのよ」

「治るわけないだろ」

「最近全然会ってなかったじゃない。昨日だって、あの状況で何を言えって言うの？」

非難がましいことを言うつもりなどなかったのだが、問われるほどにそういう言い方しかできなくなる。

恭介は息を吐く。

「まあ……今更こんな話しても仕方ないよな」

そして二人は黙りこんだ。

その沈黙の中、彩子は自分の手に視点を落とした。視線を感じ、恭介の方を見る。

すると恭介は彩子の手を取った。

「たぶん、痕は残ると思うよ」

彩子は顔を背ける。

「どうしてだろうな。彩とは一緒にいるようになってから上手いかなくなった気がするよ」

「それでも、初めの二年くらいは上手くいったじゃない。それも否定するの？」

今度は恭介が顔を背ける。

「……私が恭介を好きさえならなければ、きっと今でも上手くいったと思うわ。何が良くなかったのか、いろいろ考えてみたの。そうしたら結局、行き着くのは私自身だったわ。私が悪いのよ。全部」

「もうやめよう、この話は」

恭介はこの話を振ったのは自分からだったと思いつつも、深まってきたことを回避しようとした。今まで彩子と向き合わず背を向けてきたことの是非を、今更思い直すことはできなかった。

出て行くこうとしていた恭介であったが、思い出したように声をかけた。

「もうすぐ誕生日だね」

彩子は顔を上げ、恭介を見つめる。

「何か欲しいものある？」

そう言って微笑を浮かべる恭介を、彩子にはとても懐かしいもの

のように感じられたが、それを見るのが憚られた。
視線とともに声を落とす。

「……何も無いわ」

恭介は彩子を見る。彩子は先ほどのものと同じに見える言葉に、別の意味を込めて告げた。

「欲しいものなんてない」

彩子の声には先ほどよりは若干、力が込められていた。

それはまるで独り言のように、自らに言い聞かせるようなものであった。

「……そう。まあ適当に選ぶよ」

静かに扉は閉められた。

その音が彩子の頭の中で鳴り響いた。彩子は扉の方に視線をやつたまま微動だにできないでいる。その間、近くに置かれた時計から急かすような秒針の音が漏れてくる。

彩子は勢いよくベッドから降り、裸足のまま部屋を飛び出した。暗く続く廊下だけが彩子の目に映る。遠くに視線を馳せてみるが、次第にその視界はぼやけていった。

*

入院してから四日が経った。

彩子は鏡の前で身支度をしている。鏡に映る、いかにも病人という自分の姿からは目をそらしたくなかったが、現実から逃げてばかりもいられなかった。

ずっと気分は落ち着いている。さすがにまだ楽観的にはなれなかったが、強い悲しみに襲われるようなことはなかった。

この数日間、恭介は帰宅前にここを訪れた。恭介は彩子の担当ではないため、そういつた時間を作らなければ院内で会う機会はなかった。

あれは彼なりの配慮だったのだろう。

そのわずかな時間、二人は和やかに言葉を交わし、ほんの少しだったが笑い合ったりすることもあった。いつになく恭介は彩子に優しかった。ここ数ヶ月だけが違っただけで恭介はずっと彩子に対してそんな風であった。彩子はそれを振り返るほどに、もう恭介を煩わせてはいけないという思いを強くする。彩子がそうする限り、恭介がそのことに触れることもないのだ。

それでも決して彼への想いを忘れることはないと思彩子は思う。忘れてしまった方が、きっと上手くやっていけるような気がする。けれどそんなことができるのなら、もっと早くにそうしている。そして、その気持ちに嘘はなかったと思えるからこそ、忘れるわけにはいかないのだ。

ただ、この想いが今の関係をほころばせる引き金になることも分かっている。いつまでそれを先に延ばせるかがこれからの彩子の目的となるのだろう。いつかはやってくるこのモラトリアムの終焉をもたらずのは、自分からなのか、それとも恭介からなのか。どちらに転んだとしてもその覚悟をしておかなくてはならない。

けれど、終幕を今から予測することは恭介に対する背信だとも思っていた。

透はプレートの名前を確認してから、ドアをノックした。

中からの応答を待ってドアを開け、奥へと進んでいった。

「久しぶり」

「起き上がったたりしていいの？」

「うん。もう平気。明日退院だし」

「……あんまり大丈夫そうには見えないけどね」

透はそう言いながら友人から預かってきたものを彩子に手渡した。彩子はこちら数日すっかり忘れていたのだが、来週から試験が始まる。ファイルには試験の日程表や彩子が友人らに貸していたノートや資料、逆に彼らからのコピー等が入っている。彩子はそれらを手にとって眺めている。

約二週間ぶりに見る彩子は一回り痩せたように見えた。

「本当に受ける気なの？無理しないで追試受けたら？」

「嫌。点が低くなるし」

彩子は顔も上げずに資料に目を落としている。

透の知る限り、彩子の成績は芳しくない。小学校の頃はかなり優秀だったと記憶している。中学に入ってからのこととは分らないが、それでもそれなりの成績を維持していたのだろうと思う。大学に入ってから力尽きたようになったと本人も話していたが、今年度の成績は来年の卒業のこともあり今まで以上に真剣にならざるをえない。まさか卒業が危ういほどではないと思うのだが、彼女には珍しく十一月の末頃には試験の準備を始めていると言っていた。

だからこそ少しでも不利な条件で受けることは避けたいのだろう。サイレント映画のワンシーンのように、無音でありながらも場面は進んでいく。彩子がページを捲るために手を動かすたび、その手に巻かれた包帯が透の目に入った。

白一色に染まっている彩子は珍しい。けれどそう見えるのはこの部屋や衣服や包帯に因るものではないと思った。目の前にいる彼女かどことなく面変わりしている。

透は躊躇いがちに彩子に問いかけた。

「……あれから、どうなったの？」

彩子は一瞬、ページを捲る手を止めたが、またすぐにそれを再開しながら素っ気なく応えた。

「何が？」

透は彩子の反応から拒絶を感じ取った。実際、彩子には透の言わんとしていることが分かっていた。

「……別に話したくないならいいけど、あれから全く何も言わなくなっただけだよ」と彩子にだけ話した。

彩子は資料から目を離し、透を見る。彩子の目に、透は少し憮然としていたように見えた。

「話したくないわけじゃないの。ただ、あまり話せるようなことは

ないから」

彩子はそう言って口元だけで笑った。

「相変わらず秘密主義ね」

「それはお互いさまでしょ」

彩子は資料を脇に置き、ベッドに深くもたれかかった。

「この数日ね、何もすることがなかったから、いろんなこと考えた
り、昔のこと思い出したりしてたの」

透は彩子の横顔を見つめた。

「私はいっぱい嘘を吐いてきたから、どこまでが嘘でどこからが本
当かよく分からなくなつたの。もしかしたら、本当だと思つてたこ
との中に嘘があるのかもしれないし、嘘を吐いたと思つてたことも
実は本音だったりするのかもしれない。でもね、やっぱり私は恭介
のことが好きだつたと思う。根拠はないのに自信だけはあるのよ」

透は以前、彩子の恭介に対する想いを「愛されたいだけ」のもの
と表現したことは彩子に対して失礼だつたと思ひ返した。

元々、彩子は恭介を憧れや尊敬から慕っていた。彼に見放された
くないという負の感情が絡み合うことによつて、ある種、狂暴性を
持った感情へと変わってしまった。

自分だけを見てほしいという我が儘な感情。慈しみとは無縁のも
のであつた。

けれどそれこそ恋と呼んでいいものではないか。

今だからこそ、そう思えるのだ。

彩子はずっと伏せがちだつた顔を透の方へ向ける。

「私、透には秘密ばかりだつたけど、話したことは全部本当のこと
なのよ。透には嘘を吐きたくなかつたの。そうでもしないと嘘ばか
りの自分を認めることになるから」

透は彩子の話を聞きながら、それを自分の中で反芻させていた。

透は初めて自分と彩子の中に共有するものを見出せたような気が
した。透もまた、秘密を抱えてきた。けれど彩子にそれを明かす時
たとえそれがわずかな断片であつてもそこに嘘はなかつた。もつと

も、自分は彩子の言うように「嘘ばかりの自分」を認めたくないから嘘を吐かなかったのではなく、彩子に本音を語ることで自分自身の劣等感の克服を証明したかっただけだ。だから嘘を吐くこと自体には肯定的であり、本音を語ったところで自分の感情は澱んでいることに変わりはない。

けれど、できれば彩子の言うようなものであってくれればいいと感じていた。何より、彩子の口から出た言葉であればそれが正しいもののように感じられた。そう思えたからこそ否定はせず、自分もまた同じであったのだと自身に思い込ませようとしていた。

「……病人のくせによく喋るわね」

ため息混じりに透が漏らすと彩子は笑った。

透は病室を後にし、エントランスから外に出た。一気に風が吹きつけ、思わずコートの前を押さえて立ち止まる。

バス停で列に並び、ふいに空を見上げた。冬に空を見上げることにはあまりない。雲が立ち込め、日がほとんど差さない。まるで濁った水のような水のような透は、その空を自分自身に投影した。

濁った水も時が経てば透き通る。それは一見透き通って見えるが、その底には不純物が沈澱している。結局、本質は何も変わっていない。

だからそれをずっと抱えていくしかないのだ。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

もう何を言っても言い訳にしかならないと思う。

だから最後にこれだけは伝えたかった。確かに君を愛していた。

もしいつかのように会うことができたのなら、きつと今までとは別の形で君を愛すると思う

……このメッセージを聞いてくれただけでも嬉しい

彩子は耳元から携帯を離した。

このメッセージはもう何度聞いたか分からない。恒樹はいつも誠実であつたから、彼のこの言葉を信じられないはずはない。彼は期待をさせるつもりでこのメッセージを残したわけではない。ただその一瞬に存在した確かな想いを残そうとしてくれたのだろう。

彩子はその時、電話を一方的に切ってしまったことを後悔していた。その少し後にかかってきた取ることのできなかつた電話は恒樹からだつた。そしてその二日後に入っていたのがこのメッセージだつた。

恒樹からの電話を切つたあの時、自分は酷く凶暴になつていたように思う。できうる限り感情を押し殺すことは彼への最後の抵抗のつもりだつた。泣くことやみつともなく縋ることをしなかつたのは、何をしてもどうにもならないと分かつていたからだ。一度それをしていいるからこそ、尚のこと無駄だと分かつていた。

そこまで理解した上で感情を殺すというのなら、せめて、最後まで彼の話の話を聞くぐらいのことはすべきだつた。たとえ最後まで彼の話の話を聞いたとしても、その言葉の中に自分の望むものはなかつただろう。それが分かっていたから、向き合うことが怖くて逃げたのだ。恒樹の気持ちを引き止めることよりも自分が傷つくことを避ける

ことを選んだ。そのことは恒樹を傷つけたのかもしれない。

また、香奈子のことも考えることがよくあった。彼女はたった一度しか会うことがなかった人だ。そんな人物に自分は敵意を抱き、振り回し、結局は自分が翻弄されていた。自分はその人を傷つけていたのだ。そう考えることは、更に彩子の胸を痛めた。

彩子は香奈子に嫉妬心を抱いた。それは恒樹と香奈子の関係そのものに対する嫉妬だった。決して自分が手に入れることのできないものを持っている二人が羨ましくて仕方がなかった。

試験の最終日。彩子はどこにも寄らずに帰宅することに決めた。

酷く疲れていた。病み上がり無理をしたせいかもしれない。

また、今日はとても寒い日で、雪が降るかと思われたが、冷たい雨が降っていた。手袋をしていない手は冷え切っており、かじかんだ指で傘を持つことに難儀した。

玄関のドアを開け、誰もいない部屋に明かりをつける。そしていつものようにソファに座ろうとした。

足を向かわせている途中、テーブルの上に大きな箱があることに気づいた。その箱にはラッピングが施されており、メッセージカードが上部に差し込まれていた。

彩子は差し込まれているメッセージカードを抜き取り、それを開く。

そこには「少し遅れたけど、誕生日おめでとう」というたった一行の手書きの文字が並んでいた。

カードをテーブルの上に置き、箱に触れる。

彩子は箱を持ち上げようとしたが、それは思った以上にずっしりとした重みがあった。

今までは手の平に乗る程度の大きさであることが多く、箱を見ただけで中身に予想がつくことがほとんどだったが、今回のこれは全く想像がつかなかった。これは今までのものに比べあまりに大きく、

そして重い。

彩子は包装紙を丁寧に解きながら、恭介に何がいいかと聞かれた時のことを思い出していた。

彩子は、ろくに考えることもせずにも何もいらないと答えてしまっていた。恭介にそんなことを問われても辛いだけだったため、話をそこで終わらせたかったのだ。以前、同じようなことを聞かれた時もまた、彩子は同じようなことを言った。

彩子が期待していた未来は失われてしまっていた。そんなときにどうして先のことを考えられるだろうか。そんな現在の延長線上に確実に存在する未来を肯定的に捉えることなどできなかった。

今までの過程の中で自分はどうなるかを失ったのだろう。得られたものは何か一つでもあったのだろうか。それを思うたびに、強い後悔が沸き起こっていた。そして虚無に襲われるだけだった。

彩子はゆっくりと箱を開けた。

箱の中に納まっていたのは、ガラスケースだった。それは割れてしまったあのガラスケースに非常によく似ていた。もちろん細部を見ればこれが別の品であるということは分かる。あの壊れてしまったガラスケースは表面に人魚の姿がグラヴィールされていたが、これは花の模様だ。あんなに古い物とよく似た品を恭介が見つけてきてくれたことに驚いた。そして何もいらないう言ってしまった自分に対し、彼がこれを選んでくれたことをどうしようもないほどにうれしく思った。

表面をなぞるようにそつと指で触れてみた。

彩子はあのガラスケースを割ってしまったとき、もう全てがなくなってしまうような気がしていた。

けれど、これが彼の手によって彩子の手に戻った。この事実さえ残っていればそれでいいと思えた。

全てのものに今とは違う別の形が存在し得たのかもしれない。けれどそれと同じようにこれから先、今の形が変化し得るのかもしれない。

たえ失ったものの方が多くとも、きつと全てを失ったわけではない。
そう思うことこそ、過ぎ去った日々に見出す唯一の方法なのだ。

*

「私達の関係ってどう見えるのかしらね？」

「年の離れた友達、じゃないですか？」

「悪かったわね、年が離れてて」

「気を悪くしないで下さい。三十歳なんてまだまだ若いと思ってますから」

「これでも三十一なの」

「年相応だと思えますよ」

そして二人は乾いた笑いを漏らした。胃が痛くなりそうな会話をしながら、互いにそれを楽しんでいる。

三月某日。

彩子はもう二度と会うことはないと思っていた香奈子と遭遇した。二人の距離がもう少し離れていけば、互いの存在を認識したとしてもそのまま立ち去って行くことができたのかもしれない。しかし二人はかなりの至近距離で顔を合わせてしまったため、無視することもできずにいくつかの言葉を交わした。

結局、こうしてカフェでお茶を飲んでいる。彩子はアイスティーを、香奈子はホットコーヒーを注文した。

しばし会話が途切れて沈黙が続いた後、彩子はこう切り出した。「今日あなたに会えて良かったと思ってます。あなたには悪いことしたと思ってて、できれば謝りたかったので……」

彩子はそう言いながら少し伏し目がちになった。

「……あなたはいいわね」

彩子は噛み合わない香奈子の言葉に引っかかりを覚えた。そして

無言のまま顔を上げる。

「私は、そんな風に可愛くなれないわ」

「……別に、私だって可愛くないと思いますよ。いろんな嘘を吐いたり、人を騙したりすることに罪悪感ないですから。でも、あなたに悪いと思ってるのは、駆け引きでも何でもなくて本心ですよ」

「あなたみたいに繕うこともできないって言ってるのよ」

「不器用なんですね」

「あなたが器用なのよ」

「嫌味ですか？」

「そう受け取ってもらって結構よ」

香奈子の投げやりな物言いに、彩子はクスクスと笑う。

香奈子はコーヒールを一口飲む。

彩子の様子を眺めながらカップを握る指に少し力を加えた。

「……私は謝らないわよ」

彩子は二、三度瞬きをし、首を少し傾げた。

「あなたが私に謝るようなことなんてありませんでした？」

「殴ったことよ」

香奈子は吐き捨てるように呟いた。

その香奈子の様子に、彩子は小さく息を吐く。

「あのとき、私はわざとあなたを怒らせるような言葉を選んでたんです。その結果があれなんで、あなたが謝る必要なんてないんですよ」

そう言っつて彩子は一口アイステイラーを飲んだ。

「……あんなに頭にくること言われたの、初めてよ」

彩子も笑いかけながら、付け加える。

「私も誰かに殴られたのなんて初めてでしたけど」

香奈子はこめかみの辺りに手をやりながら苦笑した。

「あなたは私に聞きたいことたくさんあったでしょう？でも私はあなたに聞きたいことなんて何もなかったからその場の主導権を握れたんですよ。教えるも教えないも私の自由ですから」

「本当に何も無いの？例えばどうやって出会ったとか興味ない？」
「大学が一緒なんですよね？だったら大体想像つくからいいです。
友達の友達だった、とかでしょう？」

香奈子は笑う。彩子は自分の言ったことが正解であったのだと確信した。彩子はふと、思い出したことがあったため香奈子に問いかける。

「……恒樹の、雨の日の思い出って分かります？」

香奈子は彼女に相応しい挑発的な笑みを浮かべる。

「それを教えるも教えないも私の自由だって分かっている？」

「……知らないなら知らないでいいですよ？」

彩子がそう言いながら正面を見たとき、香奈子は彩子が彼女について知っている中で一番穏やかな顔をしていた。そしてその問いに答える。

「たぶん、傘じゃない？」

彩子は香奈子の話そうとすることに食い入るように聞き入った。あのときの彼女も今の自分と同じだったのかと頭の隅で思っていた。「十年くらい前、突然の大雨のせいで恒がずぶ濡れになってね。あんまりみつともないから私の傘を貸したことがあるの。貸したというより押し付けたんだけどね。でも恒ったら、長い間あの傘返してくれなかったのよね。結局私の手元に戻ってのって、一緒に住むようになってからのことよ」

香奈子の話していることが恒樹の言っていたことと同じだという証拠はどこにもない。しかしそれが同じだと考える方が、いつか自分にとって心の平穩に繋がるのはずだと思い、それを否定しようとする気持ちを抑えた。

けれどその気持ちとは裏腹な言葉が彩子の口をついて出る。

「恒樹はいい思い出、って言ってたんですけどね」

それでもその表情は内面と相違ないものであった。

「いい思い出でしょ？どう考えてみても」

「でも静かにしておいてほしいときってあるじゃないですか？そん

なときに構われてもありがた迷惑に感じるかも」

香奈子はわずかに眉を寄せた。彩子はまた自分が何か気に障ることを言ってしまったのと焦りを覚えた。けれど香奈子の言葉はそれを安息に変えるものだった。

「……あなたと恒は似てるわ」

その言葉に彩子は少々驚いたが、きつぱりと肯定する。

「でしょうね。私もそう思います」

「構って欲しくて仕方がないって顔してるくせに、こっちが手を差し出してもそれを振り払ったりするのよね。あなたもそう？」

彩子は沈黙をもって、それを肯定した。そう言えば恒樹にもそんなところがあったと思い出す。

「ずっと、壊れ物を扱うような関係だったわ。だから私といっても、慰めにはなっても救いにはならないんだと思います。でもあなただつたら、きつと傷つけ合つてでもその先に進めるような……そんな気がします」

「……傷つけてばかりよ」

香奈子は悲しげにそう呟く。けれど、その声にはどこか余裕さえ感じられるものがあった。

もはや彩子が何か言葉を口にする必要はないのだ。

彩子の気持ちを感じとったかのように香奈子は席を立ち、この場を後にしようとした。思わず彩子は香奈子にこう告げていた。

「私に会ったこと、恒樹には言わないで下さい。こんなこと、言う必要のないことかもしれませんけど」

「……言ったらいけないの？」

彩子にとって香奈子の言葉は意外だった。香奈子は恒樹に話すつもりがないものとはばかり思っていた。

黙り込んだ彩子に香奈子は笑いかける。

「別に話したっていいじゃない。今すぐに話すわけじゃないけど、いつか話すかもしれないわ」

「……お好きに」

彩子はそう言って顔を背ける。
窓の外ではアカシアの花が風に揺れていた。

しばらくするとガラス越しに香奈子の後ろ姿が彩子の視界に入った。彩子はそれを眺めながら、頬杖をつく。
そして静かに目を伏せた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4918e/>

Private Room

2009年5月29日01時04分発行